



文學士 江波 熙 著



古語は斯く學ぶ

東京 有精堂



緒言

「國文解釋の力は、どうして養つたらよいか。」とはよく受ける質問である。それに對して私は、「まづことばをよく知ることだ。讀む文の祖先である話のそもくは、斷片的なことばを並べることであつた。それから段々工夫してことばとことばを連ねてゆくうちに、そこに一定の法則が出来、またそれを守るやうになつて、次第に自分の思想を複雑に且つ委細に表はすやうになつたのだ。だから、文の出来た、いやそれ以前の人間の話といふものが出来た當時にまで溯つて、順序を立ててことばを覺えるやうにさへすれば、まづ大體は文の意味がとれるものである。尤も後世になつて進歩していつた文などでは、相當な文法的智識をもたなければ正確な解釋は出来るものでない。が、ほんたうは文法は第二だ。まづ第一に最も大切なことはことばを覺えることである。」と。

「では、ことばはどうしたら覺えられるか。」と質問される。言ふまでもなく、これは文を讀んでその中で覺えるのが一番いい。が、初學者など手近の二つや三つの註釋書を讀んだところで仲々覺えられるものではない。それは、すべての註釋書がさうであるが、語解のところではただ語義が懇切に説かれてあるだけであつて、如何なる手段方法によつて讀者に之を科學的に又心理的に覺え込ませるかなどはてんで考慮

に置いてない。そこは單に著者が學識の程を示す場所ではない。考へてみると頗る不親切なやりかたである。では現實には如何にしてことばを覚えようとする欲求が満されてゐるであらうか。

之に對する解答の唯一無二なるもの、それは巷間に散見する「國文單語集」的小著である。あ(足)の次にあ(吾)、その次にあいぎやうといふ風に、前後左右何等縁故關係の無い語を機械的に五十音順に並べ、手頃な量なまとめておけば單語集が出来ると思ふのである。たとひその單語の数が三百や五百の少數なものにして、互に縁故の無い語を、あからはじめてを、まで、虱つぶしに覚え込むことなど殆んど不可能である。最初の五頁や十頁は、それでも我慢しながら覚えようとするが、それが終まではとも續くものではない。殊に三百や五百のことばはしか覺えないのではどうにもなるものではない。その五倍も十倍のことばを羅列するとなると、それこそ覺えるどころではない。先に厭氣がさしてしまふ。このやうな滑稽な悲劇が常に繰返されてゐることを我々の立場として黙してゐるわけにはゆかぬ。

それではどうしてことばは覺えるか。言葉は五十音順に並べると、成程前後何等關係のないものになつてしまふが、ことばといふものは、一つのことばが出来たらそれを親にしていくつものことばが出来るとのである。致てこしらへるとは言ふまい。出来ると言つた方が適當であらう。出来るのだからそこには無理がない。別に學者がこしらへたのではない。無學な庶民の間にも、いつの間にか次から次へと言葉が出来ていつたのだ。斯ういふ次第であるから、今われ／＼は、その言葉の出来た當時に溯つて、ごく平ら

かな氣持で、Aの言葉からB、BからC、それではDも斯うして出来たと、次々に糸をたぐり寄せれば、いろ／＼な關係をもつた一連のこ。と。ば。が。集。ま。つ。て。く。る。

本書は斯うした考へのもとに、假に著者が一連づつにたぐつたことばを讀者に示したもので、これによつて成程成程と領きながら、一つの言葉を覺える努力で數倍の言葉を雖なく覺えることが出来るであらう。著者多年教壇の經驗から、最初に黒板に書いた一つの言葉から次々と發展し（文法的）たり、或ひは聯想し（心理的）たりすることばを書き連ねてゆくことによつて、實際的に效果のあがることを強い自信をもつて確かめてゐる。そしてこの書は、一頁二頁と見てゆくうちに古語の智識が合理的に確實に入つてくるばかりでなく、ことばに對する觀察手段をも覺えることになる。本書は著者多年考慮してゐたところにより試に編んだものであり、類書の全く無いものであるだけに不十分なところは勿論多々あるであらう。が、古語學習の現状を現状のままに放置するに忍びぬままに敢てこの書を成し初學者に勧める次第である。

八月五日

著 者 識

凡 例

一、一般の單語集は、第一頁から逐一見て行つて覚えさせようとしてゐるが、その期待は大體に於て外れ勝ちである。が、本書に於ては、さうした方法でありながら、より以下の努力を以てして、十分に目的を達し得るやうに單語を排列したつもりである。讀者は比較的内容の豊富なのに厭倒されることなく、全部精讀せられることを希望する。

一、數語づゝ一連にしたものはじめに提示した粹入りの語は、必ずしも重要語とは限らない。その前段の最後の語との關聯を考慮し、同時にその一連の語の導き役として適當と考へたに過ぎない。

一、一つの言葉を覺える時、それだけに限らず、その一語を基にして頭を働かせつゝ、數語を同時に覺えるやうにして欲しい。たとへば、一つの文におひしくといふ語が出て來た時、索引によつて二八八頁のしくの條にあるのでその語義を知ることが出来るが、たゞそれだけにしてはいけない。この語の前後にふきしく ふりしくといふの「しきりに」の意を表はす接頭語しきのつくしきなきしき

のぶが例文を引用して出てをり、又、ひとしきりひとざかりといふ語まで出てゐる。これ等の數語は別段の勞力なくしてすぐ覺え込まれるものであるから、おひしく一つを索引しても、數倍の言葉を容易に且適確に自分のものとすることが出来る。

一、卷末に索引を設けた。語數にして約二千三百、純粹の辭書としては拙著「新撰古語辭典」が至便であるが、本書は本書としての獨特の内容を持ちながら、これだけの語彙があるから、差し當つて辭書の役目をも果すわけである。

一、第一頁から最終頁に至るまで、大體に於て息切れのせぬやう、坦々たる大道たらしめた。第一頁の自稱の人代名詞 **あ** から起して、同義語 **あれ** **わ** **われ** **まろ** **こ** **こもと** **それがし** **なにがし** を同時に擧げ、ついで對稱に及び、更に他稱から不定稱へと、一氣に二十數語をわがものとし、次段では人代名詞と指示代名詞の兩方に及んでゐる **なにくれ** を基に、**なにやくれや** **なにくれとなく** と極く滑らかに進め、次には、人代名詞の記憶の新しいところを利用して **どち** から**おもぶどち** **われどち**と平易に進めることが出来る。

一、一連の語は大凡次のやうなものを以て集合した。

イ、なまのつくなまざかし、なまざぶらひ、なまなま、から、なまなが、なまじひ、といふ風に、同じ

接頭語を持つもの

ロ、あいきやうから發して、あいきやうじへ、おろじへ、まよじへ、あなじへ、ゆふじへ、ゆふじへ、

などと、同じ接尾語を持つもの

ハ、くが、くがぢ、しみづら、かはづら、やまじり、すそわ、うらわ、うらやまなどと、縁語で迎つて

ゆくもの

ニ、おゆらく、おいらく、およづく、ねむ、ねびととのふ、ねびまざる、ねびる、といふやうに、同義

語或ひは類似語

ホ、さかしからさかしさ、さかしがる、さかしだり、さかさかし、さかしら、さかしらがる、といふ風に

に語形を變へて品詞の轉じてゆくもの

ヘ、なむ、なみある、ひとしなみなどと、一つの語幹を基にして他の語と複合してゆくもの

ト、あはれむ、あはれぶ、あはれみ、あはれび、あはす、あます、あゆぶ、あゆむ、いなむ、いなむ

ことび ことみ ねふる ねむる といふやうに、一定の法則によつて音韻の變化するもの
 ち、よすが たつき たどきから、よすぎ よなる よにあふ よにあり よにしろず よになし よ
 べたず よにあふ よはなる よきつくすと、心理的に聯關して考へられるもの 以 上

古語は斯く學ぶ

江 波 熙 著

あ (代)「吾」「私」

—あが佛と守りぬたらめ。(徒然草)

あれ わ われ まろ こもと それがし なにがし —一人稱あと同義。

—なにがしも侍の方に侍らむ。(増鏡) —私も侍の諸所の方に居りませう。

ななれ そこ そこもと いまし こんぬし わきみ わぬし わどの —二人稱で「汝」あ

なた」の意。

—そこにはいかに見所ある心深き言の葉多くものし給ふらむ。(鈴屋集) —あなたには、どんな

に見事な趣深い歌を澤山おつくりになられたことでせう。

かかれ——三人稱「彼」

たたれくれくれがしそれがしなにがし——不定稱で「誰」「誰それ」「某」の意。

——何の御子、くれの源氏など、(源氏物語)

ぬしうし(名)——人を尊敬するに添へる語。

——ここに前田のぬしの高殿こそ、(琴後集)

なにくれ

(名、代、副) (一)「誰某」「あれこれ」「色々」(二)「何や彼やと」「様々」

——(一)多くは本所の家司、何くれが女どもなるべし。(増鏡)——誰某

——(二)何くれと騒ぎあひたれど。(増鏡)——何や彼やと手をつくしてみたが、

なにくれや——「何や彼や」

なにくれとなく——「何々といふことなく」「どれこれのきまりなく」「何かと」

——今の世に現はれたるさうしども何くれとなく數多かるが、(俳諧仕様帳)——今の世に現はれて

ぬる書物どもは、何や彼やと數多くあるが、

どち

(名)「同志」「仲間」

「隔なきどちさし向ひて。(徒然草) 氣のおけない同志

おもふどち——「氣の合つた友達」

われどち——「我同志」「自分等仲間」

——うちあるわれどちの遊びにも。(十訓抄)

みなひと

(名)「皆の人」

「夏の夜のみじかくてみなひといぎたなきに。(松屋文集) 夏の夜が短くて、誰も誰もぐつすり寝込んでゐる折。

ひとみな——「すべての人」「残らず」

よひと——「世の人」

「すべてくだりたる世ひとの心ぐせにて。(琴後集)

このも

(代)「こちら」

「をちもこのもあさるままに。(うけらが花)

このもかのも——「あちらこちら」

そとも——(一)「外」「外側」(二)「後の方」

——(一)「そとも」の小田の穂波は、(琴後集)

みのも——「水の表面」

たのも——「田の面」

たる——「田の面」「田の中」「水田」

——あるはずそわのたるにいたりて、(方丈記) 田

た(一)——「百姓」

これやこの これぞこの (句) 「これが例の」

——おほかたは月をもめでじこれぞこの積れば人の老いとなるもの(古今集) 月は良いものだが

大抵はもう月を賞翫すまい、何故なれば、月を賞することが度重なると、やがて老年が来るから

いづち いづら (代) 「何處」

——いづちいにけん。(吉野拾遺)

なち——(一)空間的に、「遠方」「彼方」(二)時間的に、「昔」「以前」「將來」

——(一)浦よりおちの、(増鏡)——遠方

——(二)をちの日はむぐらがもととはせ給ひて、(琴後集)——以前の日—先日

なちかた——「あちらの方」「遠方」

なちこち——(一)「遠方と此方」「そこ此處」(二)「昔と今と」「將來と現在と」

いづこはあれど

いづくはあれど(句)「どこどこといふ中にも別して」「特に」

——いづこはあれど神の宮居には、(権園文集)——とりわけ神社には、

いつはあれど——「何時といふ中にも別して」

なにはあれど——「色々物事はあるが」「とりわけ」

そことしらす

そこともしらす(句)「どことも解らない」「あてがわからない」

——雄兎薊蕪のゆきかふ道そこともわかす、(奥の細道)——どこといふ見當もつかない

そこともいはず——「別にどこと定めない」

ときわかす

(句)「時節の區別がない」

—富士の高嶺を見れば時わかの雪なれども、(東関紀行)

ときとなく ときぞともなく——「定つた時なく」「いつも」

—上野はときとなくよろし。(年々隨筆)——いつも

ときじ——(一)「時はづれ」「その時期でない」(二)「時を論じない」「いつといふ時がない」

—名だたる高嶺は時じくものから、(うけらが花)——有名な高嶺は時をわかたず雪が降るもの

いづれとなし

(形)「どれと定つてぬない」「どれもこれも」

—庭の梢どもいづれとなく茂りあひたるものから、(鈴屋集)——どれもこれも

いつとなし——「いつといふ事がない」「いつも變らない」「何時までといふことがない」

—いつとなき縁も、(樞園文集)——いつも變らぬ

—世ばなれたるすみかは、いつとなく心すみて、(樞園文集)——いつも

なにとなし——(一)「何といふことがない」「自然である」(二)「これと言ふ程のことがない」「平凡で

ある」(三)「何ときまつたものがない」「一切に亘る」(四)「何といふ目的もない」「漫然としてゐ

る」無意識である」

—(二)何となく明けて来て、(増鏡)——格別の事もなく

そことなし——「そこと指す處がない」「一面に亘る」

そのこととなく——「何といふ事なく」「何となく」「何かにつけ」

—その事となく過差を好み給ひけり。(徒然草)——何かにつけ贅澤をお好みになった。

かにかくに

(副)「兎に角」「あれこれと」「色々」と

—かにかくに旅ばかり憂きものは無かりけり。(權園文集)——兎に角旅ぐらゐつらいものは無

いわい。

かにもかくにも——「兎も角も」「結局」

とにかく——(一)「あれこれ」「何や彼や」「(二)「何にしても」

—(一)とにかくにとりあつめたる御心細さ。(平家物語)——何や彼やと一緒になつた御心細さ、

とにかくにも——「何にせよ」「何れにしても」

とかくとかう——(一)「あれこれ」「いろいろ」「あちらこちら」「(二)「どうかすると」

—(一)「とかうまぎらはして、こち參らせよとのたまひて。(源氏物語)——色々にするかして、自分

の方へよこす様にしなさいとおつしやつて。

とやかく とやかう——「あれこれ」色々と

とてもかくても——「どうしても斯うしても」どの様にしても「結局」

——とてもかくてもありぬべけれど、(琴後集)——どの様にしても構はないが、

といふもかくいふも——「ああ言つても斯う言つても」どう言つたところで

いぬ

(自動) (一)「行く」「歸る」(二)「過ぎ去る」「経過する」

——(一)「いづちにけん」(吉野拾遺)——どこへ行つたか。

——(二)「まことやいにし世をしのび」(泊酒舍集)——過ぎ去つた

いにしへ——へは方角を表はす。往にし方の意。「昔」「先日」「以前」

——いにしへ長月のすゑつかたにはやうやう冬の近づくけにや、(蘿月庵文稿)——以前九月の末頃

には、段々冬の近づく爲であらうか。

むかしへ——「昔の方」「昔」

——むかしへは今の世よりもひらけぬれば、(花月草紙)

しりへ——「しりの方」うしろ」

まへしりへ——「前後」「左右」

——輕々しくまへしりへをもよく考へあはさす、(玉勝間)——前後

しりくち——「後と前」「辻褄」

——語ることはしりくちあはず、(玉勝間)——辻褄

よるべ——へはあたりの意。「よる方」「頼るところ」

ゆかり——「縁」「縁者」「たより」

——内々彼がゆかりをたづねて、(十訓抄)——縁者

かかなべて

(副) かは時日の意。「日を並べて」即ち、「日を重ねて」
——かかなべて十まり二つの月はたてれど、(賀茂翁家集)

ひにけに——「日に日に」

けながし——「時日が長い」

つきにけに——「月々」

ひにそへて——「日の経つにつれて」

—替は日にそへて人にもそむけられゆくに、(増鏡)

ひなみ——(一)「日ごと」(二)「日の順序」

つきなみ——(一)「月ごと」毎月」(二)「月の順序」

—(二)照る月なみも数みゆばかりすすみ渡れり。(東關紀行)——照る月の次第(何日といふこと)

も数へてわかるくらゐ澄み渡つてゐる。

としなみ

(名)(一)「年毎」「毎年」(二)「年の順序」「年齢の順」「年月」

としなみ——年の寄るのを波に譬へて言ふ。

としのは——「毎年」「年々」

—としのはに花の盛りには、(うけらが花、毎年)

またのひ

(名)(副)「翌日」

またのとし——「翌年」

またのあした——「翌朝」

ひごろ

(名) 副 (一)「多くの日」「數日」(二)「この頃」「數日来」(三)「平常」

——(一)ひごろおはしまして、(増鏡)——幾日も

つきごろ——「數月來」

——この月ごろにおぐしおほして、(増鏡)——この數月來髪を生やして、

としごろ——「長い年月」「年來」

よごろ——「此頃毎夜」「數夜」

けふあす——「今日と明日」「間もなく」「漸く」

——けふあすまかりかくなんするに、(十訓抄)——間もなく死ねてせうから

きのふけふ——「昨日と今日」「近頃」

さよ

(名) さは接頭語。「夜」

さよごろも——「夜着」「夜具」

さよしぐれ——「夜中の雨」

さよちどり——「夜飛び鳴く千鳥」

ともちどり——「群をなしてゐる千鳥」

ともなしちどり——「つれの無い千鳥」

さなしか——「牡鹿」

ついたち

(名) (一)「月の第一日」(二)「月初」上旬

つこもり——(一)「月末の日」(二)「月末」下旬

つこもり(二)うづきのつこもりまつきのついたちなどのころほひ、(枕草子)陰曆四月の下旬頃から

五月の上旬頃にかけての頃。

すがら

(接尾) (一)「そのまま」ながら(二)「さながら」終まで」「すべて」

みちすがら——「道々」

よもすがら——「終夜」「夜通し」

ひねもす ひめもす——「終日」「一日中」

——ひめもすこのあたりにただよひぬれば、(花月草紙)

ただ

(副) (一)「これだけ」 (二)「ひたすら」
「全く」

ひただ——「終日」

よただ——「夜通し」

ただ——(一)「いたづら」「無意義」「無益」 (二)「普通」

——(一)「夕月の面白きをただにやは過さむとて、(琴後集)——空しく見ないで過されようかと言つて。

——(二)「ただに言ひては、(玉勝間)——普通

ただびと たたうど——(一)「天皇に對して、「皇族」 (二)「皇族に對して、「臣下」 (三)「攝關などに對して、「一般の貴族」 (四)「無位無官の普通人」「凡人」

のみ——(一)「それだけ」 (二)「ほんたうに」「ひたすら」

——(二)「よろづの男をば賤しくのみ思ひくたし、(十訓抄)——すべの男をひたすら賤しいものにさげすみ、

あいぎやう

(名)「可愛らしさ」「顔付の可愛いこと」

あいぎやうづく——づくは、そのやうになる、さういふ様子である、の意であるから、「可愛らしくなる」顔が美しい」

——何事もあいぎやうづき、(増鏡)——何事につけても愛らしさがあつて、

おいづく——音轉しておよづくともなり、老いづくの意から、「年寄る」「大人らしくなる」「ませる」「地味である」

——この御子のおよづけもておはする御かたち心ばへ、(源氏物語)——この御子が日にく成人してゆかれる御容貌や御氣質、

——晝はことそきおよづけたる姿にてもありなむ。(徒然草)——晝は簡素にして地味な姿でも構はない。

あさづく——朝になる」

ゆふづく——夕方になる」

——夕づけて雪やもよほす、(藤井冊子)

ゆふづくひ——「夕日」

ゆふづくよ——(一)「夕月の出てゐる暮方」(二)「夕月」

——(一)ゆふづくよのおぼつかなきほどに、(徒然草)——夕月の出てゐる暮方のうす暗い時分に、

——(二)ゆふづくよほのかをかしきを、(増鏡)——夕月

ゆふさる

(自動)「夕方になる」さるは「その時機になる」「到る」

——ゆふされば衣手さむしみ吉野の吉野の山にみ雪降るらし(古今集)——夕方になると袖口の方

が寒い。この寒さでは、吉野の山には多分雪が降ることであらう。

はるさる——「春になる」

あきさる——「秋になる」

ゆふさり——「夕方になること」「夕方」

よさり——「夜になること」「夜」

——よさり、對面に何事も聞えむ。(増鏡)——夜、對面の上、何事も申し上げませう。

あける

(自動)「日が明け又暮れる」「月日がたつ」

あけくれ——(一)名詞、「朝と夕」「終日」(二)副詞、「明けに暮れに」「朝夕」「いつも」

おきふし——(一)名詞、「起き臥すこと」「朝夕」(二)副、「起きても寝ても」「常に」

あさゆふ——右と同じく二義をもつ。

あけくらす——「月日を送る」

あした——「朝」「明日」

——あしたのけにあきて。(賀茂翁家集)

つとめて——(一)「整朝」(二)「早朝」「朝」

——(一)何がしの川のほとりにやどりけるつとめて。(権園文集)——整朝

——(二)つとめてごとに伺ひ見れば、(宇治拾遺物語)——朝

あしたゆふべ——「朝と夕」「平常」

あさにけに——朝に夕にの意。「朝夕」「いつも」

ゆくさ (名)「行く時」

かへさ かへるさ——「歸る折」「歸る方」

——かへさはとく暮れにけり。(鈴屋集)

いるさ——「入る折」「入る方」

——月のいるさの山の端を。(平家物語)——入る方

こぞ きぞ——(一)「昨日」(二)「昨夜」(三)「昨年」

よふ——「昨夜」

——よふの夢に故郷はさしおかれて。(鈴屋集)

くる

(自動) (一)「夜になる」(二)「時日がたつ」「年が終る」(三)「目がくらむ」(四)「遠方にくれる」

——(二)春の日がすくれ。(十訓抄)——春の日がたつ

——(三)目もくれ足もなえて。(太平記)

——(四)ただくれまどへる心地どもなり。(増鏡)

ゆきくる——「行くうち」に日が暮れる」

ゆきくらす——「歩き歩いて日を暮す」

かきくる——(一)「暗くなる」(二)「心が暗くなる」

かきくらす——「くらむ」「何も彼もわからなくなる」

くれふたがる——「すっかり暗くなる」

——世の中くれふたがりておぼえまし。(枕草子)——世の中がすっかり暗くなつたやうに思はれる事だらう。

くれまどふ——「心が迷ふ」「途方にくれる」

くらす

(他動)「暗くする」

くらす——「日を過す」

ふりくらす——「降つて日が暮れる」「終日降り道す」

ひぐらし——「終日」

あがれるよ

あがりたるよ(名)「上世」

くだれるよ くだりたるよ ながれてのよ——「後世」

そのかみ——(一)「其の當時」「その時」(二)「その昔」「以前」

かみつよ——「上代」「昔」

しるし (名) 「効能」「甲斐」「靈驗」

一人と生れたらむしるしには、(徒然草) 甲斐

あと (名) 跡の意。 (一)「足跡」 (二)「痕跡」「證據」 (三)「行方」 (四)「往來」 (五)「型」「例」

(六)「行迹」「遺跡」 (七)「筆蹟」

一 (一)「まさきの葛あとを埋めり。(方丈記)」

一 (二)「今は世に絶えてそのあとも残らず。(琴後集)」

一 (五)「露ばかりもあとと違はじと心にかけて。(琴後集)」

一 (六)「住家は即ち浄名居士のあとをけがせりといへども。(方丈記)」

一 (七)「いにしへ人の書けるあとを見れば。(うけらが花)」

あとたゆ (一)「往來がない」 (二)「行方がわからなくなる」 あとの (三)及び(四)参照。

一 (二)「山の奥谷の底にあと絶えはてむもさすがに心細く。(樞関文集) 行方知れずなつてしま

ふのも。

あととふ (一)「人の行方をたづねる」 (二)「亡き人のあとを叩ふ」

—(二)あととふりさも絶えぬれば、(徒然草)

あととむ——(一)「跡をとどめる」「とどまる」「この世にとどまる」「生きながらゝる」「(二)「あとをた

づれる」「行先をたづねる」「とむは「たづねる」

—(一)「この世にあととむべきにもあらず、(源氏物語)

あとなし——「行方が知れぬ」「跡かたがない」「證據がない」

あとほかなし——(一)「あとかたがない」「(二)「ほかなし」

て (名) 「筆跡」「書」「字」

—御手もいとめでたく、(増鏡)——筆跡

ふみで ふでのあと みづくきのあと とりのあと——「筆跡」

—古へ今のうつしふとりのあとを、からもやまとも廣くつどへて、(琴後集)

みづくき——(一)「筆」「(二)「筆跡」「(三)「手紙」

ふでのしりとはる——「手をとつて教へ導く」

ふみ

(名) (一)「文章」「文書」「書物」 (二)「學問」「文學」 (三)「手紙」 (四)「漢詩」

—(一)すべてふみくさをつくりいでむには、(琴後集)——すべて書物を一種作り出さうとするには、

—(三)念ぐ道なりといへば、ふみも數多はえ書かず。(十六夜日記)——手紙
ふまき——「書物の上を包むもの」「帙」轉じて、「書物」

—向へるふまきもやうやう見えすなりゆくに、(樞園文集)——書物
ふづくゑ——「書机」

ふばこ——(一)「書籍を納れる箱」(二)「書状を入れて往復する箱」

とふ

(他動) (一)「質問する」(二)「とり調べる」吟味する」(三)「訪れる」見舞ふ」
とぶらふ とむらふ——「訪れる」見舞ふ」

—上達部、殿上人多くとぶらひいましけり。(増鏡)

とぶらひ とむらひ——「訪れ」見舞」

—かぎりなりと聞きて、とぶらひに人をつかはされければ、(十訓抄)——最期であるといふので、
見舞に人をやつたところが。

こととふ——(一)「話す」(二)「問ふ」(三)「訪れる」

—(一)「いづれの時にか」とはむ。(琴後集)

(二)「我師よ待て」とはむ水上はいかばかり吹く山の嵐ぞ(新古今集)——たづねよう

—(三)「夕の嵐夜の月のみぞ」とふよすがなりける。(徒然草)——夕の嵐や夜の月しか訪れてくるものはない。

おと (名) (一)「音」(二)「噂」(三)「訪れ」(便り)

—おとに聞くと見る時とは。(徒然草)——噂

—(三)としごろ住む人の久しくおとせぬとぶらひがてらまかりけり。(鈴屋集)——年來住んでゐて、長い間訪れしない人が、たづねかたんに来た。

おとづる——(一)「音が聞えてくる」(二)「訪問する」(音信する)

—(一)「鹿の音の枕におとづるるを。(十訓抄)

—(二)「文も數多はえ書かず、唯やんことなき所ひとつにぞおとづれきこゆる。(十六夜日記)……おとづれ——(一)「音が聞えてくること」(二)「訪問」(音信)

—(二)部のおとづれいつしかに。(十六夜日記)『音信』

おとなふ—(一)「音が響く」「音が聞える」(二)「訪れる」

—(一)遣水心細くおとなひたり。(十訓抄)

おとなひ—(一)「音」「聲」「さわぎ」(二)「訪問」

—(一)露のほひ。風のおとなひ。(琴後集)「音」

おとにきく—「有名である」「噂に聞く」

ひびく

(自動) (一)「轟く」(二)「世に聞える」「評判する」「噂する」

—(二)天下がしましくひびきあひたり。(増鏡)「天下にやかましく評判しあつた。」

ひびき—(一)「影響」(二)「世の評判」「評判」「さわぎ」

ひびかす—(一)「響かす」(二)「恐れさす」「恐れ慄かす」(三)「評判にさせる」「耳目を驚かす」

—(二)源頼朝日本國をひびかすべきかは。(平家物語)

—(三)御心ゆく限り世をひびかして。(増鏡)「思ふ存分世人の耳目を驚かせて。」

とよむ

(自動) (一)「鳴り響く」(二)「大聲をあげる」「さわぐ」

—(一)おびただしくとよむ音に物いふ聲も聞えず。(方丈記)——ひどく鳴り響く音の爲に物言ふ聲も聞えぬ。

—(二)あれ狐ととよまれて、(徒然草)——さわがれて

とよみ——(一)「鳴りひびき」(二)「さわぎ」大笑ひ

—(二)その程のとよみいみじき思ひやりぬべし。(増鏡)——感動

とよむ——とよます——他動詞。

ゆする——(一)「ゆり動く」(二)「大騒ぎする」

—(二)世の中ゆすりさわぐさまことの葉もなし。(増鏡)——世をあげて大騒ぎまくる有様は、

言葉にも言ひ盡せない。

かまし

(形)「やかましい」

かま——かましの語根。

—あなかまあなかまとて。(増鏡)

かしまし——かしかまし——かまびすし——「やかましい」

—わらはべの聲のかしましく聞ゆるは、(樞園文集)

のる

のぶ のぶ(他動)「述べる」「告げる」

—たたへごと竟へ奉らくとのる。(祝詞)

—はかなき言の葉をのばへ。(琴後集)

のたまふ のらず —のるの敬語。「仰せられる」

のる —「罵る」「悪口を言ふ」

ののめく —「高聲に呼び騒ぐ」

—あれ見よとのめめきて。(太平記)

ののしる —(一)「大聲で言ふ」「騒ぎちらす」(二)「盛に嗜する」「評判する」(三)「罵る」

—(一)そこらの人集りて里もびびくばかりののとりあり。(東關紀行) 澤山の人が集つて、

里もとどろくくらぬ騒ぎちらしてゐる。

—(二)この世にののしり給ひ光る源氏。(源氏物語) 評判になる

な^らの^る —(一)「名を告げる」(二)「鳥や羽蟲などの、鳴いたり羽をならしたりする事を言ふ」

—(二)ほととぎすの二こみ三こみなのりたるは、(楳園文集)

ほめののしる——「盛にほめたてゐる」

はたる

(他動)「催促する」「責め促す」

せめはたる——「殿しく責めたてる」

しほらみ

(名)「潮の海」の意。「海」

しほち——「海路」「船路」

しほひ——「潮水の引くこと」

しほならわらみ——「淺海」「即ち、「湖」

ひづ

(自動)「水に漬かる」「濡れる」

ひづ——他動詞、「水に漬ける」「濡らす」

—手かひでて、(土佐日記)

ほとぶ——「濡れてふやける」

そぼり

(自動) (一)「濡れる」(二)「しめやかに降る」

そほふる——「しめやかに降る」

そぼめる——「びしょく濡れる」

しめる

(自動) (一)「衰へる」「鎮まる」「ひっそりする」(二)「思ひに沈む」「しなれる」

—(一)やうく風直り雨の脚しめり、(源氏物語)

—(二)うちしめりくむじてぬ給へる。(増鏡)「うちしをれてふさいであられる」

かいしめる うちしめる——「かいは接頭語。」

しめやか——「性質又は有様などの物靜かなさま」「しんみり」「物靜か」「落ついて」

—わざとならぬ匂しめやかにうち薫りて。(徒然草)「殊更らしくない匂ひがほんのり薫つて、」

しぐる

(自動) (一)「時雨が降る」(二)「時雨の降るやうな音を立てて風が吹く」(三)「涙を時雨によ

そへて、「涙を流す」「涙を催す」

—(一)空かきくもり、いつしかうちしぐれつつ。(平家物語)

—(二)山風松の梢にしぐれわたりに。(東関紀行)

—(三)忍ぶとすれどいたうしぐれさせ給へるを見奉るに。(増鏡)「我慢しようとしても大それた涙」

を儘してゐられる御様子を見申しあげると。

しぐれ——「秋冬の間に定めなく降る雨」

せく (他動) 「塞ぐ」 「遮る」 「押へる」

せきあぐ——「こみあげる」

御阿もせきあぐる心地すれば、(増鏡)

しげし

る (形) (一) 「込み合ふ」 「繁つてゐる」 (二) 「多い」 「ばいである」 (三) 「度重なる」 「頻りであ

る (二) 荒れたる庭の露しげきに、(徒然草) 荒れた庭に露が一杯に置いたところへ、

——(三) 公事どもしげく、(徒然草) 度重なる

しげみ——「草木の繁つてゐる處」

しみみに——「ひまなく」 「混んで」 「繁く」

——大木しみみに生ひ立ち、(琴後集) ひまなく

あまふ

(自動) (一) 「笑ふ」 (二) 「花が咲く」 「蕾が綻ぶ」

あまひ——(一)「笑ひ」(二)「花のほころぶこと」

あまし——「笑ひたい」

——常はあましき事のみあれば、(十訓抄)

あみさかゆ——(一)「嬉しさに顔色が映え映えしくなる」(二)「花が咲きほころぶ」

——(一)「老を忘れ輪のふる心地して笑みさかえて、(源氏物語)

あなる——「盛に茂る」「たわたわに茂る」

——その花はををりにあなり、(うけらが花)

あなり——「盛に茂ること」「たわたわに茂つてゐること」

——春山の櫻の花の咲きををり、(鈴屋集)

あふむ

(自動)「あふむ」「あふむらむ」

——みさかりに開けたりし花の又あふめるさまに立ちかへりたるも、(うけらが花) ま盛りに開

いてゐた櫻の花が、又蕾んだやうにもとへもどるのも、

あふむ——他動詞、「口中に含む」「包みもつ」「心にとめもつ」

ほころぶ——(一)「縫目がとける」(二)「書が開く」(三)「口を開けて笑ふ」

すさぶ

すさむ(自動) (一)「その方に進む」益々甚しくなる」(二)「心の進むままに事をなす」「なぐ

さむ『弄ぶ』(三)「衰へやむ」

——(一)「千たび八千たび打ちすさぶ」砧の音、(うけらが花)——盛んにうつ

——(二)「笛をえならす吹きすさぶびたる、(徒然草)——慰む」

すさび すさみ——(一)「愈々進むこと」熱中「熱心」(二)「慰み」氣向きこと」

——(一)「人々酔のすさびに、(うけらが花)——人々が酔のすすんだまぎれに、

——(二)「こはわが身一つのすさみなり。(琴後集)」

てすさび てすさみ——「手慰み」

くちすさぶ くちすさむ——「詩歌など漫吟する」

ありのすさび ありのすさみ——「あるに委せてすること」「いつもあると思ふこと」「存命にまかせて

すること」

——昨日まではありのすさびに見すたりしを、(泊泊舎集)——昨日まではその人が存命中である

によつて、願みもせむに居つたのに、

すさまじい——(一)「興がさめる」面白くない、「殺風景である」(二)「物凄く」「物淋しい」(三)「甚だ

うら」

——(一)「運機またすさまじい」(徒然草)「興がない」

いたづら

副 (一)「空つて」(二)「無駄」「無益」(三)「無用」「ひま」

いたづらごと——(一)「無駄な言葉」(二)「無駄な事」

ただ——(一)「無意識」「空しく」(二)「無益」「無駄」(三)「普通」「竝み」

むなし——(一)「空虚である」「空いてゐる」「何もなし」(二)「無益である」「無駄である」(三)「はか

ない」「假初である」(四)「死ぬ」

——(一)「なほ空しき地は多く」(方丈記)

——(三)「何事も空しき夢と聞くものをさめぬ心に歎きつるかな(新古今集)」「はかない」

あだ

(名) (一)「いたづら」「無駄」(二)「かりそめ」「はかないこと」(三)「實の無いこと」「輕薄」

(四)「なまめいてゐること」「美しいこと」

—(一)「あだなる契をかこち、(徒然草)

—(二)「はかなくあだなるさまかくの如し。(方丈記)

—(三)「あだなりと名にこそ立てれば櫻花年にまれなる人も待ちけり(古今和歌集)』『浮氣で散り易
いと評判になつてはゐるが

「あだまじし」——(一)「いたづらである」「はかない」「(二)「不實である」「(三)「醜態である」

—(二)「物語はやあだあだしきはさるものから、(伊勢物語古意)』『物語といふものは、不實なものは勿論、

「あだごと」——「實のない言葉」「實のない事」

「あだな」——「浮名」

「あだびと」——「浮氣者」

「あだごと」——「實のない言葉」「實のない事」

「あだし」——「はかない」「變り易い」

—「露をあだしと思ひて、(榮花物語)』『はかない

あだし——接頭語として、「他の」異なる」

—あだし遣と同じからん事を厭ひ避けて、(玉勝間)

あだごころ——「不實の心」

あだしごと——(一)「徒らなこと」「つまらぬこと」(二)「他の事」

こと

(名) 言の意と、事の意とがある。前條を見よ。

ふるごと——「古言」「昔の物語」「古歌」

—ふるごとを求めず、さと言をはぶきて、(琴後集)——古語

ふるごと——「古事」「故事」「來歴」

みこと——「御言葉」「仰せ」

ながごと——「長話」

—いそぐ事ある折にながごとするまらうと、(枕草子)

ひとこと——「他人の言ふ言葉」「世評」

こといみ——「事忌」「不吉な事を慎しむこと」

—今日はこといみして、な泣い給ひそ。(源氏物語)

こといみ——「言忌」不吉なことを慎むこと」

ことうるはし——「事の様がるはしい」「端正である」

ことうるはし——「言葉がうるはしい」

ことふる——「事柄が古くなつてゐる」「古くさい」

ことふる——「言ひふるす」

—抑ことふりにたれど。(奥の細道)

ことのは

(名) (一)「言葉」(二)「和歌」

—(一)ことのはも及はず、まれび難し。(増鏡)

ことのはのみち——「和歌の道」

ことばのはな——(一)「巧みな言葉」(二)「和歌」

ことつ

(接尾) (一)「事をなす」(二)「言をなす」

ひとりことつ——「獨音を言ふ」

はかりごと——「謀をする」

まつりごと——「まつりごとをする」

ことづつ

(他動) 「傳言する」

ことづつて——「ことづけ」傳言「傳聞」

一院へまゐる人に、ことづつてとて申させ給ひける御歌、(徒然草)

ひとづつて——「傳言」

いざ

(感) 「さあ」人を誘ふ意。

いざませたまへ——「さあおいでなさい」「さあ一緒に行きなさい」「さあ爲なさい」

いざたまへ——前條の畧。

いざたまへもるともに。(泊酒舎集) 〱さあいらつしやい、一緒に。

いで

(感) (一)「さあ」「さて」(二)「さあ」「さあ」

いでや——いでに詠歌の意をこめたもの。

いざ

(副) 下に打消の語、若くは打消の語が續く。「さあどうか」「さあ」

一人はいさ心も知らず……(古今和歌集)『さあこの家の人の心はどうかわからぬが……』

いぶかし

(形) 「疑はしい」「不審だ」「心許ない」

いぶかるー「不審に思ふ」

いかにぞやー「(一)どうであるか」「不審に」「(二)何故か」「(三)不審に」

ー「(一)古きなやかにぞや思ひて、(玉勝間)『古証に對して不審に思つて、

ー「(二)心ばへなどしいかにぞやさつとなくて、(増鏡)『心持などもどういふものが氣狂ひじみ

てゐて、

かたぶくー「(一)考へる」「怪しむ」「不審に思ふ」「(二)減ぶ」

ー「(一)いたく例なき事とかやとて、人々かたぶき申す。(増鏡)『不審に思ふ。』

うく

(他動) 「容れる」「聞き入れる」「納得する」

ー「うけぬがほして過すたぐひもあり。(玉勝間)『不承知を顔心して過す人もある。』

うけがふー「承知する」「承諾する」「合點する」

ー「かの國のよしといふ人にもうけがひがたき事もありとや。(花月草紙)『合點する』

うげがひ——「承知」「承諾」

ことうげ「承諾」「返答」

——部の人はいことうげのみよくてまことなし。(徒然草)

うべ

むべ(副)「成程」「尤も」「ほんとに」

——むべこの月を小春とぞいへる。(樂園)——この月を小春といふのは尤もである。

うべうべし——「尤もらしい」「真面目らしい」「しつかりしてゐる」

——御宿直の者のうべうべしきもなく、(増鏡)——御宿直の者でしつかりした者もなく。

うべなふ——うべに動詞化の語尾なふが添ふて、「認める」「承諾する」「成程と思ふ」「服従する」

うづなふ——「承諾する」「受け入れる」

——近き人ばまのあたりあひうづなひ。(琴後集)——近い所の人ば親しくこれを受け入れ。

うげばる

(他動)「押切ぶ」「他を踏する」「堂々と行ふ」「思ふさま行ふ」

いまやう

(名)「當世風」

——いまやうはむげに卑しくこそなりゆくめれ。(徒然草)

いまめがすー「當世風にする」

いまめがし——(一)「當世風である」陽氣である」(二)「今更らしい」改まり過ぎる」わざわざらしい」

——(一)女房など……今めがしうはなやき給へど、(源氏物語)……陽氣にお浮かれになるが、

いにしへぶり——「昔風」「古風」

いにしへさま——「昔の様子」

こしかた

きしかた(名) (一)「過去」(二)「過ぎて来たところ」来た方」

——(一)来たしかた行くさきかきくれて、(源氏物語)

——(二)こしかたの山、霧はるかにて、(源氏物語)

わたる

(自動) (一)「過ぎゆく」通る」行く」来る」(二)「在る」有る」の敬語。(三)「過く行きとどく」廣く及ぶ」(四)「絶えすある」續く」經過する」

——(一)土佐の國のはたといふ所にわたらせ給ひぬ。(増鏡)——行かれ給うた。

——(二)本院と常は一つに渡らせ給ひて、増鏡——居らせられて、

——(三)うちとの人々袖どもうるほびわたる。(増鏡)——内外の人々何れも袖が涙が濡れた。

わたす——「及ぼす」「廣く行きわたらす」

——皆人の前すみわたすを待たず。(徒然草)——皆の前にすうつと過くするのをまたす。

わたらふ——(一)「渡る」(二)「生計を營む」

わたらひ——「世渡り」「生計」

わたまし——「御轉居」

はふ

(他動)「延ばす」「續かす」「重ねる」「遣はす」

ひきはふ——「引き延ばす」「引きわたす」

——「こがねの色の糸ひきはへたらむ如く。(うけらが花)——引き延ばす」

うちはふ——(一)「延ばす」(二)「延びる」

うちはへ——「長々と」「長引いて」

——雨のうちはへ降る頃。(枕草子)——長々

すく

(他動)「風流を好む」「風流の道に熱心である」

——「笑といふ者は、この道にすける名のはのぼの聞えて。(奥の細道)」

すき——「風流を嗜むこと」「音樂・和歌・茶道等に心を寄せること」

——糸竹のすさびをおもひすてざりけるこそ、すきの程いとやさしけれ。(十訓抄)——音樂を嗜むことを斷念しなかつたのは、その風流に心を寄せる心がかげが見えて、甚だゆかしい。

すきごころ——「風流心」「好奇心」「好色心」

すきすきし——「物好きらしい」「好事らしい」「好色らしい」

すきもの——「物好き」「風流者」「好色家」

——能因に至れるすきものなり。(十訓抄)——風流者

たしなむ

(他動) (一)「好む」「熱心にする」(二)「心がける」「習得する」

——「堪能のたしなまざるとよりは、(徒然草)——器用な人の不熱心なよりは、

——(二)年頃たしなみ弄び給ひし事とて、(太平記)——心がける

たしなむ——(一)「自動」「苦しむ」「惱む」(二)「他動」「苦します」「惱ます」

ふくつく

(自動)「怒張る」

ふくつけし——「怒張つてゐる」「食慾である」

—われ人にまさらむと、いとふくつけう手折れるを見るもなかしきに、(櫻園文集)——自分

よりも澤山取つてやらうと、大變怒張つて手折つてぬるのを見るのも面白いが、

はやる

(自動) (一)「心が進む」勇み立つ「調子にのる」(二)「あせる」

はやりか——(一)「輕はづみ」輕卒「(二)「氣早」銳い」

——(二)大かた御本性もはやりかにおはして、(増鏡)——大體御性質も氣早でいらつしやつて、

はやりどころ——「あせり心」勇み心「野心」

はやりを「血氣にはやること」血氣の男」

ずべ

てだて (名) 「手段」方法「仕方」

——えびすは弓引くすべ知らず。(徒然草)——方法

すべなし——「爲す手段がない」仕方がない」

せむすべ せむかた——「すべき様」手段「仕方」

よし

(名) (一)「理由」故「原因」(二)「仔細」事情「由來」由緒「おもむき」(三)「手段」つて

「縁故」(四)「口實」(五)「その様子をする事」それらしく見せること」

一(二)よろづの社々寺々など、古(のよ)あるおほく。(玉勝間)——由緒

一(三)水によあるは山造かにて、(琴後集)

一(五)能く知らぬよしして、(徒然草)——能く知らぬ風をして

よしあり——由緒がある「わけがある」風情がある「

よしづく——由ありげである「

よしなし——(一)「理由がない」「無意義である」「(二)「つまらぬ」「他愛もない」「(三)「よくない」「不

都合である」「(四)「手段がない」「

一(二)持經・木尊にいたるまでよきものを持つ、よしなき事なり。(徒然草)——無益な

一(三)六條の御息所のふるき例を、よしなくやおぼえ給ひけむ。(十訓抄)——よくない

一(四)くやしき過ぎし昔語は、所か(さん)にもよしなく、(泊泊舎集)——手段がない

よしなしこと——(一)「つまらぬ事」「無益の事」「他愛のない事」「(二)「つまらぬ言葉」「無駄話」「

一(一)心にうつりゆくよしなしごとを、(徒然草)

よしばむ よしめく——由ありさうにする「もつたいいらしくする」

—よしめきよみなし書き散らしたるなば。(玉勝間)もつたいらしく

よしよし——由ありげである「重々しい」

ちぎる

(他動)「互に言ひかためる」「約束する」

ちぎり——(一)「契ること」「約束」(二)「前世からの約束」(三)「縁」「ゆかり」

——(二)秋ごとのちぎり違(す)。(権園文集)約束

——(二)前の世にも御ちぎりや深かりけむ。(源氏物語)

ちかごと——「誓ひの言葉」

ちかことぶみ——「誓言を書いた文」「誓紙」

ちりのさがひ

ちりのよ(名)「塵のやうに汚れた所」「俗世間」「世」

ちりひち——(一)「塵と泥」(二)「つまらぬもの」

ちりをいづ——「俗界を離れる」「出家する」

ちりはかり——「塵ほど」「わづか」

——朝よりちりはかりも曇りなく。(鈴屋集)少し

よそすつ

よそそむく よをのがる(句) 「世を避けて隠遁する」又、「出家する」

—よなのがれて山林にまじはるは、(方丈記)——隠遁して

よすてびと——「隠遁者」「僧侶」

わがよのほか

(名) 「別世界」「自分と無關係」

このよのほか——「來世」

すくせ

(名) (一)「前世」(二)「前世からの定まつた因縁」「前世の果報」

—(二)かかる折ふしに生れきぬらん宿世のつたなくて、(吉野拾遺)——斯ふいふ時期に生れ來た

果報が悪く。

すくこふ しゆくこふ——「前世の報」

あか

(名) (一)「佛に具へる水」(二)「閻枷桶」

あかだな——「閻枷の具を置く桶」

あらがね

(名) 「土中から掘り出したままの鑽石」

くろがね——「鐵」

こがね——「金」

しろがね——「銀」

あらがねの——土に言ひ續ける枕詞。

——あらがねの土さへ裂くといふなる頃、(うけらが花)

おこなひ

(他動) (一)「爲す」處置する (二)「佛道を修業する」讀經する「念佛を唱へる」

——(二)今は三位入道とか……おこなひぬたる人なり。(十六夜日記)——佛道を修業する

おこなひ——(一)「行狀」起居 (二)「佛道修業」勤行

おこなひびと——「僧」「行者」

——北山になん某寺といふ所に、かしこきおこなひびと侍る。(源氏物語)——僧

すす すんず——「誦する」「讀む」

すすが音便ですんずとなつたので、左も同様の例。

すさ すんざ——「從者」「伴の者」

——すさなどをはじめとして、(花月草紙)

— ありがたきものは、つかひよきすんぞ、枕草子

からころも

(名) 「唐衣」「唐風の衣」

からころも——著る、たつ、ひも、そで等の枕詞。

からやう——「支那風」

からめく——「唐風に見える」「唐風である」

からぶみ——「漢籍」

からうた——「漢詩」

やまとうた——「和歌」

やまとことば——(一)「日本の言葉」(二)「和歌」

やまとしまれ やしまのくに おほやしま みづほのくに——「日本國」

しきしまのみち——「和歌の道」

くし

(名) 「首」「頭」

— 東大寺の佛の御くし落ちなどして、(方丈記)

くし——「髪」

かざり——(一)「飾り」(二)「髪」

かざりおろす かしらおろす——「剃髪する」

かさす——(一)「草木の花や枝を髪・冠にさす」(二)轉じて、「飾りそへる」

うらうへ

——歌はその真心より出てうらうへなく、(東遊日次記)——表裏

——うらうへに二列に居竝みたる、(宇治拾遺物語)——前後

みざり——「右」

めて——(一)「右手」(二)「右の方」

ゆんで——(一)「左の手」(二)「左の方」

しふ

(他動)「曲げて言ふ」「こじつけて言ふ」

がたむ

(自動)「心れぢける」

かたまし——心がれちけてゐる」

——かたましきと見ゆる人の爲すことは、(蒲輪譜)

まが

(名)「悪いこと」「邪惡」「災害」

まがまがし——「縁喜が悪い」「不吉である」「いまはしい」

まがかみ——「禍をおこす神」

まがごと——(一)「災難」(二)「縁喜の悪い言葉」

かしこまる

(自動)(一)「畏れつつしむ」「恐れ入る」(二)「詫びる」「言ひわけする」(三)「感謝す

る」(四)「勘當される」(五)「拜承する」「承知する」

——(一)つかさ皆停めていみじう勘ぜさせ給へば、かしこまりて岩倉の山莊に籠りぬ。(増鏡)

——(二)さまんくおこたりかしこまり申させ給ふ。(増鏡)——いろくくと過意をお詫ひなされた。

かしこまり——前條の名詞形。(一)「恐れ」「恐懼」「畏敬」(二)「詫び」「言ひわけ」(三)「御禮」

(四)「勘氣」とがめ」

——(一)今日は皆亂れてかしこまりなし。(枕草子)——愼み

—(四)かしこまり許されてもとの様になりなき。(枕草子)——勸氣

つつむ

(他動) (一)「慎しむ」遠慮する (二)「用心する」 (三)「こもる」

—(一)親のいさめ世のそしりをつつむに心の暇なく。(徒然草)——親の戒や世間の非難を氣兼するのに心のやすまる時なく

つつみ つつしみ——右の名詞形。 (一)「慎しみ」遠慮 (二)「物忌」

つつまし——「遠慮せられる」恥かしい

—さすがに世のつつましければ、(増鏡)——やはり世間に對してはづかしらので

つつましげ——「うづましうさまま」つつまこまう

—御いらへもつつましげなるものから。(増鏡)——御返事も恥かしさうであるが。

つつむ——(一)「覆ふ」「閉む」 (二)「かくす」

—(二)人には聞かれじと、あながちにつつみ給ひしかど、(十六夜日記)——人には聞かすまいと強ひておかくしになつたが。

つつしむ——「かくす」

—つつしむことのおのづから洩れ聞えたるにつけても。(十訓抄)

ひむ——「かくす」秘密にする

ひめごと——「秘密」「秘傳」

—家々のひめごとなどいふかぎりは、(玉勝間)——家々の秘傳などいふものはすべて。

ひそか みそか——「内密」

—耳遠きははやみそかにものごと聞かぬ爲なれば、(花月草紙)

あからさま

(副)「明白」「むき出し」「ありのまま」

あからさま——右と全然別義。(一)「かりそめ」「ちよつと」「(二)「俄」「忽」

あらは——「かくさす」「むき出し」「露骨」「はつきり」

つぶら

(名、副)「(一)「圓」こと」「(二)「まるまる」

いささか

(副)——「一寸」「少しばかり」

いささめ——「假初」假に」

——「家居より調度にいたるまでいささめにも……心にとめ給はざりしかば、(うけらが花)——「假初」にしも」

まつはる

(自動)「からみつく」「まきつく」「つきまとふ」

まつはす まとはす——「まきつかす」「まとひつかせる」

まとふ——(一)自動詞、「まきつく」「からまる」(二)他動詞、「からみつかす」「からめる」

ほだす

(他動) (一)「縛る」「束縛する」(二)「人情で束縛する」「人情でからむ」

ほだし——(一)「ほだすこと」「つなぐこと」「つなぐもの」(二)「自由を束縛されること」「人情に縛られること」「係累」

——(二)なべてほだし多かる人の、(徒然草)

くひぜ

(名)「木株」「杭」

きだ——(一)「刻み目」「段」(二)「分れ目」「切れ目」

——(一)くひぜを守り、舟にきだつくる聲、(琴後集)

あじろ

(名) あみしろ(網の代り)の意。(一)竹木を組合はせて川瀬に立て魚をとるしかげにしたも

の。(二)檜や竹・葦などを編んだもの。(三)あじろぐるまの略。

あじろぎ——網代に立てる木

あじろぐるま——網代を張つて造つた牛車

あびき——網を引くこと

しがらむ——(一)からみつける(二)竹木を組合せてしがらみをつくる

しがらみ——あじろの(一)に同じ。

すのこ

(名) 竹や狭い板を並べて造つた縁又は床。

はし——「家の端」の意で、「縁」

——はし近う出づれば。(花月草紙)

はしぬ——縁先に出てゐること

あつがはし

(形) (一)暑苦し。(二)頼はし

くもらはし——曇り勝ちである

—降らぬ時だにくもらはしく、(樂訓)

あなづらはし——(一)人に侮られ易い「輕々しい」(二)「氣がおけない」

(二)あなづらはしき人ならば、(枕草子)「氣のおけない人ならば、

あなづる——(一)「輕蔑する」輕しめる」(二)「落慮しない」

いたつかはし——(一)「いたつく様である」骨を折る」(二)「面倒である」煩はしう」

(二)遠く出で立たむしいたつかはしくものまければ、(うけらが花)「遠く出かけるのも面倒
で氣が進まないから、

いたづく——いたはる——自動詞として、(一)「骨を折る」苦勞する」(二)「惱む」疲れる」他動詞と
して、(三)「世話する」親切にする」

——(三)上のいたづき聞えさせ給ふものを、(源氏物語)

いたづき——いたはり——自動詞の名詞形として、(一)「骨折ること」(二)「功勞」(三)「病氣」他動
詞の名詞形として、(一)「あはれみ」恵み」(二)「患ひ」(三)「大切にすること」

——(三)やんことなき人、にはかにいたづきにかかれり。(花月草紙)「尊い人が急に病氣になつ

た。

いたはし——いたはる状である意。(一)「骨折る」(二)「氣にかかる」大切と思ふ」(三)「氣の毒である」心苦しい」(四)「可愛い」

つゆけし

(形) けしは形容化の語尾 「露つほい」「しめつぼい」

あつげし——「暑くるしい」

さむげし——「寒々しい」

あはつか——「うっかり」氣のリせず」

あはつけし——「落着かない」「うはついでゐる」

—おのがかどありがほにて、あはつけく走り書したるも。(琴後集)——自分が如何にも才があるといふ風に落着きなく走り書したのも。

かつく

(自動) 四段の場合は、「水に潜る」

—かつけども涙の中にはさぐられて……(古今集)

かつく——他働詞で、「水に潜らす」

かづく——「潜ること」「潜る人」

——あまのかづきしに入るは、(枕草子)

かづく——自動下二段の場合は、(一)「頭にかぶる」「被る」

——衣をかづき寝たりけるに、(十訓抄)

かづく——他動詞で、(一)「被かす」「載かす」(二)「人を賞し與へる」「祝儀を與へる」

——(二)「各々衣ぬきてかづければ、(十訓抄)」

たぶ

たぶ(他動)「賜ふ」「與へる」

——御馬をたひたりければ、(宇治拾遺物語)——賜ふ

——それは隆圓にたうべ。(枕草子)

たばす たまはす——「賜はす」「頂かす」

——一つ二つたまはせよかし。(鈴屋集)——下さいませ

たばる——「賜はる」

さぶらふ

はへり(自動) (一)「侍る」「伺候する」(二)「有り」「居り」の尊敬語。(三)「語の下に添ふ」

て鄭重の意を加ふる。

一(一)御垣守にさぶらふ兵ども。(増鏡)

一(二)御佛事などさぶらふにや。(徒然草)

一(三)春のほぎごときこえはべり。(うけらが花)——新年の祝ひの言葉を申しあげます。

たまふ たぶ——四段活形式のものは、他人の動作に關する動詞に添へて敬意を表はす。四段・上二

段の形式に活用するたうぶも同様。

一語り聞ゆべく仰せたうぶ。(藤篋冊子)

まごゆ

(自動) (一)「聞える」(二)「廣く知られる」評列になる」「噂される」「といふことである」

(三)「意義がわかる」會得せられる」(四)「申される」

一(一)御おほえ劣りさまに聞ゆるな。(増鏡)——御寵愛が劣つてゐる様に評列されるのを。

一(三)よくまごえたりと思ひて心もとどめぬ事に。(玉勝間)——よく諒解してゐると思つて氣に

もとめぬ事に。

一(四)良覺僧正ときこえしは。(徒然草)

よのきこえ——「世の評判」

きこえ——(一)「聞えること」(二)「評判」

きき——(一)「聞くこと」(二)「他人への聞え」「風聞」

——(二)人の聞きを喜ぶなり。(徒然草)

ひときき——「外聞」

きこゆ——他動、(一)上へ對して「言ふ」の謙讓語。「申しあげる」「お便りする」(二)言ふ人に對する敬語。「申される」「便りをなさる」(三)上へ對して、「贈る」の謙讓語。「さしあげる」(四)動作する人を敬つて、「行はれる」「治められる」「召上る」等。

——(一)きこえ奉るべき事も侍らず。(藤室冊子)——申しあげ奉るべきこともございませぬ。

——(二)度々おとづれすれど聞えぬはいかにぞ。(東京商大)——度々お便りするのにお手紙を下さらぬのはどういふわけですか。

——(三)忍びて御消息しげう聞ゆるをも。(増鏡)——こつそりと御便りをいつもさしあげるのも。

——(四)御修法なにかと聞えつれど。(増鏡)——行はれる

きこしめす——「申す」「告げる」

きこゆ——助動詞、敬意を表はす。

——なべて世の人もめでたき事に思ひきこゆ。(増鏡)——すべて世の人も結構なことと思ひ申しあげる。

きこしめす

(他動) (一)「お聞きになる」「(二)「お聞き入れになる」「お受け入れになる」「(三)様々の動作を表はす敬語。「お治めになる」「召しあがる」「お飲みになる」「なされる」等。

——(一)院、笛きこしめさんとて。(十訓抄)

——(三)ものなどもきこしめさす。(源氏物語)——召しあがらない。

おももの——(一)「飲食物」の敬語。(二)「主上・院・東宮の御食」

——(三)ひのおましの方におものまゆる。(枕草子)——主上の御座所の方へ御食事を差しあげる。

くご——(一)「飲食物」の敬語。(二)「天皇の召しあがりもの」

おりある

(自動) (一)「下に腰をおろす」「(二)「退位せられる」

——(一)「やがて吾をむしるにおりむらう」。(権園文集)

—(二)おりのなむの御心づかひ。(源氏物語)

おりのみかど——「退位せられた帝」

おりたつ——「立ち入つてする」「親しく行ふ」

つどふ

(自動、他動) (一)自動、「集まる」 (二)他動、「集める」

—(二)下つ司人らをつどへて。(うけらが花)

つどひ——「集り」

すたく——(一)集まる (二)轉じて、「蟲が鳴く」

—(一)蝨の多くすたくを見て。(十訓抄) 集まる

—(二)蛙の時得がほにすたくもなかし。(花月草紙)

まくらごと

(名)「口ぐせ」

—あるは後の世の物語ぶみを枕ごととす。(琴後集)

うたまくら——「歌の名所」

ことゆく

(自動)「事が進む」「進行する」「合點する」

「ただに言ひてはことゆきがたき心も。(玉勝間) 普通に言つては合點し難い意味も。」

ことたる——「満足する」「不自由ない」

たらふ——「十分である」「満足する」

たらはし——「足りてゐる」「十分である」

——心たましひたらはしからで。(泊酒舎集)

さきはふ

(自動)「幸にあふ」「榮えゆく」

さきはふ

さきはふ(他動)——「幸を與へる」「榮えさす」

さきはひ——「幸」

さち——(一)「漁獵の獲物」(二)「幸福」

ささく

まささく——「幸に」「無事に」「變らずに」

らうたし

(形)「可愛い」「可憐である」

「はかなびたるこそ女はらうたけれ。(源氏物語) 女は特にはかない風に見えるのが可憐である。」

らうたげ——「可愛げ」「可憐さう」

らうたがる——「可愛がる」「可愛く思ふ」

らうらうし——(一)「巧者らしい」「(二)」「上品である」「上品で美しい」「氣高く愛らしい」

——(二)御本性もなごやかにらうらうしく。(増鏡)——御性質も温和に上品で。

いし

(形) (一)「好い」「(二)」「上手である」「(三)」「神妙である」

——(二)いしう仕りつるものかな。(保元物語)——うまく

——(三)汝いしく参りたり。(平治物語)——神妙に

うまし——(一)「楽しい」「結構である」「好もしろ」「美しい」「(二)」「上手である」

うましくに——「よい國」

たま

(名) 「寶玉」又、玉は美しいところから物事をほめて言ふ。

たまだれ——「立派な簾」

——よそめゆかしきたまだれのうちにも、(初椿集)——他から見ると奥ゆかしい立派な家の中にも、

たれこむ——「簾や帳を垂れてその内に籠る」「室内に籠る」

―たれこめて春のゆくへ知らぬも、(徒然草) 室内に閉ぢこもつて、

たましき―玉を敷いたやうに美しいこと』その所』

―たましきの都の中に棟をならべ、(方丈記)

たまぬく―玉を貫く』

たまみつ―玉のやうな水』雨だれ』

―軒の玉水も間遠に音して、すみすてし蜘蛛のいに玉ぬくげしき、(花月草子) 軒から落ちる

雨垂も間を置いて音して、住み捨てた蜘蛛の巢に、丁度玉を貫いたやうに雫のついてゐる様子、

たまだすき―櫛はかけるものであるところから、かくに言ひつゞけ、又、うれに續ける。

たまぼこの―玉の刃(ミ)と言ひつゞけるところから、道の枕詞とし、又、里に續ける。

たまがき みづがき―「神社の周圍にめぐらされてゐる垣」

みづがきはみづみづしい垣の意からの轉義。

みづみづし―「鮮やかで光澤がある』若々しい」

みづえ―「若枝」

うち

〔接頭〕(一)「一寸」といふほどの軽い意を表はす。(二)強意。(三)語調を整へる。

うちあふ——「よく合ふ」調和する「揃ふ」

——もとの品時世のおぼえうちあひ、(源氏物語)——もとの家柄と世間の名望とどちらも揃つて、

うちあり——(一)「ある」「一寸ある」(二)「普通である」「ありふれてゐる」

——(一)「うちある調度も、(徒然草)——一寸した道具も、

——(二)「ただうちある人のもとに、(十訓抄)——普通の人

うちまかせ——(一)「任す」(二)「ありふれてゐる」「普通である」(三)「引きくるめる」「一概に言

ふ」

——(二)「うちまかせたる事にも、(十訓抄)——ありふれた

うちまかせ——前條の名詞形。「普通一通り」ありふれてゐること」

たち

〔接頭〕動詞に冠して語調を強める接頭語。

たちまさる——「勝る」

たちわかる——「別れる」「別れ去る」

たちもとほる もとほる——「ぶらつく」

たちならぶ——「匹敵する」「比較される」

たちやすらふ やいらふ——「(一)休む」「(二)ためらふ」

け

(接頭 動詞及形容詞に冠して意を強め、或は又、「様子」「けはひ」「何となく」等の意を表はす。

けおそろし——「何となく恐ろしい」

けちかし——「近い」「親しい」

けちかくもてなし難し。(琴後集)——近づけて

けにくし——「憎らしい」

けおさる——「壓される」「見劣りされる」「負かされる」

—かけすけおさるるこそほいなきわざなれ、(徒然草)——わけもなく壓倒されるのは残念な事である。

かき

かい(接頭) かい。かき。の音便。

—かきかぞぶ四つの時につけて、(琴後集)

かいそぶる——「手で弄ぶ」「手まさぐる」

かいつくろふ——「きちんと整へる」

——髪かいつくろひて。(十訓抄)

かいなで——「通り」「表面だけ」「並々」

——らうたげなる氣色かいなでの人とおぼえす。(濱松中納言物語)——可愛げなさまは、並々の人と見えない。

やる

(他動)「破る」

やる——自動詞「破れる」

やりすつ——(一)「破り捨てる」「(二)「のけて捨てる」

かいはやる——かいは接頭語。(一)「破つてしまふ」「(二)「拂ひのける」

——(一)「あなかしこ、かいはやり給ひねかし。(琴後集)——これは恐縮です。破つてしまつて下さい

また

うつろ

うつろふ(自動)

うつろふ(自動) るふはるの延。

(一)「處をおろる」「移る」「(二)「経過する」「變る」「(三)

「色が移る」「色が褪める」(四)「散る」(五)「衰へる」

—(二)中陰の程山里などにうつろひて。(徒然草)

—(三)秋のけはひのうつろひゆくままた。(琴後集)

—(三)花の色はうつりにけりな……(古今集)——花の色は褪めてしまつたわい。

—(四)今日だにも庭をさかりとうつろ花……(新古今集)

うつろひ——うつろふの名詞形。

かへさふ

(他動) かへすの延音。(一)「返す」「裏返す」(二)「繰返す」「再びする」

—(二)くたびもかへさひ思ひて。(玉勝間)——繰返す

かはらふ——「變る」

かかづらふ——(一)「かかり合ふ」「關係する」「拘泥する」(二)「傳はる」

—(一)のりになづみあとにかかづらひて。(琴後集)——規則にとらはれ、型に拘泥して。

こもらふ——「籠る」

—いぶせき庵の中にこもらひをるよ。(うけらが花)

うつる うつろふ 「映る」

とみづ 「草木の葉が色づく」

もゆ 「芽を出す」「きさす」

よろほふ (自動) 「よろめく」

— 大路をよろほひ行きて、(徒然草)

ちりぼふ 「散らばる」「離散する」

ころほひ ころほひ 「頃」「時」「(二)ほど」「程度」

かくろふ (自動) かくの延。(一)「隠れる」「逃げる」(二)「逝去する」

— (一)かくろへぬて奉る。(増鏡) 隠れてお連れ申しあげる。

かくろへばむ 「隠れてゐる様である」「隠れる様にする」ばむは、その様子の表はれるさま、その

様子を帯びてゐる意を表はす。

おいばむ 「年老いた様である」

— おいばみたる者こそ、(枕草子)

けしきばむ——(一)「様子にあらはれる」ほのめかす」(二)「様子ふる」氣どる」

けしき——(一)「様子」きまじ」(二)「心の様子」機嫌「顔色」(三)「御おぼえ」氣受け」(四)「趣」

(五)「仔細」(六)「異様」(七)「仰せ」

けしきばかり——「様子だけ」「一寸」

—けしきばかりの脊に、(樞園文集)——「少しばかり」

けしきだつ——だつは他の語について、一その様な風をする」の様である」の意を表はす。(一)「そ

の様子が見える」「際立つ」(二)「様子が改まる」「氣どる」「いるめき立つ」

—(一)「花もやうやうけしきだつ程こそあれ、(徒然草)——「櫻花も次第に咲く様子を見せて來た丁

度その頃

かたらふ

(他動)(一)「語り合ふ」相談する」(二)「契る」交際する」(三)「誘ひ込む」「頼み込む」

—(一)「思ふことともうちかたらふに、(樞園文集)」

—(二)「はかなくうちかたらはん友なりとも、(十訓抄)——「一寸交際する友であつても。」

—(三)「信頼がたらひおきける近臣の中に、(神皇正統記)——「誘ひ込む」

かたらしひ——(一)「話」「會談」(二)「契り」「約束」(三)「誘ひ込むこと」「頼み込むこと」

かたらしひぐさ かたりぐさ——「語る事柄」「話の種」

まじらふ

(自動) (一)「交る」(二)「交はる」「交際する」(三)「入りこむ」

まじらしひ——「交ること」「交際」

きしろふ

(自動) きしるの延。「競ふ」「執轡する」

きはぶ——(一)「競ふ」「争ふ」(二)「勢づく」「勇み立つ」

(一)「嵐にきはぶ木の葉さへ」(十六夜日記)——嵐の吹くにつれて争ひ散る木の葉までも。

まつろふ

(自動) 「服従する」「従ふ」

終にはなどが皇化にまつろはざるべき。(神皇正統記)

まつろふ——他動詞。「服従さす」「従はす」

おもし

名)「おさへつけるもの」「鎮め」「重鎮」

一世のおもしにて、いとやむごとなくおはするを。(増鏡)——天下の重鎮で、大層尊くあらせら

れるのに。

いかし

(形) (一)「嚴かである」「いかめしい」「(二)「盛んである」「勢がある」「多」「(三)「猛々し

ら」「恐ろしい」

いかめしい——(一)「嚴かである」「(二)「盛んである」「すばらしい」「(三)「甚しい」「烈しい」「嚴しい」「

——(一)「いかめしき願ども立てさせ給ふ。(増鏡)

——(二)「新院もいかめしう御佛事嵯峨殿にて行はる。(増鏡)——盛大に

——(三)「所課いかめしくせられたりけるとぞ。(徒然草)

いづくし——「いかめしい」「莊重である」「重々しい」

——いづくしうもてかしづき給ふことなめならず。(増鏡)——重々しく養育せられたる事並々で

ない。

したたか——(一)「嚴しく」「確かに」「(二)「頑丈に」「甚だ強く」「氣丈に」「(三)「仰山に」「甚しく」

(四)「澤山」

——(一)「したたかなる者ども六人して、(古今著聞集)

——(三)「弓手の膝口したたかに射られ、(義經記)——甚しく

—(四)もとよりしいとしたかに領し給ふ。(大鏡)

かみさぶ

(自動) さぶは、甚だしくなる、その様な振舞をする、意で、(一)「神々しい」莊嚴である」

(二)「古風である」年經てゐる」(三)「老いてゐる」

—(一)九重のかみさびたる有様こそ、(徒然草)

—(二)おもち、足ぶみ、かみさびておもしろし。(増鏡) 古風で

—(三)宗家大納言とて、……かみさびたる人おはしき。(十訓抄) 老いた人

ものさぶ——(一)「何となく淋しい」何となく衰へてゐる」(二)「何となく古びて趣がある」

いはふ

(他動) (一)「謹しみ祀る」(二)「大切にする」

いまふ 音轉して、いもふ——(一)「齋ひ祭る」(二)「忌み嫌ふ」

いもひ いもふの名詞形。「物忌」「精進」「齋戒」

—うちたえて御いもひにて、朝夕つとめ行はせ給ふ。(増鏡) 専ら御精進をされて、いつも勤

行をしてゐられる。

ゆふ

(名) 楮でつくつた布で、これを櫛にかけ神々祭るに用ひた。後世は紙を切つて用ひる。

ゆふしで——「木綿を垂れたもの」

しで——しめ繩や玉串につける木綿。

ゆふつけどり——(一)「祭事の折、鶏に木綿をつけたもの」(二)轉じて、「鶏」

——(二)ゆふつけどりがすかにおとつれて、(東關紀行)

ぬさ——(一)「神に捧げる細く切つた絹布又は紙」又、「神に祈るに奉る物」(二)「贈物」

——(二)あづまに歸り下るところ、上下いろいろのぬさ多かりし中に、(増鏡)——贈物

みてぐら——「神に奉るもの」

ひきでもの——「主人より客への贈物」

みそなはず

(他動)「御覽になる」

ごらんじどころ——「御覽になるところ」御覽になるところ

みどころ——(一)「見るべきところ」見るに足る點「見甲斐」(二)「見込」有望「(三)」要點」

うつはもの

うつは(名) (一)「器物」(二)「器量」度量「人物」才幹

——(一)大きなうつはものに水を入れて、(徒然草)

—(二)そのうつはもの昔の人に及ばず。(徒然草)——才幹

しもと

すはえ すはえ——(一)「枝の直くのびたもの」(二)「管」

たわ

たわわ(副)「たわたわする程に」

たわむ——(一)自動、「曲る」「弱る」(二)他動、「たわます」

たわやか たをやか——「たをたを」「しなやか」

——枝たをやかに、(枕草子)——しなやか

たをやぐ——「たをやかな様をする」

たをやめ——「たをやかな女」

め

(名) (一)「女」(二)「妻」

めこ——(一)「妻と子」(二)「女の子」(三)「妻」

めを——(一)「女と男」(二)「妻と夫」

めのこ——「女子」

めのわらは——「少女」

ささめく

(自動)「聲低く言ふ」囁く

一世の人もささめきける。(増鏡)

ささめき ささめくこと——「ささめくこと」私語

ささめく——(一)「聲を立てて言ひさわぐ」言ひのりしる(二)「騒がしく音する」騒々しくする

そそく

(自動)「さわつく」落つかなり

—そそき起くる音のほのかにきこゆるは。(権聞文集)

たぎつ

たぎる(自動)(一)「湧き立つ」逆まく(二)「心いらたつ」

—(一)落ちたぎり瀬々の白玉は。(琴後集)

たぎつこころ——「いらたつ心」

ひらちぐ

(自動)(一)「怒る」(二)「毛穴が立つ」

ひらちぐ——他動詞では、(一)「怒らす」(二)「毛穴を立たす」

—(一)聲をいらちげ色を損じて。(太平記)

いらる

いらる(自動)「いらちぐする」心がはく

いらつ——他動。「心をせかす」

あいなし

(形) 愛なしの意で、(一)「可愛味がない」「意地悪い」(二)「面白くない」「つまらない」

(三)「無益である」「甲斐がない」

(一)「上達部殿上人などもあいなく目をそばめつつ、(源氏物語)……意地悪くうとんじ見て、

(二)「かかるふみ作りいでんはおとなげなくあいなき人まねにこそとて、(飛彈匠物語)……つま

らない

あいなだのみ——「あいなきたのみ」「甲斐のない頼み」「あてにならぬ頼み」

あいなし——あひなしの體で、間なしの意。「わけ距てがない」「言ひやうがない」「無暗である」

——例はいとよく書く人もあいなく皆つつまれて、(枕草子)……無暗と皆ちままつて、

あちきなし

(形) (一)「面白くない」(二)「つまらない」「無益である」(三)「頼りない」「情ない」

たくむ

(他動) (一)「工夫」(二)「企む」

たくみ——(一)「企む事」てだて(二)「わざ」又、「技術者」「職人」特に、「大工」

(二)「よろづの道のたくみ(徒然草)」——「技術家」

たばかり

(他動) たは接頭語。

(一)「計る」「考へる」「工夫する」(二)「欺く」「計りだます」「いぢか

す」(三)「相談する」

—(二)深くたばかり飾れる事は、(徒然草)こまかす

たばかり

(一)「工夫」「計畫」「思案」(二)「欺くこと」「謀計」

たくらぶ

—たは接頭語。「比へる」

たばしる

—走る「勢よく走る」ほとばしる」

はかる

(他動) (一)「推量する」(二)「思ひはかる」「考へる」(三)「企てる」(四)「欺す」(五)「相談する」

—(二)賢げなる人も、人の上をのみばかりて、(徒然草) 考へる

—(四)君をはかりて身の要いかまへ、(十訓抄)

はかり

前條の名詞形。—(一)「考へ」(二)「目あて」「あてど」(三)「際限」

はからふ

(一)「考へ定める」「見極める」(二)「處置する」「捌く」(三)「相談する」

—(一)わが申さむ事、はからひのたまはせよ。(十訓抄) 考へる

—(三)かの二人の大將軍はからひおきてつつ。(増鏡)——處置する

はからひ——「はからふこと」「處置」

おこたる

(自動) (一)「油斷する」「油斷して過ちする」(二)「病勢が衰へる」

—(三)程なくおこたらせ給ひぬれば、めでたく御心おちぬ給ひぬ。(増鏡)——間もなくお治りに
なられたので、結構に御心がおちつかれた。

おこたり——(一)「怠慢」「油斷」「過失」「罪」(二)「謝罪」(三)「病勢の衰へること」

—(一)いかばかりのおこたりにてかかるうき目を見ららむと。(増鏡)——どれ程の罪業でこの様
につらい目にあふのであらうと。

まめ

(名)(副) (一)「忠實」「眞實」「まじめ」(二)「勤勉」(三)「壯健」「達者」

—(一)「あだ事もまめ事も、(年々隨筆)」

—(三)「心また身の苦しみを知れば、……まめなる時は使ふ。(方丈記)」——壯健

まめでいなる——(一)「まじめな心」「忠實な心」(二)「勤勉な心」

まめでと——「まじめな事」「まじめくさつた事」

まめびと——「まじめな人」「忠實な人」

まめだつ——(一)「まじめになる」「本氣になる」(二)「氣が浮かない」(三)「忠實につとめる」

——(一)「せちにまめだちてのたまへば、(増鏡)——しきりに本氣になつて仰せられるので、

——(二)いとまめだちてのみおはしますを、(増鏡)——いつも甚だ氣が浮かないでいらつしやるのを。

まめまめし——(一)「まじめである」「忠實である」(二)「よく働く」「よく勤める」

まめやか——「忠實」「まじめ」「本當」「親切」「眞實」「勤勉」「しんみり」

——とかくにつけてものまめやかにうしろみ、(源氏物語)——何かにつけて眞心から世話をして、

——まめやかの心の友には、(徒然草)——眞實

くだり

(名)「件」「條」「章」「段」「箇處」

——「くだりづつの筆すさびを乞ひ集めて、(権園文集)——一章づつの慰み書きを書いてもらつて集め、

すぢ——(一)「系統」「血統」「家筋」(二)「筋道」「條理」(三)「それに関する事柄」「専門」「點」

—(三)そのすぢと定めたるかたもなくて。(玉勝間)——これと冥門に定めたところもなく、
かちこち——「條々」かどかど

わざ

(名) (一)「行ひ」仕事 (二)「こと」もの「事柄」趣 (三)「方法」手段 (四)「法會」葬儀
(五)「藝」技術

—(一)(二)よろづ何のわざにも。(琴後集)——事柄

—(三)とりすつるわざも無ければ。(方丈記)——手段

—(四)後のわざども營みあへる心あわただし。(徒然草)——法事

こゝわざ——「仕業」仕事

したたむ

(他動) (一)「處置する」片附ける「まとめる」 (二)「用意する」支度する「設ける」 (三)
「食事する」(四)「書く」

—(一)三十年がほど世をしたためさせ給ひつるに。(増鏡)——治める

—(三)菓子ども……思ふやうにしたため。(義經記)

とりしたたむ ひきしたたむ——「處置する」片附ける

しつらふ——「設ける」「構へる」「飾る」

——「間をば御懸所にしつらひ、(平家物語)

しつらひ——前條の名詞形。「設備」「飾り」「造り」

——「寢殿のしつらひ、(徒然草)」

いとなむ

(他動) (一)「仕事をする」「努める」(二)「つくろ」『經營する』(三)「用意する」

いとなみ——「いとなむこと」

まうく——(一)「用意する」「備へる」(二)「身につける」(三)「利得する」「得る」(四)「しらへる」

まうけ——(一)「用意」「準備」「貯へ」(二)「利息」

——「まづ山ぶみのまうけせむとて、(琴後集)——準備」

まく——(一)「用意する」(二)「さうなる」(三)「その方に向く」

——「(二)冬がたまけたる花の光は、(琴後集)——冬に向つてゆく」

まげ——「用意」「準備」

——「ゆふへのまげをなます。(賀茂翁家集)」

まちまうく——「用意して待つ」

あるじ

(名) (一)「主」「主人」 (二)次の略。「馳走」

あるじまうけ——「馳走」

まれびと まらうど——「客」

をく——「招く」

いへあるじ

(名)「主人」

いへとじ——「奥様」

だいばんどころ——(一)「禁中で女房のゐる所」 (二)「食物を調べるところ」 (三)「貴人の奥方」

みだいはんどころ みだいどころ——右の尊稱。

きたのまんどころ きたのだい きたのかた——身分の高い人の妻の尊稱。

あしらふ

(他動) (一)「挨拶する」 (二)「對應する」「つり合はす」 (三)「もてなす」「取り扱ふ」

あひしらふ あへしらふ——右に同じ。

あしらひ あひしらひ あへしらひ——何れも右の名詞形。 (一)「挨拶」 (二)「取扱ひ」「待遇」

たのむ

〔他動・四段〕(一)「頼りにする」(二)「委す」(三)「自分の身を委ねる」(主人とする)「仕へる」

―(一)たのむたるかたの事は違ひて、(徒然草)

―(三)某が思ひつけたは、頼うだ人と名を申して、(狂言記)――主人

たのむ(他動、下二段)――「頼ませる」あてにさせる「頼みに思はせる」主人とする

―待つ人はさばりありて、たのめぬ人は來り、(徒然草)――あてにしない

―たのめてん人の爲にはゆめくうしろめたなく腹黒き心のあるまじきなり。(十訓抄)――主人

―としてゐる人の爲に、決してうしろ暗い心や、悪心を抱いてはならぬことである。

ひとだのめ――「人に頼もしく思はせること」「人に頼もしく思はせるだけであてにする甲斐のない、

と」即ち、「あてはづれにさすこと」

みやづかふ

(自動)――宮仕へする

みやづかふ――他動詞。「宮仕へさせて召し使ふ」

―みやづかふにかひがひしく、(古今著聞集)――召使ふ

みやづかへ――(一)「宮中に仕へること」(二)「貴人の家に仕へること」又、「奉公」

しめさま

つぎさま(名) (一)「下の方」 (二)「下々の人」

— (一) つぎさまの人は、(徒然草)

— (二) しめさまより事おこりて、(徒然草)

しもびと音便で、しもうど——「下の者」召使

つかへまつる

つかうまつる つかまつる(自動) 「お仕へする」

— 殿上人などいと多くつかうまつれり。(増鏡)

— 近うつかまつりし人々の心地。(増鏡)

つかへまつる つかうまつる つかまへる(他動) ——「作り奉る」「爲し申す」

— よろしき歌つかうまつりて候。(十訓抄) ——よい歌をよみました。

— 御宿直つかうまつり侍るべし。(増鏡)

つかさ

(名) (一)「官廳」「役所」 (二)「官に仕へる人」「役人」 (三)「官職」「官位」「役目」

— (一) もものつかさを従へ給へりしその程。(増鏡)

— (三) 高きつかさくらぬなのぞむも。(徒然草)

つかさびと「官人」

つ

(助) (一)一つの事をしながら他の事をする場合に言ふ。(二)現在、動作の進行中である時に

言ふ。(三)同じ動作の繰返して行はれる時に言ふ。

— (三)捕へつ殺しけるよそほひ、(徒然草) 捕へては殺し、捕へては殺したその様子が、

つ

(助動) (一)完了の意を表はす。(二)正確な時の觀念はなく、意を強める。活用は、て・て・

つ・つる・つれ・てよ

ぬ—つは動作的・突発的であるのに對し、これは状態を緩かに叙述する。活用は、な・に・ぬ・ぬ

る・ぬれ・ぬ

つべし ぬべし—つ及びぬとべしの複合。べしの意を強めることが多い。

てき につき—つ及びぬの連用形と過去の助動詞きの複合。過去完了。

てけり につけり—現在完了又は過去を、やゝ詠歎的に意味を強めたものである。

てむ—つの未然形にむの添うたもの。(一)未來の意を強めたもの。(二)未來の願望・意志を表

はす。(三)未來の可能を表はす。

—(一)かばかりあせはてむとはおぼしてむや。(徒然草)——これ程衰へ切つてしまはうとは、お思ひになつたであらうか。

—(二)汝もし動きはたらかば殺してん。(十訓抄)——殺してやるぞ。

—いかでその事をも報いてむとおぼし。(増鏡)——どうかしてその事を償はうとお思ひになつて、

—(三)ただの人はその大臣に逢ひて、さやうにすくよかには言ひてんや。(宇治拾遺物語)——そんなにきびきびと言へようか。

なむ——完了助動詞ぬの未然形にむの添うたもの。(一)未來完了の形であるが、むよりやや重い氣

持を表はす未來想像。(二)意志・希望・命令の意を表はす。

—(一)よくせすば飽きたることもありなむや。(源氏物語)

—(二)おりなむの御心づかひ。(源氏物語)——退位しよう

—各向はれ候ひなんや。(平家物語)——皆お向ひなさいよ。

なむ(助)——動詞及び助動詞の未然形に接続し、他の動作を希望する。「……てほしい」「……であれ

かし」「……たいものだ」

—無禮の罪は許されなむとて。(鈴屋集) — 無禮の罪は許して下さいと言つて。
なむ(助) — 詠歎的に事物を指示する。

が

—命ものぶるやうになむ。(樞関文集) — 命も延びる様であるよ。
がな がも ばや — 願望の意を表はす。がの下にはし。てし。にし。もが續くことが多い。

—思ふどち春の山べにうちむれてそのともいはぬ旅寢してしが(古今集) — 氣の合つた同志、春の山邊に多勢連れ立つて、行きつき次第どこと定めない氣ままな旅寢をしてみたいものだなあ
—身にしてみても心あらむ友がな。(徒然草)
—情ある主もがも、とひて見ばやとて。(山口高商)

いかて

(副) (一)疑問及び反語として、「どうかして」(二)願望の意。「何とかして」「どうか」「

—(一)いかで誘ひ出して遊ばんと。(徒然草)
—いかでか — いかでに同じ。

—(二)いかでか聞えむ。(増鏡) — 何とかして申しあげよう。

—(一)「さうの間にか」「(二)「待遠して」「早へ」と、心に待つ意。

—(二)都のおとづれいつしかに、覺束なき程しも、(十六夜日記)——都からの便りが早く来ればよいかと。

か

かな かも (感) 感動の意を表はす。

—ぬき亂る人こそあるらし白玉の間なくも散るか袖の狭きに、(古今集)

は(は)も(は)や——感動の意を表はす助詞。

—いつしか變り衰へさせ給ひけるはや。(吉野拾遺)

や——(一)疑問の意を表はす。(二)反語の意を表はす。(三)詠歎の意を表はす。

—(一)くもらぬ影もやあらはると、(十六夜日記)

—(三)山の手が大事で候へば、各向はれ候ひなんや(平家物語)——皆でお向ひなさいよ。

やも——(一)疑問と詠歎の意を表はす。(二)反語と詠歎の意を表はす。(三)疑問と希望の意を表はす。

あな

(感) 「あな」「まあ」

あなう——「あつらい」

あなかしこ——(一)「ああ畏れ多い」まことに慎むべきだ『恐惶謹言』(二)「決して」

—(一)あなかしこ、かいやり給ひぬかし。(琴後集)——恐れ入りますが破つてしまつて下さいませ。

—(二)あなかしこ横波かくな……(十六夜日記)——決して横道へそれてはいけませんぞ……

かしこし——(一)「恐ろしい」困難である『慎むべきである』(二)「畏れ多い」ありがたい」

—(一)かしこがる世の經がたきために、(琴後集)——困難なこの世を渡ることのむつかしい例に。

—(二)かけまくもかしこき。(琴後集)——言葉に出して言ふのも畏れ多い。

かしこし——賢しの義。(一)「賢い」(二)「勝れてゐる」(三)「甚だしい」

—(一)かしこき相人ありけるなきこしめして。(源氏物語)——すぐれた人相見のゐるのを御聞きになつて。

—(三)かしこく歎く。(土佐日記)——ひどく歎く。

かしこころ——畏れ多い所の意から、(一)「宮中の神鏡を奉安する所」内侍所(二)「神鏡」の異

釋。

あはれ

〔感〕〔副〕〔名〕 元來は感動詞で「ああ」の意であるが、轉じて副詞とも名詞ともなつた。

(一)「ああ」(二)「しみじみと」物悲しく「哀れに」「可憐に」「情趣深く」(三)「悲哀」「感慨」「可憐」

「人情」「情趣」「感興」

—(一)「あはれ悲しきかも。(琴後集)——ああ悲しい事よ。

—(二)「たれこめて春のゆくへ知らぬもなほあはれになさけ深し。(徒然草)——しみじみと

マ行とマ行とは音が相通する。

あはれむ あはれぶ —(一)「泌々と思ふ」「哀れに思ふ」(二)「愛する」「賞する」「面白く思ふ」

—(二)「冬は雪をあはれむ。(方丈記)——賞する

あはれみ あはれび —前條の名詞形。

あぶすはあますと同意。「残す」「棄てる」

—落しあぶさすよく取りしたためて、(玉勝間)

あゆぶ —あゆむと同意。「歩む」

いなぶ いなむ——「否と言ふ」拒絕する「断る」四段と下二段兩方に活用する。

一人の言ふことは強うもいなびぬ御心にて、(源氏物語)

こたび ことか——「此度」

ねぶる「眠る」

ねぶたし——「ねむたい」

かなし (形) (一)「可愛い」いとしい (二)「悲しい」 (三)「趣がある」面白い (四)「口惜しい」

——(一)かなしうしける子の煩ふ事ありて、(十訓抄)

——(三)みちのくはいづくはあれど鹽釜の浦こぐ舟の綱手かなしも(古今集)——奥州はどこも面白

いとこゝろであるが、とりわけこの鹽釜の浦を漕ぐ舟の綱手を引いてゆく有様が面白いことよ。

かなしぶ かなしむ——「かなしく思ふ」

——霞をあはれば、露をかなしぶ。(古今集序)——霞を賞し、露を趣味深く感ずる。

かなしみ かなしび——「かなしむこと」

めぐし——「可愛らしい」「いとほしい」

かはゆし——(一)「可哀さうだ」「見苦しい」(二)「可愛い」

えん

〔訓〕いう まう めう など同様、漢語をそのまま好んで用ひた。「艶麗」「優美」「華か」「風雅」

—いとえんになよびたる薄様に書かせ給ひて、(増鏡)——大層優美にしなやかな薄様紙にお書きになつて、

えんだつ——「あだめく」「色めく」「優美である」

—えんだちげしきばめる事うちませたるなど、(鈴屋集)——優美で氣どつたことを交ぜたりする

のは、

いう——「優雅」「品よく」「巧妙に」

まう——「勢盛んなこと」「いかめしいこと」

えん・いう・まうは夫々艶・優・猛の音讀である。

めう——「すぐれてゐること」「奇妙」

たえ——「すぐれてゐること」「不思議」「靈妙」

なまめく

(自動)(一)「若々しくする」「華やかに美しくい」(二)「優雅である」「品よく見える」「風雅

である」(三)「めでたうぼら」

—(二)紅葉のやうやう色づきわたりて、秋の野のいとなまめきたる。(源氏物語)——華やかに美

くし。

—(二)なまめきたるいほりを、(鈴屋集)——風雅な

なまめかし——(一)「みづみづしい」若々しい(二)「ゆかし」上品である「優雅である」(三)

「優雅である」

—(二)七夕祭るこそなまめかしけれ。(徒然草)——優雅である

なまめくゆめくは接尾語で、「その様になる」「その様に見える」といふ意味を表はす。

—ふる木のうつぼめくものに、(樞園文集)——古木のうつぼのやうなものに、

うつくし

(形) (一)「美しい」(二)「可愛い」

—(二)法皇もいみじううつくしとおぼさる。(増鏡)

うつくしげ——「愛らしさま」

うつくしむ——「可愛がる」

うつくしび うつくしみ—「慈愛」「恵み」

きよ—「(一)清浄である」「さわやかである」「潔い」「潔白である」「(二)まじはりしてゐる」「殘

りなき」「(三)明らかである」

きよら—「清いこと」「立派」

—よろづにきよらをつくし。(徒然草)——萬事に華美をつくし。

しろたへ

(名)「白色」「眞白」

しろたへの—袂・紐・帶、又は、雲・雪等白いものに續けて言ふ。

うるはし

(形) (一)「整つてゐる」「端正である」「嚴肅である」「立派である」(二)「可愛らし」(三)

「親しむ」「仲睦じむ」

—(一)うるはしくはかばかしき道には、(玉勝間)——嚴肅なしつかりした道には、

—(三)おのれもいとうるはしうし侍りつるを、(琴後集)

うるはしむ—「親しくする」「可愛がる」「美しいと思ふ」

—うるはしみおもほす人々を、(うけらが花)——親しくお思ひになつてゐる人々を、

うるせし——「善い」「賢い」「心がうるはしう」

—心ばへもうるせかりければ。(宇治拾遺物語)

あやう——(一)「清淨である」(二)「さわやかである」(三)「潔い」(四)「残りなく」「さつぱりしてゐる」

—(四)まづから心をきよくのぞき去るべし。(玉勝間)——さつぱりと

あやう——(一)「清い」と(二)「きれう」「立派」

—(二)世になききよらをつくし騒ぐ。(増鏡)——美麗

すすし——(一)「涼しい」(二)「爽やかである」「さつぱりと胸がすく」(三)「潔い」「潔白である」

—(二)いかばかり心の中すすしかりけむ。(十訓抄)——どれ程心の中が爽やかであつたらう。

すつく

(他動)「大切にする」「養ひ守る」「秘藏する」

—御こたへのふみども、ひとつも散らまでいつきもたりけるを。(玉勝間)——大切に持つてゐたのに

かしづく——もてかしづく(一)「附添ひ守る」「大切にまもる」(二)「可愛がる」「愛育する」(三)「後

見する「奉仕する」

—(二)いつくしうもてかしづき給ふことなめならず。(増鏡)——重々しく養育されることが
通りでない。

はぐくむ はぐくむ——(一)「養育する」「養ふ」(二)「いつくしむ」「かばふ」「情をかける」「守る」

—(一)道を助けよ、子をはぐくめ。(十六夜日記)

—(二)能なき輩をもあはれみはぐくむべしとなり。(十訓抄)——かばふ

はぐくみ——「はぐくむこと」

おほす——「生やす」「生育さす」「育てる」

おほしたつ——「養ひ育てる」「成長さす」

—おほしたてたる獨子になむありける。(松屋文集)

いとほし

(形) (一)「あはれである」「氣の毒だ」(二)「可愛らしい」

いとほしむ——「いとほしく思ふ」

いとほしみ——「可愛がること」「寵愛」

いづくし

うづくし(形) (一)「美しく」立派である「(二)可愛らし

— (二)法皇もいみじううづくしとおぼさる。(増鏡)

いづくしぶ いづくしむ うづくしぶ うづくしむ

— 「大切にする」「愛する」「めぐる」

いづくしび いづくしみ うづくしび うづくしみ

— 「慈愛」「めぐみ」

うむかし

おむかし(形) 「喜ばしい」「嬉しい」「愛すべきである」

— おむかしき花になむありける。(楳園文集) 愛づへき

うむかしむ おむかしむ — 「喜ぶ」「愛でる」

たたふ

(他動) 「稱讚する」

たたへごと — 「ほめて言ふ言葉」

めづ — 「愛する」「賞する」「好む」

— 世々この花をなむめであへりける。(うけらが花)

めでたし——(一)「愛すべきである」「賞すべきである」(二)「美しい」「結構である」「おしい」(三)「祝すべきである」

——(二)めでたくおむかしき花になむある。(權園文集)——結構で愛すべき花である。

めでくつがる。めでまどふ——「非常に賞美する」

——がやうの事めでまどふとて笑ひ給へど。(枕草子)

まどふ

(自動)(一)「横道に入りこむ」「迷ふ」「まごつく」(二)「心が亂れる」「途方に暮れる」(三)「此處彼處と場所が定まらない」

——(三)「自眉類など腫れまどひて。(徒然草)——あちらこちらすつかり腫れて、

まどひ——「迷ひ」「當惑」

まよふ——(一)「思ひ迷ふ」(二)「まがふ」「まぎれる」(三)「處が定まらない」「ままよふ」「入り交る」
「立ちこめる」

——(二)霜を待つ籬の菊の宵の間にまよふ色は山の端の月(新古今集)——まぎれて見える

——(三)吹きまよふ風に、(方丈記)——縦横に吹きまぐる

まよひ——(一)「迷ふこと」(二)「まがふこと」「まぎれ」(三)「處の定まらぬこと」「あたり一面たちこめること」

——(二)夕ぐれの人のまよひに、(源氏物語)——まぎれ

——(三)夜ぶかき霧のまよひにたどりいづ。(十六夜日記)——たちこめた中

まどはす——「迷はす」「思慮を亂す」「まごつかす」

まどはし——「まぎらはしい」「疑はしい」

——いづれによるへきぞとまどはしくて。(玉勝間)——疑はしく

おもひまどふ——「氣迷ふ」「心配する」

きえまどふ——「消え入る程に思ひ惑ふ」

ふきまよふ——「風が方向定まらず吹く」「烈しく吹きまくる」

——吹きまよふ風にとかく移りゆく程に。(方丈記)

まよひいづ——「あてどなく出る」

さゆ

(自動)(一)「冷える」(二)「音が澄む」(三)「光が鮮やかである」

—(一)春來てもなほ浦風さえて浪荒く、(増鏡)

さえかへる—「ひどく冷える」

きえかへる—(一)「消える」を強調して言ふ。(二)「消え入るほどに思ふ」

せき

(名)「關所」

せきもり—「關所の番人」

せきやま—「關所のある山」

せきや—「關守の住む家」

とまや—「苔葺の家」

かやや—「茅葺の家」

いたや—「板葺の家」

かりいほ かりほ—「假の庵」

みむろ

(名)みは尊稱の接頭語。(一)「御住居」(二)「神社」

みむろ—(一)「住居」(二)「家に居ること」

—(一)家居のつきづきしくあらまほしきこそ。(徒然草)

—(二)野邊近く家居しなれば…。(古今集)

みやま——(一)みは接頭語。「山」(二)「深山」

みやまぎ——「深山に生ふる木」

みやまき——(一)「雪」(二)「深き雪」

あやし (形) (一)「怪しい」「不思議である」「世の常と違ふ」「並々でない」(二)「げこからり」

あやし「怪しく思ふ」

—小町にあやめられて。(十訓抄)——怪しまれて。

あやし——「賤しい」「見苦しい」「粗末である」

—いとあやしき御姿に。(増鏡)——賤しい。

しじ (名) 「賤しい事」「賤しい者」

—あやしきしじ山がつのしわざも。(徒然草)

しじのを——「下賤の男」

しづのめ——「賤しい女」

やまがつ——(一)「山で生活する賤しい者」(二)「山がつの家」(三)他人を嘲つて言ふ語。

そまびと——「樵夫」

そまやま——「柚木を植ゑてある山」

そま——(一)「材木を伐り出す山」(二)「柚山から伐り出す材木」(三)「柚を伐る人」樵夫

よもぎふ

(名)「蓬など雑草の茂つてゐるところ」

——よもぎふの露うち拂ふなるは、わがたまあへる人々なりけり。(琴後集)——生ひ茂る雑草の露
を拂つて訪れて來たのは、自分と氣の合つた人々であるわい。

よもぎがやど——よもぎふのやど——「みすばらしく荒れた家」

むぐらふ——「葎の生ふること」、又、「その所」

むぐらがかと——むぐらのやど——「荒れた家」

おどろ——「雑草の生うてゐるところ」藪」

しばのと——「柴で編んで作つた戸」又、「粗末な家」

ふせや——「屋根を低く地上に伏した様な家」「粗末な家」「貧賤の者の家」

まるや——「茅や葦で屋根を葺いて作った假家又は賤が家」

あさち

(名)「疎に生うた茅」又、荒れはててゐる様子を言ひ葉はす言葉。

あさちがやど——「淺茅の生うてゐる荒れた宿」

あさちふ——「茅のまばらに生うたところ」

あさちふの——小野・茅生・つばらつばらに、にかかる枕詞。

あさちふのやど——あさちがやどに同じ。

かれふ——「草の枯れたところ」

そのふ——「芝の生えてゐる園」

くさのいほり

(名)「草葺の家」又、「粗末な家」

くさのとびら——「草の庵の戸」轉じて、「草の庵」

くさのとぼそ——轉義、「草の庵」

くさまくら——「旅寝」

—今宵ばかりの草枕、(増鏡)

くさのまくら——(一)「旅寝」(二)「旅宿」

そば

(名) (一)「かど」稜角 (二)「衣のはし」

そばそばし——(一)「角立つてゐる」角張る (二)「よそよそしい」

そば——「山の険しい所」がけ

そばぢ——「がけ路」

—山のそばぢを行きて。(菅笠日記)

こごし さがし——「険しい」

—さがしき岩根を傳ひ登るほど。(樞園文集)

つづらなり——「曲りくれた坂道」。

ざえ

(名) (一)「學問」特に「漢學」「文學」(二)「才能」「藝能」

ざえおふ——「才を誇る」「學才を誇る」

さかし

(形) (一)「賢い」(二)「すぐれてゐる」えらい (三)「狡猾である」なやかし

さかしさ——「賢さ」

さかしがる——「賢さうな風をする」

さかしだつ——「賢がる」「賢さうに振舞ふ」

——佐貫といふ人、さかしだちたる本性にて、(十訓抄)

さかさかし——「甚だ賢い」

こさかし——(一)「小利巧ぶる」(二)「悪賢い」

さかしら——「賢ぶること」「物知り顔」「差し出口」

さかしらがら——さかしがるに同じ。

とし

(形)「早い」とくを音便でとう。

——船とう仕られば、(平家物語)——船を早く用意せぬと。

くちとし——「言ひ方が早い」「口軽い」

——いふまじき事を口とく言ひ出し、(十訓抄)

こころとし——「氣早い」「覺りが早い」

こころおそし——「心のはたらきが鈍い」「愚鈍である」「のろい」

——とかくとどこほれる人は心おそく。(玉勝間)

おそし おぞし——「のろい」「鈍い」「愚鈍である」

こころはやし (一)「早い」「素早ら」「(二)「烈しい」「きびしい」「心が鋭い」

——(二)いちばやく振舞へば、かへりてしらけもし。(十訓抄) きびしく振舞ふと、却つて興が

さめもし。

おもひあがる

(自動)「得意になる」「自尊心をもつ」「自負する」

——はじめより我はと思ひあがり給へる御方々(源氏物語) うめばれる

こころあがり——「心高ぶること」「思ひあがり」

こころおごる——「得意になる」「いゝ氣になる」

さが

(名) (一)「性質」「性分」「本性」(二)「ならはし」「習慣」(三)「前兆」「吉兆」

よのさが——「世のならはし」「世のつれ」

かががふ

(他動) (一)「糺し明める」「吟味する」「考究する」「考へる」(二)「罰する」「勘當する」

—(一)いにしへの書をかうがへて、(泊瀬舎集)

—(二)かうがへたまふ事の恐ろしければ、(源氏物語)

かうがへ——前條の名詞形。

かうす——(一)「糺問する」糺問する」(二)「勸當する」罰する」

おほけなし

おふけなし(形)「大それてゐる」分不相應である」

おふなおふな——「身分相應に」出来るだけ」

—おふなおふな文字きたかにこそ書かまほしけれ。(玉勝間)——出来るだけ文字をはつきり書き

たいものである。

さしこゆ

さしすぐ さしすぐす(自動) さしは接頭語。「さし出る」出過ぎる「身の程を越える」

—さしすぎたるふるまひは、(十訓抄)

さしおく——(一)「置く」(二)「その儘にしておく」

さしこら——「返答」應對」

いらふ——「答へる」返事する」

いらへ——「答へ」「返事」

—御いらへもつつまじげなるものから、(増鏡)——御返事も恥かしさうであるが、

さしもどく——「非難する」

もどく——「非難する」「けなす」

—おとなしくもどきぬべくもあらぬ人の(徒然草)

もどき——「非難」「批評」

もどかし——(一)「非難すべきである」「氣にくはぬ」「(二)「ぢれつたい」「はがゆい」

たとしへ

(名)「例」

たとしへなし たとへなし——「たとへ様がない」

—たとへなくめでたきを。(樞園文集)

あらがふ

(自動)「抗辯する」「争ふ」「抗争する」

—わがため面目あるやうに言はれぬるそらごとは、人いたくあらがはず。(徒然草)——自分に名譽になる様に話された虚言は、誰もそんなに抗辯しない。

あらがひ——「争論」「争ひ」

いさかふ——「争論する」「喧嘩する」

——下さまの人はのりあひいさかひて、(徒然草)——下級の人は、罵りあひ喧嘩して、

いさかふ——「叱る」

——まらうどの前には大をだにもいさかはす。(十訓抄)

すまふ——(一)「争ふ」「張合ふ」(二)「拒む」「断る」

いどむ

(他動)(一)「競争する」「張合ふ」(二)「しかける」「戦をしかける」

——(一)各々心々にいどみつくして、(増鏡)——魏ひ合ふ

いどまし——いどむの形容形で、「競争するさまである」「競争的である」

いさむ——「勢ひよく進む」「勇を振ふ」

いさまし——右の形容形。「心が勇む」「氣が進む」

いたむ——「心痛する」「哀しむ」「困る」

いたまし——「痛々しい」「可哀さうである」「難儀である」

馬牛つなぎ苦しむるこそいたましけれ。(徒然草) 可哀さうである

かたむ——「心れぢける」

かたまし——「心がれぢけてゐる」

——かたましきと見ゆる人の爲すことは、(落輪譜)

そらだき

(名) (一)「人に知られぬ様に香を薫いて匂はすこと」(二)「どこからともなく来る匂ひ」

そらだきもの——「そらだきの薫物」

そらだのみ——「あてにならぬ事を頼みと思ふこと」

そらだのめ——「空しく頼りに思はすこと」

そらごころ——「偽りの心」

そらごと——「嘘」

——皆人の興するそらごとは、(徒然草)

そらね——「偽つて真似る聲」

そらね——「寝たまね」

そらめ——(一)「見違ひ」(二)「見ぬふりをする事」

そらみみ——(一)「聞き違ひ」(二)「聞かぬふりをする事」

ひがむ

(自動)「ねぢける」「曲る」

—女の性は皆ひがめり。(徒然草)

ききひがむ——「聞きちがへて邪推する」ひがはすべて他の語に冠して、「ひがんでゐる」「間違つてゐる」

る「道理に反してゐる」等の意を表はす。

ひがおぼえ——「覚え違ひ」

ひがぎき——「聞き違ひ」

ひがごころ——「誤つた心」

ひがめ——(一)「見誤り」(二)「正しくない目」

ひがもの——「ねぢける」「變人」

ひがみみ——「聞き違ひ」

ひがごころえ——「心得違ひ」「謬見」

ひがごと——「間違つた事」「道理に反した事」

ひがまだめ——「間違つた論定」「誤斷」

ひがひがし——「ひがんでゐる」「頑固でわからない」「無風流である」

——うちつけにひがひがしう言ひなす人も侍りける。(増鏡)——露骨にひがんでかれこれ言ふ人も
ありました。

みちみちし——「道理正しい」「道理・道徳・政治等に関してゐる」「理窟くさい」

たいだいし——(一)「あるまじき事である」「不注意である」「軽々しい」(三)「迂遠である」

ふる

(自動)「古くなる」

——軒ふりたるわらやの。(東關紀行)——軒の古くなつてゐる藁ぶきの家の。

ふりす——「古くなる」「昔にかはらぬ」

ふるす——(一)「使つて古くする」「古くする」(二)「厭ひ捨てる」

ふるぶ——「古くなる」

ふりゆく——「古くなつてゆく」「老いゆく」

ふるとし——(一)「去年」(二)「暮れゆく年」年内」

ものふる——「何となく古めかしい」古びて奥ゆかしくなつてゐる」

——木立ものふりて。(徒然草)

ことふる——「言ひふるす」

——抑ことふりにたれど。(奥の細道)

ことふる——「事柄が古くなつてゐる」古くさい」

みみふる——「聞きふるす」「耳馴れる」

みみどほし——(一)「耳がよく聞えない」(二)「聞きなれない」

みみちかし——(一)「近く聞える」(二)「聞きなれてゐる」

めぢかし

(形) (一)「目に近い」見やすい」(二)「見て解り易い」「卑近で解し易い」

めだつ——自動詞。「著しく目につく」

めだつ——他動詞。「注目する」

——女は髪のためだからむこそ人のめだつべかめれ。(徒然草)——女は髪的美しいのは特に人が注

目するやうである。

めだたし——「人目につく」顯著である」

めとまる——「目がつく」注目される」

つくづく

(副) (一)「じつと」「しみじみ」「まごまご」(二)「つくねんと」「ゆつたりと」

——(二)秋の夜のつくづくと長きに、(十訓抄)——ゆつたりと

つらつら——「つくづく」と「ねんじろに」

つれづれ——(一)「手持無沙汰」「退屈」(二)「淋しく」「爲すこともなく退屈に」

——(一)「つれづれわぶる人は、(徒然草)——退屈

——(二)「つれづれと籠りぬたるを、(徒然草)——淋しく

ながむ

(他動) (一)「つくづく」と見まもる」「茫然としてゐる」(二)「遠く見やる」

——(一)「たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、(増鏡)——たとへ様もなく物思ひに沈んで

ながむ——「ロクさまむ」吟する」

——高らかに二かへりながめぬ。(寄居歌談)

ながめ——(一)「物思ひに洗んでつくづくと見つめてゐること」(二)「遠く望むこと」

ながめ——「長雨」前條の(一)にかけて言ふ場合が多い。

なげく

(自動) (一)「長い息をつく」感歎する (二)「愁へ悲しむ」 (三)「歎願する」哀願する

——(一)そのなげくにつけては、やがてことに出でてうたふ。(季後集)——何か感歎するといふと

やがてそれを言葉に出して歌を詠む。

——(三)草刈るゐのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情知らぬにはあらず。(奥の細道)

——哀願する

なげき——(一)「感歎」「歎息」(二)「悲歎」(三)「歎願」

なげかし——形容詞化の語尾かしが添うて、「歎かほしい」

こめく——「子供らしくしてゐる」「鷹揚にする」

——心さまのおいらかにこめきて、(源氏物語)——氣だてが程かで大やうで。

こめかし——「子供らしい」「あどけない」

まもる

まもらふ、まぼる、まぼらふ (自動) (一)「見つめる」「注意する」(二)「守護する」

—(二)沖の方をまぼりをり。(檀園文集)——見つめる

まぼゆし

(形) (一)「光がまぶしい」(二)「他に對してまぶしく感ずる」恥かしい」(三)「厭はしく

て顔をそむける」氣にくはない」

まじるし——「目じるし」

まじろぐ——「まばたきする」

みじろぐ——「身動きする」

みじろぎ——「身動き」

はゆ

(自動)「映じて美しく見える」照り輝く」

はえはえし——「映えて見える」目立つて美しい」華やかである」

はえ——「映えること」艶」光彩」

はゆし——「映えるさまである」ほてる様である」

おもはゆし——「面恥かしい」間が悪い」

—さすがおもはゆう恥かしくや思ひけん。(平家物語)

もてはやす——(一)「ほめたてる」「賞讃する」「大切にする」。(二)「互に相映する」「照り映えるやうにする」

——(二)外山のたたずまひも月影にもてはやすれて、(琴後集)——里近い山の様子も月の光を受け
て一段と引立つて見え、

かがやく——(一)「きらめく」(二)「恥かしがる」

——(二)女、扇を以て顔にさし隠してかがやくを、(今昔物語)

かがやかし——「まばゆい」「恥かしい」「面目ない」

おもがくす——(一)「恥ぢて顔をかくす」(二)「表面をかくす」

やさし (形) (一)「恥かしい」(二)「優美である」「しとやかである」「風流である」(三)「情深い」

(四)「柔和である」(五)「神妙である」「殊勝である」(六)「た易い」

——(一)何をして身のいたづらに老いぬらん年の思はんことぞやさしき(古今集)

——(二)すきの程いとやさしけれ。(十訓抄)——優美である

やさしがる——「やさしいと思ふ」「やさし氣に振舞ふ」

はなやか

(副) (一)「華々しく」「美々しく」(二)「際立つて」

—(三)御門は御本性いとはなやかにかしこく、(増鏡)——御門は御性質が際立つて賢明で、

はなやぐ——「華やかになる」「浮かれる」

わかやぐ——「若々しく見える」「若返る」

わかやか——「若々しいさま」「子供らしいさま」

—見るところわかやかならずして、(花月草紙)——子供らしい様子

つくるふ

(他動) (一)「補修する」「なほす」「訂正する」(二)「整へる」「飾る」「装ふ」(三)「言ひつく

るふ」(四)「療治する」

—(二)新院ひきつくるひで渡り給ふ。(増鏡)——新院は着かざつておいでになられた。

—(四)入道はかの病つくるはむとて、(増鏡)

もてなす

(他動) (一)「とりなす」とりつくるふ(二)「たしなむ」「賞翫する」(三)「あしらふ」「待

遇する」(四)「馳走する」

—(一)忍びて御門のおはしますまよしにもてないで、(増鏡)——このそりと主上がおいでになられ

るといふ風にとりつくるつて。

—(二)鱧といふ魚は、……この頃もてなすものなり。(徒然草) 賞美する

もてなし—(一)「とりなし」(二)「有様」「態度」(三)「あしらふこと」「待遇」(四)「馳走」「とりも

つこと」

おもひなす

(他動) なすは特に意識してする意味を表はす。「それと思ひ定める」「推量してそれと決

る」

—夢かと思ひなさんとすればうつつなり。(平家物語)

おもひなし—「推量して思ふこと」「推量」

こころおく

(自動) (一)「心をおく」「注意する」(二)「氣を遣ふ」「遠慮する」「心配する」「打とけない」

—(二)人に心をおかれ隔てらるゝ、口惜しかるべし。(十訓抄) 人にうちとけられず遠ざけら

れるのは残念なことに違ひない。

こころにくし—(一)「奥ゆかしい」「たのましい」「すぐれてゐる」(二)「氣がおける」

おもひいる—「深く考へこむ」「深慮する」

「思ひ入りたるさまに、心にくしと見し人も、(徒然草)——思慮が深い様で、奥ゆかしく思つてゐた人も、

こころやる

(他動、四段) こころをやる (一)「心を慰める」「氣を晴らす」(二)「思ふままにやる」

「得意になる」

—(一)よろずの心やれるわざいとさはなれど、(権園文集)——すべて心を慰める事は甚だ多いが

—(二)心をやりてしたり顔する、いとかたはらいたく、(玉勝間)——得意になつて自慢顔して

ぬるやうだが、甚だ笑止で、

おもひなやる——「心を慰める」

こころやり——「心慰さめ」「氣晴らし」

こころなぐさ——「心の慰め」「氣晴らし」

くちまじ

(形) (一)「心に惜しいと思ふ」「遺憾に思ふ」「残念である」(二)「物足らぬ」「つまらぬ」

—(一)やすからす口惜しき事にあひたりとも、(十訓抄)

—(二)世の覺えくちなしからす、(源氏物語)——世間の氣うけも弱くなく、

かひがひし

(形) (一)「甲斐がある」「はかばかしい」(二)「勇ましく」「はきはきしてゐる」「實々しい」

—(一)今敵にかけ合ふともかひがひしき事はなくて、(平治物語)——有効な

かひがひしげ——「甲斐々々しい様」

かひなし——(一)「無益である」(二)「未熟である」「弱々しい」「

よるのにしき——夜、錦を着てもその美しさの見えぬところから、その甲斐のない事を諭へて言ふ。

あや

(名) (一)「模様」(二)「交錯」(三)「飾り」(四)「道理」

—(三)そのうたふ時詞にあやあり。(琴後集)——飾り

あやなし——(一)「道理が立たない」「無暗である」「わけがわからぬ」(二)「何にもならぬ」

—(一)春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やはかくるる(古今集)——春の夜の闇は全く

わけのわからぬものだ。闇で梅の花は隠れようが、その香はかくれようか、隠れまいに。

—(二)思へどもあやなしとのみ……(後撰和歌集)——心に思つてゐてもなにもならぬ……

めもあや——「目もきらきらして正視出来ぬさま」「正視出来ぬ程」

めもよばず——「じつと見てゐられない程美しい」「速くて目にとまらない」

めもあてられず——「悲極で見ておられない」

きら

(名) (一)「綾ぎぬとうすもの」立派な衣服 (二)「光彩」美しい事 (三)「榮華」權勢

——(二)物のきらかざり、(徒然草)——光彩

——(三)その頃内府のきらにては、(十訓抄)——權勢

かど

(名)「才」才智「才能」

——おのがかどありがほにて、(琴後集)——才

かどかどし——「才氣がある」「氣が利く」「賢い」

——今めかしき所おはする君にて、よろづかどかどしうなむ。(増鏡)——現代風のところがあたり

になる君であつて、萬事才氣にあふれてゐます。

かたかど——「一片の才藝」「一つの長所」

かど——「角」

かどかどし——「角が多い」「性質が鋭い」

かどめく——「角立つ」「性質が鋭い」

にほふ

(自動) (一)「つややかである」「光澤があつて美くしい」「美しく映する」(二)「光る」「光りかがやく」「ぼうつと光がさす」「ほかしてある」

—(一)朝日ののどかなる影ににほひ合ひて、(松舍文集)——朝日ののどかな光と映じ合つて、

にほひ——(一)「香」(二)「はなやかなこと」「つやつやしいこと」「光澤」「美しくさ」「色合」(三)「光

「威光」(四)「おもむき」「風情」「様子」「氣韻」(五)「色の次第に淡く、或は濃くなつてゐること」

(六)「聲」

—(一)「紅梅のにほひめでたきも、(徒然草)——色つや

—(三)つかさ位、世の中のにほひも何ともおほえずなむ。(源氏物語)——威光

—(四)有明の月の月にほひも、(うけらが花)——風情

にほひやか にほやか——「艶やか」「美々しい」

—いとにほひやかに美しくしげなる人の、(源氏物語)

にほはし——「にほひやかである」

そ

(名)「衣」

—御ぞひきかづきて。(鈴屋集)——御衣

そで ころもで——衣の端の意、「袖」

さごろも——さは接頭語。「衣」

うから

うからやから (名) 「親族」「一族」

やから——(一)「一家」「一族」(二)「ともがら」「仲間」「奴等」

ともがら——「仲間」「同類」「人達」

はらから——「同胞」「兄弟姉妹」

—その母北の方は、故大將のはらからなれば、(増鏡)——其母に當る奥方は、故大將頼朝の妹で

あるから、

たらしね——「親」「父」「母」

たらしを——「父親」

たらしめ——「母親」

たらしねの——母又は親に言ひつづける枕詞。

いろは——「母」

いろせ——「兄」又、「弟」

いろと——「弟」又、「妹」

おととえ おととい おととび 「兄弟」「姉妹」

いもせ——(一)「夫妻」(二)「兄と妹」「姉と弟」

せこ——女の側から「夫」「兄」「弟」を指して言ふ。

わぎもこ——妻や他の女に對して親しみ言ふ語。

わくこ みどりこ——「幼児」

おきな

(名) 「老人」 又、「老人」の敬稱。

おうな——「老婆」

をうな——前例とは別。「女」

おほぢ——「祖父」又、「老人」

おや——(一)「父母」(二)「先祖」「始祖」(三)「長」「かしら」

—(二)まづ物語のいできはじめのおやなる竹取の翁に、(源氏物語) 始祖
とほつおや—「遠い先祖」

おくつき

(名)「墓」

—翁のおくつきまうでするも、(泊泊舎集)

はふる—「埋葬する」「火葬にする」

はふり—「葬儀」「葬送」

はふりわす—「葬式」

こけのした

(名)「墓の下」「冥途」

よみ よみのくに—「冥途」「死後の世界」

こけのむしろ—「苔の生えた處」

こけのころも—(一)「衣の様な苔」(二)「僧侶、隠者の衣」

こけのたもと—「苔の衣の袖」又、「苔の衣」

おくる

(自動)(一)「後になる」「死におくれる」「生き残る」(二)「感ずる」(三)「劣る」「乏しい」

—(三)この大臣、少しなまけおくれ、(増鏡)……少し人情が薄く、

こころおくる——(一)「心が劣る」(二)「氣おくれする」「憚る」

こころおくれ——右の名詞形。(一)「心劣ること」(二)「氣おくれ」「憚り」

たちおくる——「遅れてついてくる」「ひけなとる」

しなおくる——「品がおちる」「下劣である」

しな

- (名) (一)「種類」「類」(二)「品格」「人柄」「氣品」(三)「身分」「地位」「家柄」(四)「品質」「たち」
- (五)「階段」「段」「程度」(六)「品物」

—(一)その品多くして、(藩翰譜)……種類

—(二)品おくれたり。(樞関文集)……氣品が劣つてゐる。

—(三)みめよく品高けれども、(十訓抄)……容貌が美しく身分は高くて、

しなじなし——「品がある」「上品である」

うら

(名)「心」多く接頭語の様にして、「そぞろに」「何となく」の意に用ゐられる。
 うらがなし
 うら
 めづらし
 うらさびし等。

うらなし——「心に隔てがない」「心に表裏がない」「何心もない」「遠慮ない」

—うらなくむつばひつるを、(琴後集)——心に隔てなく親しみ合つて来たのに、

うらぶる うらびる——「心憂く思ふ」「物思ひする」「愁へる」

—秋萩にうらびれをれば……(古今集)——淋しい風情の秋萩を眺めて物思ひしてゐると、

ニシヨ

(名) (一)「精神」「しつかりした考へ」(二)「情」「思ひやり」(三)「おもむき」「情趣」「風情」

「風流心」(四)「思慮」「注意」(五)「意味」「趣旨」(六)「心持」「意嚮」

—(二)ニシヨなき木草、(鈴屋集)——無情の木草、

—(三)心深き言の葉多くものし給ふらむ。(鈴屋集)——趣深い歌を深山おつくりになられた事で

せう。

—(五)仰の如くその心を支侍りぬ。(増鏡)——趣旨

ニシヨあて——「心だのみ」「あて推量」

ニシヨあり——「趣を解する」「考へがある」「趣味がある」

—身にしみて心あらむ友がな。(徒然草)——趣を解する

こころなし——(一)「思慮が浅い」「考へがない」「無邪氣である」(二)「情がない」(三)「情趣を解しない」

あて

(名)「高貴」「上品」

——この御門はいとあてに、(増鏡)——上品

あてやか あてはか——「上品」「端麗」

あてびと——「高貴の人」「上品な人」

——はやうはあてびとなれど、(増鏡)——以前は高貴な人であつたが、

おむ

おづ (自動)「怖れる」「臆する」

——夢見物忌など餘りにおめたり。(保元物語)

おぞし おぞまし——「おそろしい」「するい」

こころしらふ

(自動)「心づかひする」「注意する」

こころしらひ——「心づかひ」「理想」「思想」

——世の中うつろひかはり、心しらひばよこしまにのみなむなりゆくめる。(賀茂翁家集)——心が

こころおとり

(名) 「豫想より劣つてゐること」「見劣り」

こころまさり——「豫想に反して勝つてゐること」

ちかおとり——「遠くで見るよりも近く寄つた方が劣つて見えること」

ちかまさり——前條の反對。

——見る目よりもちかまさりする人にぞありける。(宇津保物語)

うばたまの

うばたまの (枕) 黒・夜・夕べ・月・夢等黒に縁のある語に續ける。

いさよふ

(自動) 「ためらふ」「進み兼ねる」

——月の遠山の梢にいさよひひて。(花月草紙)

いさよひ——(一)「いさよふこと」(二)次條の略。又、「陰曆十六日」「陰曆十六日の夜」

いさよひつき——いさよひのつき——いさよふつき——「陰曆十六夜の月」

もちづき——「十五夜の月」「満月」

もち——(一)もちづきの略。(二)「陰曆の十五日」

たちまちづき——「陰曆十七日夜の月」

るまちづき——「陰曆十八日夜の月」

ぬまちづき ふしまちのつき——「陰曆十九日夜の月」

ありあけのつき——「舊の十五日以後、夜明け頃空に残つてゐる月」

くだつ

（自動）（一）下る『傾く』末になる『衰へる』（二）夜が更ける

（一）時移り世くだちて、（琴後集）

よぶかし

（形）「夜が更けてゐる」まだ夜明けには間がある

梅が香のしめり夜ぶかくにほひわたるも、（花月草紙）梅のしめつた様な香が夜更けた頃匂

つてくるのも、

よごもる——「夜深い」

よなこめて——「夜深く」未明に

法皇夜をこめて小原の奥へ御幸なる。（平家物語）未明に

しのめ (名) 「曉」あけぼの」

しのめのめ——ほがらほがら・明く・等に續ける枕詞。

あかれ——(一)赤黄色の染料をとる草の名。(二)「濃い赤色」

あかれさす——日・曇・雲などの枕詞。

あさひこ——「朝日」

つきよみ つきよみ——(一)「月の神」(二)「月」

つきよ——(一)「月」(二)「月の出る出てゐる夜」

じふにし

(名) 子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥を十二支と言ひ、これを十干と組合せて曆の上の年、月、日等に當てて用ひる。又、十二支を方角の稱とする時は、東を卯、南を

午、西を酉、北を子とし、東南の間を三分してその間に辰巳(巽)を入れ、南西の間には未申

(坤)、西北の間には戌亥(乾)、北東の間には丑寅(艮)を入れて夫々の方角の稱とする。又、十

二支を時の稱とする時は、午前零時を中心とした時間、丑は午前二時を中心とした時間を言ひ、

の様にして晝、零時を午の刻といふ。

じつかん——甲・乙・丙・丁・戊・己・庚・辛・壬・癸の稱。

えと——「十千と十二支」

おのづから

(副) (一)「自然と」(二)「偶然」「たまたま」(三)「萬一」「若しも」

—(二)おのづから人はあれども、(平家物語)——偶々

—(三)おのづからあしくゆきあひたりとも、(十訓抄)——萬一都合悪くゆき合つたとしても、

しぜん——(一)「自然と」(二)「萬一」「若しも」

—(二)自然の事もあらば、(平治物語)——萬一

われと

(副) 「自分で」

おのれと——「自分から」又、「自然と」

—おのれと枯るるだにこそあるを、(徒然草)——自然と枯れるのでさへ惜しいのに、

すずろ

すずろ そぞろ (副) (一)「漫然と」「自然と」(二)「無暗」「わけもなく」「何の関係もなく」

(三)「不覺に」「はしたなく」

—(一)世にあまねく、人のみなする事には、誰もすずろに心のよりやすきならひぞかし。(玉勝

問——世間で一般に人の皆する事には、誰でも何となく心の寄り居いのが普通である。

——(二)引きとどめてすするに飲ませつれば、(徒然草)——無暗に

すするぐ そぞろぐ——(一)「わけもなく心が進む」(二)「わけもなく心が騒ぐ」

——(一)いでかくすするきて聞え奉るなり。(山口高商)——さてこの様にわけもなく心から進んで
申し上げ奉るのです。

——(二)いとすするきてとみにいひも出ます。(古今著聞集)

すすること そぞろごと——(一)「すするな言葉・歌・物語」(二)「つまらぬ事」他愛もない事」

——(一)かかるすすることさへにとりいでたるは、(玉勝間)

——(二)これはそぞろごとなればいふに足らず。(徒然草)

すするはし そぞろはし——(一)「心が浮かれ進む」感動する」(二)「はしたない」不覺である」

おのがじし (副)「銘々思ひく」各自」

おのがさまさま——「銘々様々」銘々勝手に」

おのがむきむき——「各々心の向いた方に」思ひ思ひ」

—おのがむきむき筆にまかせて。(樞園文集)

とりどり——(一)「銘々」思ひく(二)「色々」様々」

おのがちりちり——「各自散りく」

—おのがちりちりにさすらへ。(増鏡)——各自散り散りにさまよひ。

ひきびき——「思ひ思ひ」心の向きく」

むきむき——「思ひ思ひ」

ひとむき——「ひたすら」「一途」「一方」

—ひとむきに片よらず。(玉勝間)——「一方に

かたみ——「五に」各自」

やうやう (副) (一)「次第に」(二)「辛うじて」

—(一)やうやううちとくちくなりゆくに。(鈴屋集)——「次第に

やうやう——「様々」いろいろ

—御邊の事をこそやうやうに申したれ。(平家物語)——「あなたの事を色々に申したが。

いろいろ——(一)「種々の色」(二)「様々」

くさぐさ

(名)「物事の種類の多いこと」

くさ——(一)「物事を起させるたれ」原因「(二)「種類」類

——(一)天下の笑はれぐさとならん事こそやすかられ。(平家物語)——世の中の笑はれるたれ
——(二)すべてふみひとくさを作りいでむには。(琴後集)

ちぐさ——「種類の多いこと」種々

かたりぐさ——「語る事柄」話の種

ことぐさ——(一)「口ぐせ」言葉「(二)「口實」

——(一)いかに言ひ捨てたることぐさも。(徒然草)

くさはひ——「物事を生ずるたれ」材料「たれ」

——心を慰むるくさはひ多く。(樞園文集)

もてあそびぐさ——「もてあそぶもの」賞翫の料

もてあつかひぐさ——「もて扱ふもの」取り扱ふ種

もてあつかふ——「取り扱ふ」「世話する」

まさぐる——「もてあそぶ」

いろふ

(自動)「干渉する」「取扱ふ」「關係する」

—今は世の大事どもいろはれど。(増鏡)——取扱ふ

しろふ

(自動)「互にする」「なし合ふ」

—忍びてつきじらふ。(増鏡)——こつそりつつき合ふ。

いひしろふ——(一)「言ひ合ふ」「言ひ争ふ」(二)「噂する」

—(二)かくいひしろふほどに。(増鏡)——噂する

ひきしろふ——(一)「互に引き合ふ」(二)「引きする」

ぐす

(自動)「(一)「具はる」(二)「連れ立つ」伴ふ」

—(一)「親うち具し」(源氏物語)——具はる

—(二)「父豊前守に具して」(十訓抄)

ぐす——他動、「(一)「具はる」揃はる」(二)「連れれる」伴ふ」

—(一)これを具せざれば、(十訓抄) 具へる

—(二)さまやかなる童一人を具して、(徒然草)

とりぐす—「取り捕へる」とりもつ」

めしぐす—「召し速れる」

あながち

(副)「強ひて」「無理に」「無暗と」「徹底的」

一人には聞かれじとあながちにつつみ給ひしかど、(十六夜日記) 人には聞かすまいと強ひて
おかくしになつたが、

つはもの

(名) (一)「武器」(二)「武器を持つ人」「武人」(三)「すぐれた武人」「勇士」(四)「戦争」

いくさ—(一)「軍勢」(二)「戦争」(三)「射撃」

—(一)「四萬餘のいくさを従へ、(吉野拾遺) 軍勢

ゆみや—(一)「弓と矢」「武器」(二)「弓矢とる身」「武士」「武家」(三)「弓矢の道」「武道」

—(一)「われ弓矢とる身にて候はば、(十訓抄) 武器

—(二)「弓矢の名を重んじ、(太平記) 武士

—(三)引矢にたづまはらん者、(宇治拾遺物語)——武道

もののふ——「武士」

てうど

(名) (一)「手廻り道具」(二)特に、「弓矢」

ぐそく——(一)「物事の十分具はつてゐること」(二)「伴ふこと」連れること(三)「道具」(四)

「武具」「甲冑」

—(二)いづく迄も具足し奉るべけれども、(平家物語)

—(三)何となき具足とりしたため、(徒然草)

もののぐ——(一)「道具」(二)「鏡」

つらし

(形) (一)「無情である」「情ない」「心外である」(二)「堪へ難い」「難儀である」

—(二)言へばえに、つらく恨めしからぬ人なし。(増鏡)——言ふに言はれず情なく恨めしく思は

ぬ人はない。

つれなし——(一)「情がない」「情愛がない」「氣強い」(二)「そのまままで變らない」「依然としてゐる」

(三)「知らぬ風をしてゐる」「平氣である」

—(一)つれなくふりすてつ。(十六夜日記)——無情に

—(二)雪山はつれなくて年もかへりぬ。(枕草子)——相變らすそのまま

—(三)恥ある者は討死し、つれなき者は落ちてゆく。(平家物語)——恥を知らぬ

なさけ

(名) (一)「人情・情愛」(二)「趣味を解する心」「風流心」(三)「風情」「趣」「趣味」

—(一)この大臣、入道殿よりは少しなさけおくれ。(増鏡)——人情

—(三)垂れこめて春のゆくへ知らぬも、あはれになさけ深し。(徒然草)——家の中に閉ぢこもつてゐて外の春景色のどうなつてゐるか知らずにゐるのも、しみじみと感興深いものである。

なさけなさけし——「情深い様子である」

なさけおくる——「情が薄い」「無骨である」

なさけたつ——「情ある様に振舞ふ」

だつ——他の語について、「その様な風をする」……の様である」といふ意を表はす。

—上臈だつ女房。(増鏡)——上臈風の女房

—紫だちたる雲の。(枕草子)——紫がかつた

【まざ】 名)「人の上に立つ者」「頭」

なまなまし——(一)「立ち優つてゐる」はかばかしい(二)「大人びてゐる」

——(二)「若ければ文もなまなましからず。(伊勢物語)

【ときめく】

(自動)「よい時に遇つて榮える」出世してもてはやされる「威勢がよい」

ときめかす——「時めく様にする」寵愛する」

ときめきがほ——「時を得たといふ様子」得意顔」

ときしりがほ——「時を知つてゐるといふ様な顔付」

われはがほ——「自分こそはと言つたやうな顔付」得意さうな顔付」

をりしりがほ——「時季を知つてゐるといふ様子」

したりがほ——「得意顔」自慢顔」

ところえがほ——「所を得た様」得意顔」

ところう——(一)「よい場所を得る」(二)「時にあふ」得意になる」

——(二)「前に前田ぬしの高殿こそあやしく所得てはおぼゆれ。(琴後集)——前に前田様のお宅

は竝々ならずよい場所を占めてゐる様に思はれる。

ところおく ところをおく——(一)「場所を譲る」(二)「遠慮する」(三)「畏敬する」

——(三)世にところおかるる身ならずして。(十訓抄)

せし

せばし (形)「狭い」

——便あしくせばき所に。(徒然草)

せに——「狭いほど」「一杯に」「一面に」

——野もせにすだく蟲の音よ。(十訓抄)——一面に

ところせし——(一)「場所が狭い」(二)「場所が狭いほど」(三)「縮間がない」「音などやかま

しい」(三)「場所が狭いといふ風に、」威張る「あたり憚らない」(四)「窮屈である」(五)「心に窮

屈を感じる意から、」氣がつまる「不快である」面倒である「高貴である」(六)「窮屈で自由になら

ぬ意から、」困る「もてあます」厄介だ」(七)「仰々しい」

——(一)「世くだちてやうやうところきおきて多く出でくるなり。(琴後集)——窮屈な

——(二)「旅衣いつしか袖の雫ところせし。(東關紀行)——旅衣の袖にはいつの間にか雫が一杯であ

る。

—(三)いみじと思ひ所せき様したる人こそ、(徒然草)——えらい事と思つて威張つた様子をした人は、

—(四)よろづところせき御有様よりはなかなかやすらかに、(増鏡)——萬事窮風な御有様よりは却つて氣安で、

—(五)ところせき御身にて、(源氏物語)——貴い

—(六)暑さところせき程なるを、(鈴屋集)——もてあます

うし

(形) (一)「つらい」心苦しい、(二)「氣が進まない」大儀である

—(一)「うき」ときかぬ山の奥へも、(平家物語)

—(二)「行きうし」とてもとままるべきにもあらず、(十六夜日記)——大儀である

うさ——「つらま」「つらい事」

うきめ——「つらい目」

うきよ——「つらい世」

うきよのちり——「この世の穢れ」

ものうし——「何となく憂い」「大儀である」

うれはし——「憂ふべきである」「歎かほしい」

うれたし——「歎かほしい」「恨めしい」「憎い」

うたて

(副) (一)「甚だしく」「あまりに」「尋常ならず」 (二)「厭はしく」「情なく」「つまらなく」

——(一)「うたて心づきなき事多かるべし。(徒然草)——甚だ氣に入らぬことが多いにひない。

——(二)「いたくさとびて、見る目もいとうたて。(檀園文集)——ひどく田舎臭くて見ても全く面白

くなく、

うたてし——(一)「甚だしい」「あまりである」 (二)「厭はしい」「情ない」「笑止である」

うたてさ——「うたてきさま」「うたてきこと」

わびし

(形) (一)「淋しい」「心細い」 (二)「ひろい」「困る」「難儀である」「惱ましい」「情ない」 (三)「

みすぼらしい」「貧しい」

——(一)「梶枕わびしくおぼさばかし」こよせむ。(秋成遺文)——舟旅を心細く思はれるなら、

—(二)さもあらずと思ひながら聞きぬたるとわびし。(徒然草) づら

わびしげ——「わびしいさま」

わびしむ——「心細がらす」「困らす」「苦します」

—道の程わびしめずして。(保元物語) 道中心細がらせないで。

わびしらに——「わびしさうに」

わぶ——「(一)心細く思ふ」「淋しく思ふ」「(二)淋しく暮す」「(三)づらく思ふ」「(四)困る」「(四)おち

ぶれる」「貧しげである」「(五)……し兼ねる」

—(一)嵐の烈しきをわびつづぞ過しげる。(東關紀行) 心細く思ひながら、

—(二)朝な夕なもしほたれつづわぶるばかりなるを。(雁のゆきかひ) 朝夕しよんぼ、淋しく

暮してゐるばかりですのに。

—(三)かくわびしたる者。(方丈記) 此の様に困り切つてほけた者。

—(五)住みわびて月の都を出でしかど。(十六夜日記) 住みかねて

おもひわぶ——「わびしく思ふ」「思ひわづらふ」

とこ

〔接頭〕いつも變らぬ意を表はす。

とこしなへ とこしなへ とことは——「永久」いつまでも

とこやみ 「永久に暗黒なこと」

とこよ——(一)「永久に變らぬこと」(二)「常世の國」

とこよのくに——(一)「遠い異國」(二)「不老不死の國」

つね

〔名、副〕(一)「同じ状態にあること」「不變」(二)「普通」「尋常」(三)「平生」「いつも」

つねなし——「無常である」「はかない」

よのつね——「世間竝」「普通」「通り」

——その様よのつねならず。(方丈記)——「通り」

なのみ

ななめ 〔名、副〕(一)「通り」「世間竝」(二)「通りでない」「竝々でない」「甚だしい」「そ

れどころでない」

——(一)「なのためにしいづるふしもなどかなからむ。(増鏡)——「通り」でかすこともどうしてなが

らうか。

—(一)口をしなときこゆるもなのめなり。(増鏡)——遺憾だと言ふだけでは言ひたりない。

ななめならず　なめならず——「竝々でない」「通りでない」「際立つてゐる」

やむごとなし

やんごとなし (形) (一)「打捨てておかれぬ」「(二)「通りでない」竝々でない」

「非常である」(三)「甚だ尊い」「恐れ多い」

—(一)去年の冬いたるべきな、やむごとなき事ありて。(後の岡部日記)——打捨ておかれぬ

—(三)やむごとなきおまへに飼はせ給へる。(樞園文集)——尊い

やんごとなし——「やんごとなきさう」

とよあしはら

「日本」の異稱。

とよさかのぼる——「朝日が美しくのぼる」

とよはたぐも——「旗のなびく様にたなびく美しい雲」

あま

あめ (名) 「天」「空」

あめつち——「天地」

あめがした　あめのした——「天下」

あまのほら——「大空」、枕詞としては、富士、ふりまけ見る、に續ける。

あまつかみ——「天上の神」

あまつそら——(一)「天」(二)「朝廷」「禁中」

——(二)言の葉をあまつそらまで聞えあげ、〔古今集〕

あまつひつぎ——「皇位の御繼承」「天位」

すぢ

(名)(一)「系統」「血統」「家筋」(二)「筋道」「わけがら」(三)「それに關した事柄」「その方面」
「専門」「點」

——(一)とつ國はその王のすぢ定められることなくして、(玉勝間)

——(二)言ひやるすぢ通らす。(玉勝間)

——(三)そのすぢと定めたるかたなりなくて、(玉勝間)——それと専門に定めた點もなく、

すぶ

(他動)(一)「しつにする」「まどめる」(二)「支配する」「統治する」
すべがみ すめがみ——「神」の尊稱。

すめみま——「天照大神の御子孫」

すべらぎ すめらぎ すめろぎ すめらみこと——「天皇」の尊稱。

すめらみくに——「皇國」

そす

(他動) (一)「治める」(二)「食ふ」「飲む」「著る」等の敬語。

なすくに——「天皇の統治し給ふ國」

ひとくさ

あなひとくさ (名) 衆民を草の多いのに譬へて言ふ。「人民」

——ひとくさしげきちまたの。(琴後集)

おほやけ

(名) (一)「朝廷」「政府」又、「その關係するもの」(二)「天子」(三)「國家」「社會」

——(一)おほやけの御守。(増鏡)——「朝廷」の御守護

——(二)ただびにておほやけの御うしろみをするなむ。(源氏物語)——臣下として天子の輔佐を

することが、

こうちが こうちけ——「朝廷」

うち

(名) (一)「内裏」(二)「主上」(三)「内心」

——(一)うちなる女房。(徒然草)

—(二)これはうちにてわたらせ給ふぞや。(平家物語)

うちのうへ——「主上」

みかど——(一)「御門」特に、「皇居の御門」(二)「皇居」「皇室」「朝廷」(三)「天皇」(四)「皇都」「皇

國」

—(四)このとほのみかどは。(琴後集)——都

ももしき——「皇居」

—ももしきの内何事も變らず。(増鏡)

ももしきの——宮、大宮にかける枕詞。

あらひとがみ あきつかみ いちじん じふぜんのみみ じふぜんのあるじ——「天皇」

とうぐう はるのみや まうけのきみ——(一)「東宮御所」(二)「皇太子殿下」

せんとう——(一)「仙人の住む洞」(二)「上皇の御所」(三)「上皇」

はこやのやま——せんとうの(一)及(二)に同じ。

ひじり

(名) (一)「聖人」(二)「聖天子」「天皇」(三)「高僧」「僧侶」(四)「道に勝れた者」

一(一)ひじりの道をも、佛の法をも、(琴後集) 聖人の道—儒教

一(二)古へのひじりの御代の政をも忘れ、(徒然草)

一(三)汝の姿はひじりに似て心は濁に染めり。(方丈記) 僧

一(四)この道のひじり達は記しおかれたりける。(十六夜日記) 斯道の達人

ひじりはふし—「法師」

くも

(名) (一)「雲のある高い處」空 (二)「遙かに、又遠く離れた處」(三)「雲」(四)「禁中」

一(一)「雲の煙となさむことも、(十訓抄) 空

一(二)「遠きくもぬを思ひやり、(徒然草)

くもぢ—「雲の中の鳥など通ふ路」

くものう—(一)「空」(二)「禁中」

くもの—(一)「禁中」皇居 (二)「帝都」

くものうへびと てんじやうびと うへのおのこ—「四位・五位の人、及び六位の藏人の昇殿を許

された人」

てんじやう——(一)「清涼殿の殿上の間」(二)「殿上の間に伺候すること」(三)「殿上人」

かんだちめ——「三位以上の人」

いちのひと——朝廷に於て第一位の人の意。「摂政・關白」

いちのおとど いちのかみ——「左大臣」

おとど

(名) (一)「貴人の邸宅」御殿 (二)大臣・公卿の尊稱。(三)婦人の尊稱。

——(一)後徳大寺のおとどの、(徒然草)

——(三)母おとどあけれ嘆き、(宇津保物語)

おほきおとど——「太政大臣」

よるのおとど よんのおとど——「天皇の御寢所」

とのゐ

(名)「御所や官署等に夜警して宿泊すること」

とのゐどころ——「宿直所」

とのゐびと——「宿直人」

とのごもる おほとのごもる おんのごもる——殿に籠る義から、「御寢になる」

な

なに (代) 「何」何故

—せきとどめまほしく思ふはなぞ。(千蔭遺文)

—見渡せば山もとかすむ水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ (増鏡) 何故

なじ など などで などや —「どうして」

—など長押はうたぬぞ。(十訓抄)

なじか なじかは などが などかは なにかは —疑問及び反語の意。

—さばかりならば、なじかは棄てし。(徒然草) 何故棄てたのか。

なでふ —「(一)何といふ」「どういふ」「どれ程の」「(二)何として」「どうして」

—「(一)なでふ事があらんとぞ覺え侍る。(増鏡) どれ程の事があらうかと思はれます。

—「(二)なでふ名により文字にはよるべき。(平家物語)

とふ

てふ (連) といふの約。

—「こてふにも似ぬ夜のさまなれど、(琴後集) 來いといふ

なんでふ —なんといふの約。

— なんてふことのあるべきと思ひ悔つて。(平家物語)

なかなか

〔副〕(一)「中程」「中途」(二)「なまじつか」(三)「却つて」(四)「相應に」「頗る」

— (一)「なまなかに消えは消えなで埋火の生きて甲斐なき世にもあるかな(新古今集)」——「なまじつか」が身の死ぬといふわけでもなく、埋火のやうに世に埋もれて生きてゐても、本當につまりぬ世の中であるよ。

— (三)「なかなかやう變りて優なる方も侍りき。(方丈記)」——「却つて風が變つてゐて、

なから」——(一)「半分」「なかば」(二)「半分程」「大半」

— (一)「山のなからはかりの平らかなるに、(うけらが花)」——「山の中腹あたりの平らかなところ」
— (二)「なからは死に入りぬ。(宇治拾遺物語)」——「死んど

はした

(名) (一)「半途」「どちらつかず」(二)「はた」ために同じ。

はしたなし — (一)「中途半端である」(二)「間が悪い」「手持無沙汰である」(三)「情ない」「意地が悪い」(四)「都合が悪い」「體裁が悪い」「困る」「迷惑である」(五)「烈しい」「ひどい」「無暗である」
— (二)「はしたなきもの。異人を呼ぶに我がとてさし出でたるもの。(枕草子)」——「間の悪いものは

—(三)いとばしたなくもてなして、(十訓抄) つれなく

—(四)はしたなくうちしぐれきぬれば、(鈴屋集) 都合悪く

—(五)その道にもいとばしたなうものし給ふ。(増鏡) ひどく

はしたなむ — (一)「迷惑をかける」「困らす」 (二)「戒める」「咎める」

はしため — 「召使の女」

はしたもの — 「召使」

かた

〔接頭〕 (一)「片方」 (二)「不完全な」「中途半端」

—(一)衣がたしきひとりかも寝む。(新古今集)

—(二)悪源太の乗り給へる馬、かたなつげの駒にて、(平治物語)

かたうど — かたひとの音便。「味方」「仲間」

—この度の御方人は、(増鏡)

かたうらみ — 「一方の恨みとなること」

かたおち — 「一方だけ重くすること」「偏頗」

かたなり——(一)「未熟」「拙劣」(二)「身體の未熟なこと」

—(一)「まだかたなりなるうひごゑ、(うけらが花)」

—(二)「生ひ立ちゆくままに……まだかたなりなる所ありて、(琴後集)——身體が生長し切らない

かたは——(一)「不十分」「未熟」「拙劣」「缺點」(二)「不具なこと」「不具な人」

—(一)「我ながらだにいとかたはに見苦しう、(玉勝間)——自分から見てさへ甚だ未熟で見苦しく

かたは——「物の不完全なこと」「不十分」「未熟」

—「いまだ堅固かたはなるより、(徒然草)——まだ全く未熟なうちから、

まほ——前條と相對する語。(一)「完全」「よく整つてゐること」「無難」(二)「眞正面」「正しいさま」

—(一)「御かたちもまほに美しうとのひて、(増鏡)——御容貌も難がなく美しく整つて、

—(二)「御しとねにまほにも居て、(源氏物語)——正しく

かたち

(名) (一)「容貌」「姿」(二)「かたちのよいこと」「容貌のよい人」(三)「様子」「状態」

—(一)「品もいやしからず、かたちもめやすく、(十訓抄)——人品も賤しくなく、容貌も非難すべ
き所なく、

ありさま——「態度」「風采」「様子」「姿」

—さしもはなやかにわたらせ給ひし御ありさまは、いづちいになん。(吉野拾遺)——あれ程美し
くいらつしやつた御姿はどこへ消え失せたのであらう。

かたちありさま——「容貌姿態」

さまかたち——「姿顔つき」

みめ——(一)「見た様子」「見た感じ」(二)「容貌」

——(二)すべてみめよく品高けれども、(十訓抄)——容貌

まなこ

(名)(一)「目」「瞳」(二)「目の様に目立つもの」「肝心な物」「中心物」

——(二)庵のまなこは櫻にしあれば、(成蹊高校)——中心物

まなじり——「目じり」

まなこぬ まなざし——「目つき」

まのあたり——(一)「目の前」(二)「直接」「親しく」

おもやう

おももち つらつき——「面ざし」「顔付」

—憎きおもやうにて言ひ出づることは、(海軍各校)

まみ——「目つき」まなざし」

—まのつらつきは、(琴後集)——まなざしや容貌は。

おもえり

(名)「面をえらぶこと」「人をえらぶこと」

ひとわき——「人によつて差別をつけること」「依佐良風をすること」

おもておこす

(自動)「面目を施す」「名譽となる」

おもておこし——「面目を施すこと」「名譽」

—身のおもておこしと思ひて、(増鏡)——名譽

おもてふす——「面目をつぶす」「不名譽になる」

おもくぶせ おもふせ——「面目ない事」「不名譽」

おもなし——(一)「人にあはす顔がない」「面目ない」(二)「平氣である」「恥を知らない」

—(二)人の請ふままに、おもなく短冊一ひらなど書き出でて見るにも、(玉勝間)——他人から頼まれるにまかせて恥知らずにも短冊一枚など書いてみるにつけても。

なにおふ

なにしおふ (自動) (一) さういふ名を持つてゐる (二) 有名である

— (一) 名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやしやと (古今集) 都鳥といふ名をもつてゐるならば、都のことは知つてゐようから、いざ質れてみよう。私の思ふ人は今無事かどうかと。

— (二) 花橘は名にこそおへれ。(徒然草)

なだたし — 「名が立つやうである」「評判が立つやうである」

なだたる — 「名高い」「世に聞えてゐる」

— なたたる山河のけはひな、(琴後集) 名高い

ななう — 「名聲を得る」「名高くなる」

おもだたし — 「面目である」「光榮である」

— 祭の使などにいでたるも、おもだたしからすやはある。(枕草子)

ただ

(副) (一) 真直ぐ (二) 直接「すぐ」 (三) その通り「丁度」「そっくり」

— (二) たださしむかひ語らふ心地す。(権園文集) 直接

なほ——(一)「真直々」「真直なもの」「真直な事」(二)「平凡」「普通」

なほし——(一)「真直である」「平らかである」(二)「正しい」「すなほである」

なほなほし——「平凡である」「普通である」

—「なほなほしききはの人なりなましかげまでもありぬべきを、(琴後集)——平凡な分際の人であつたとしたら、さういふ風でも構はないが、

なほびと——「普通の人」「高貴でない人」

ながら

(接尾) (一)「そつくり」「そのまま」(二)「と共に」「併せて」

—(一)「闇ながらいささか頭もたげて、(鈴屋集)——寢室の中に寝てゐながら僅かに頭をもちあげて、

—(二)「枝ながら見よ、(古今集)——枝のままで見よ。

しかながら——(一)「副」「すべて」「全く」(二)「接續」「然し」

—(一)「これしかながら信西を失はん爲とぞ聞えける。(平治物語)——全く

ことごと

(副) (一)「どれもこれも」「夫々」「皆」(二)「委しく」

—(一)ことごとくなす事なくして身は老いぬ。(徒然草)

よのことごとく——「生涯」

なつく

(自動、他動) (一)自動、「なれ親しむ」親しむ (二)他動、「なつかせる」馴らす

なつかし——(一)「親しまれる」好ましい (二)「可愛ら」可憐 (三)「ゆかしい」上品である

—(一)菊も……なかなかに品なくなつかしからず。(玉勝間)——却つて下品で好ましくない。

—(二)あまた鳴くなるが……にほひなつかしう。(樞園文集)——音が可愛ゆく。

—(三)柴垣なつかしくゆひわたしなど。(鈴屋集)

なつかしむ なつかしぶ——「なつかしいと思ふ」

なづさふ——「なつく」馴れる

—かかる眺めに朝夕なづさひては、(泊酒全集)——斯ういふ眺めにいつも馴れると。

むつぶ

むつばふ むつる (自動) 「なれつく」親しくする

—あるは親しみむつるるをもあなづり、(十訓抄)——或は親しみ睦まじくする人をも侮り、

—うらなくむつばひつるを。(琴後集)

むつび——「親しむこと」親睦

おもひむつぶ——「親しく思ふ」

むつき むつびづき——「一月」

なつむ

(自動) (一)「行き悩む」滞る (二)「悩み煩ふ」 (三)「拘泥する」執着する

——(一)岩が根高く重りて駒もなづむばかりなり。(東關紀行)

——(三)必ずなづみ守るべきにもあらず。(玉勝間)

うつろ

(名) 「中の空いてゐること」中の中からなつたところ

うつほ——「うつろ」酒

さうざうし

(形) 「心に空虚を感じる」物足りない

——この酒ひとりたうべむがさうざうしければ。(徒然草)——この酒をひとり飲むのは物足りな

いから。

うとし

(形) 「縁遠い」迂遠である「遠ざかつてゐる」親しくない「不得手である」

——おきな若くしてなりはひの道にうとく。(琴後集)——翁は若くして商賈の道に不得手で、

うとむ——「親しまない」「嫌ふ」「疎外する」

うとまし——うとむより轉成の形容詞。「疎むべきである」「厭はしい」「不愉快である」

——木立うとましからぬほどにつくろひなして、(鈴屋集)——木立をいやらしくない程度に手入れして、

うとましげ——「うとましさう」

おぞし おぞし おぞまし おぞまし——「恐ろしい」「するい」

——守護といふものの目代よりはおぞましきをするたれば、(増鏡)——「恐ろしい」

けうとし——(一)「厭はしい」「うとましう」(二)「恐ろしい」「氣味が悪い」

むくつけし——(一)「恐ろしい」(二)「氣味悪い」「むさくるしい」「いやらしう」

うらむ

(他動) (一)「不平に思ふ」「愚痴をこぼす」(二)「蟲など恨み聲に物淋しく鳴くの言ふ」

うらみ——(一)「恨むこと」「不満」(二)「恨み聲にかばそく鳴く蟲の音」

——(三)「蟲のうらみも絶えくなり。(平家物語)」

かこつ

(他動) (一)「かこつける」「そのせいにする」(二)「欺く」「愚痴を言ふ」

—(二)あだなる契をかこち、(徒然草)——歎く

かこちがほ——「かこつ様な顔つき」「かこつ様な様子」

かごと——(一)「かこつけて言ふ言葉」「口實」(二)「非難」「愚痴」「恨み」(三)「申譯だけのこと」

—(二)かごととも聞えつべくなむ。(源氏物語)

—(三)かごとばかり引き給ひつげたり。(榮花物語)

かごとがまし——(一)「かこつげがましい」「そのせいする様だ」(二)「愚痴を言ふ風である」

(二)虫の音がごとがましく。(徒然草)

はちがまし

(形)「恥かしく思ふ」「恥に見える」

—はちがましき事をただす。(十訓抄)

はづかし はづかはし——(一)「恥づべきである」「面目ない」(二)「氣おくれがする」「遠慮される」

「氣まりが悪い」

—(二)へだてなく馴ねぬる人も、程へて見るははづかしからぬかは。(徒然茶)——氣まりの悪くないものでない。

はづかしげ——「恥かしいさま」

しる

(自動)「痴る」「愚になる」「ぼける」「ふざける」「馬鹿げてゐる」

——「かくわびしれたる者ども、(方丈記)——この様に困つてぼけた者どもは、

おいしる　おいしらふ——「老いぼれる」

しれごと——(一)「たわけた言葉」(二)「馬鹿な事」

——(一)「しれごとな言ひそ、(宇治拾遺物語)——たわけたことを言ふな。

しれもの——「馬鹿者」「愚者」

しれわらひ——「痴れたさまをして笑ふこと」

さらぼふ——「瘦せ衰へる」「衰へる」

えせもの

(名)「つまらぬ奴」え。せ。ば。「似て非な」「つまらない」「悪い」といふ意である。

えせものしり——「牛可通」

なま

(接頭) (一)「充分でない」「なまなか」「半端」の意を表はす。(二)「少し」「やや」「何となく」の意を

表はす。(三)「地位が低い」「経験が少い」「名前だけ」の意を表はす。

—(一)御ぐしのなましめりたる、(宇津保物語)——御髪の半しめりしたのを。

—(二)なまかたはらいたければ、(源氏物語)——少々笑止なので。

—(三)部におはしますなま宮たちの、(増鏡)——都にいらつしやる名だけで権力もない宮様方の

なまざかし——「こざかしい」「えらぶつてゐる」

なまさぶらひ——「官位の低い侍」

なまなま——「半途」「未熟」「良い加減なこと」「竝大低」「すぐれてゐないこと」

—なまなまの物知り人などの、(玉勝間)——未熟

なまなか——「中途半端」「不十分」

なまじひ——(一)「なまなかに強ひて」「無理に」(二)「爲なくてもよいのに」「欲しないのに」「さうで

なくともよいのに」(三)「かりそめ」「うつかり」

—(一)「重盛なまじひにその職に居ながら、(源平盛衰記)——欲せぬのに

—(三)「行綱なまじひなる事申し出でて、(平家物語)——うつかりした事

をこ

(名)「愚な事」「迂濶」

—いみじきをこの者なり。(十訓抄)

なこつく——つまらぬ事をする「悪く言ふ」

—かたがたいかたでなこつくべき。(十訓抄)——いづれにしてもどうしてつまらぬ事をしてかまされ

ようか。

をこめく——馬鹿らしく見える「戯れる」

なこがまし——(一)「馬鹿らしい」「愚しい」「(二)」「つしやばり過ぎる」「まじながまし」

—(一)五人の子供の歌残りなく書きつづけぬるも、かつはいとをこがましけれど、(十六夜日記)

——五人の子供の歌をこの様に全部書き續けるのも、一面から考へると大そう馬鹿らしいこと

であるが、

—(二)いかにをこがましく思ひつらんと恥ぢあへり。(十訓抄)——如何に出しやばり過ぎてゐる

様に思つたらうかと、恥ぢあつた。

らうがはし

(形)「亂雑である」「むさくるしい」「うるさい」「だらしない」「騒々しい」雑沓してゐる

—あまり人のゆきき多く、らうがはしきを。(玉勝間)——雑沓してゐる

らうがはしさま——「らうがはしいさま」

みだりがはし——「秩序がない」「亂雑である」「無作法である」

—花もみだりがはしく散りまがふに、(増鏡)——花もはらはらと散り亂れる折に、

みだりがはしさま——「みだりがはしいさま」

みだりごころ——「病氣の氣分」「病氣」

—みだりごころのいと深く限りなる折しも、(源氏物語)——病氣が大そう重く、もう臨終といふ

時、

みだる——「亂す」「騷亂を起す」

しどろに

(副)「秩序なく」「だらしなく」

しどけなし——「だらしない」「締りがない」

ゆる

(自動)「許される」「赦される」「うちとける」

—弟朝成はじめて昇殿ゆりて、(十訓抄)

ゆるし　ゆるされ——「許可」「聽許」「赦免」

おとな

(名) (一)「成人」(二)「元服の済んだ者」(三)「頭だつ者」

—(三)時のおとなにて、(増鏡)——當代の重臣で、

おとなし おとなおとなし—(一)「大人らしい」まててゐる」(二)「頭立つてゐる」しつかりして

ゐる「重きをなしてゐる」(三)「温順である」

—(一)おとなしき頼朝を、池殿の仰せにて助け置く上は、(平治物語)——大人らしい

おとなぶ—「大人らしくなる」成長する」

—おとなびさだすぎ給へる心地すれど、(増鏡)

おとなだつ—(一)「大人らしくなる」(二)「主だつ」頭立つ」

—(二)さるべきおとなだつ人々に、(増鏡)——主だつ

うなぬ

(名) (一)「小兒のうなじのところに髪を切り垂れたもの」(二)「うなぬを結つた童子」幼童」

うなぬこ—「うなぬ髪の子」幼童」

わらは—(一)「子供」(二)「稚兒」(三)「召使の子供」

わらはい—わらはの覆敷。

わらはめ——「少女」

うなじ

(名)「首すぢ」

うなれ——「うなじの根」「首」

——うなれつきて申さく。(琴後集)

うなかぶす——「頂を傾げる」「頭を垂れる」

ぬか——(一)「額」(二)「額をつけること」「禮拜」

——(一)「皆ぬかをつきて悦びけり。(増鏡)」

——(二)「曉のぬかなどいみじうあはれなり。(枕草子)」

ぬかづく——「禮拜する」「頓首する」

ねぐ

のむ (他動)「祈る」「願ふ」

ねぎごと——「祈願」「願ひ事」

——夜ひとよ心をこらしてねぎごとしたり。(花月草紙)

ねんず——(一)「祈る」(二)「ちゝちゝる」「怒ぶ」

—(一)清水の観音にれんじ奉りても。(源氏物語)

—(二)今も立ちかへらまほしき心地するを強ひて念じてへめぐるに。(楳園文集)——今直ぐにも
歸りたい心地がするのを強ひてこらへて巡り歩くと。

ほぐ

ほがふ (他動) (一)「祝ふ」稱へ祝ふ「(二)「祈る」

ほぎごと——(一)「祝ひ事」(二)「祝ひの言葉」

—(二)立かへる春のほぎこときこえ侍り。(うけらが花)

みや

(名)「禮」

みやなし——「無禮である」

—遠矢に大将など射るもみやなき事なれば。(花月草紙)

みやぶ みやまふ——「敬ぶ」

みやまひ——「敬禮」「尊敬」「禮儀」

みやみやし——「恭々しい」

おろがむ——「拜む」

なみす

(他動) 「無きが如くする」「侮る」「無視する」

—藤原氏のさかりになりて君をなみし、(花月草紙)

なめ 「相手を無視したさま」「無禮」

なめし 「見下げたさまである」「無禮である」

—文ことばなめき人こそいと憎けれ。(枕草子) 手紙の文句の無禮な人は一層憎らしい。

なめげ 「無理らしく」「侮つた様」

ないがしる (一)「輕蔑」「侮ること」(二)「打とけて」「だらしなく」

—(一)富める家の人のないがしるなる氣色を聞くにも、(方丈記)

—(二)ないがしるに著なして、(源氏物語) だらしなく

むらい 「無禮」

よだけし

(形) (一)「仰山である」「いかめしい」(二)「煩はしい」「臆劫である」

—(一)所せくよだけき儀式をつくして、(源氏物語) 重々しくいかめしい

おほゆ

(自動) (一)「その様に見える」「似る」(二)「さう思はれる」「思はれる」

—(一)さながら如月彌生の空おほえて、(羅月庵文稿)——丁度陰曆二、三月の空合のやうに見えて、

おほゆ——他動詞の場合は、(一)心にとどめる「記憶する」(二)「習ひ知る」

おほえ——(一)「覚えること」(二)「自信」(三)「信用」(四)「世の覺え」「評判」「氣受け」「賞

讃」「名望」

—(二)おほえある力、(宇治拾遺物語)——自信

—(三)世の覺え口惜しからず、(源氏物語)——世間の氣受けが惡くなく、

むかしおほゆ——昔が思ひ出される「昔風に思はれる」

—昔おほえてしのばし。(樂訓)——昔が思ひ出されて慕はしい。

おもほゆ——「思はれる」

—いとをかしく思ほゆ。(權園文集)

おもほえず——「覺えず」「思ひがけず」

—おもほえず谷川の流に出でぬ。(權園文集)

おもほす

(他動) おもふの敬語。「お思ひになる」

過ぎにし方がきつくしおもほし出づるに。(増鏡)

おもほす——おもほすの約。又、その連用形の下に續く動詞を敬語とする。

おもほす——前條に同じ。

おもほしめす——おもほすの一層の敬語。

おもほし——「思はれる」

——おもほし言はぬは、(徒然草)

おほしなげく

(自動) あほしに動詞が續く時は、その動詞は敬語となる。「お嘆きになる」

おほしまよふ——「お迷ひになる」

おほしすつ——「お捨てになる」

え

(副) 下に打消の語が續いて、「何々し得ぬ」

——えさらぬ事のみにと重りて、(徒然草) 避け難い事ばかり益々重つて、

な……そ——禁止の意を表はす。

「かくな恨みぞ。(徒然草)——そんなに恨むな。

おろか

〔副〕(一)「おろそか」「並々」「假初」(二)「言ふまでもない」「物の數でない」「それ位では言ひ

盡せない」

—(一)「おろかなる契だに。(増鏡)——假初の

—(二)「口借しと言ふもおろかなり。(増鏡)——残念だと言つてもそれ位では言ひ盡せない。

いふもおろかなり いへばおろかなり——「さう言つたところで、それ位では言ひつくせない」「言ふ

までもない」

いひがひなし いふがひなし——(一)「言ふ價值がない」「言つても何にもならぬ」(二)「不甲斐ない」

「卑怯である」「(三)「賤しい」「うまらない」

—(二)「いふがひなき者どもが。(太平記)——不甲斐ない

いふかたなし——「言ひ様がない」

「夢うつつともいふかたなし。(東京高校)

いひしらす——「言ひ様もない」「何とも言はれぬ」

紫の御指貫いひしらすなまめかしう見え給ふ。(増鏡) 紫の御指貫をはかれた御様子が、言

ひ様もなく美々しく上品に見申される。

えもいはず いへばえに——「言ふに言はれず」

—えもいはずさうぞきて参れり。(増鏡) 言ふに言はれず着飾つて参つた。

—言へばえに悲しう思へるさまを。(源氏物語)

えならず——「通りでない」言ひ様なく良い」

—珍らしくえならぬ調度ども竝へおき。(徒然草) 珍らしく大そう立派な道具類を竝へおき、

たとしへなし たとへなし——「たとへ様がない」比類ない程違ふ」

たとしへ——「たとへ」

いへばさらなり

いふもさらなり いへばおろかなり (句) 「言ふまでもない」

—その程のめでたさ、いへばさらなり。(増鏡)

さらなり——前條に同じ。

さらにもいはず——「新に言ふまでもない」

さらしに——(一)「其上」重ねて「(二)改めて」新に「(三)決して」少しも

つやつや——「更に」少しも「一向」

——つやつや物も申されず。(平家物語)

かこか

かこか (劇) 四方圓まれた様に言ふ。「物評か」ひつそり

——世ばなれてかこかに住ひなしたり。(琴後集)

かひ

(名) 「峽」山と山との間

やまかひ やまあひ——「山と山との間」

やまぐち——「山の入口」

やまだ——「山間にある田」

やまが——「山里の家」

やまがは——「山中を流れる川」谷川。やまかはは「山と川」の意で別。

やまがみ

(名) 「山あるき」山歩きする人

やまわけごも——「山路を分けてゆく時着る着物」

のづかき——「野中の丘」

をぬ——をば接頭語。「野原」

なだ——「田」

かち

(名) 「徒歩」

かちだち——「徒歩で出て立つこと」

——其の勢皆かちだちにて。(太平記)

がり——「の許へ」

——人のがりいふべき事ありて。(徒然草)

ありく——「歩く」

ありき——「歩くこと」「外出」

——今日をかぎりの御ありき。(増鏡)

くが

(名) 「陸」

くがち——「陸上の路」

うみづら — (一)「海面」 (二)「海岸」

(一)……朝日子は、月影よりもけにうみづらに輝きて、(松山高校) 海面

(二)うみづらよりは少し引き入りて、(増鏡) 海岸

かはづら — (一)「川の面」 (二)「川のほとり」

やまづら — (一)「山の表面」 (二)「山邊」

すそわ — 「山の裾を取りまいた處」

うらわ — 「浦の彎曲したところ」 浦邊

うらやま — 「水邊や山」

たむく

(他動) (一)「神佛に奉る」 (二)「饒別する」

— (三)老いぬともまたもあはんと行く年に涙の玉をたむけつるかな、(新古今集) こんなに年をとつても、ゆく年にまた逢はうとして涙の饒別にしたことよ。

たむけ — (一)「神佛に手向けること」 手向けるもの (二)「饒別」

を

(名) (一)「峯」 (二)「岡」 (三)「麓」

—(一)向つな_レの梢をうつつして鏡に向ひ、(琴後集)——峯

—(三)山櫻峰にもなにも植ゑおかむ……(増鏡)——麓

な_レのへ——「山頂」

ね_レね_レる——「峯」

わた

名)「海」

わたのかみ——「海神」

わたのはら——「海原」

み——「海」

わたつみ——(一)「海神」(二)「海」

うまや

(名)(一)「馬小屋」(二)「宿場」

—(二)廿日尾張國下戸といふうまやを行く。(十六夜日記)

うまやち——「驛のある街道」「街道」

うまのはなむけ——「送別の宴」「饞別」

—かの國人うまのはなむけし別惜みて、(土佐日記)

とまり——(一)「とまること」とまるころ『漢』(二)「やどること」宿泊「やどる處」宿

——(一)那波のとまりを追はんとて、(土佐日記)

——(二)或は山館野亭の夜のとまり、(東關紀行)

とまる——(一)「碇泊する」(二)「宿る」

やどる——(一)「宿としてゐる」住む「宿泊する」(二)「とどまる」たまる

やどり——(一)「宿ること」旅泊「やどる所」住所「家」旅宿「(二)「とどまる所」とどまること」

——(一)「あやしのやどりに立ち寄りては、(増鏡) 家

——(二)「花散らす風のやどりは誰か知る我に教へよ行きて恨みん(古今集)

とやま

はやま (名) 深山に對して、「里近い山」

——萩のうはかぜ外山の鹿の音など、(花月草紙)

おくやま——「里から遠い山」

のわきだつ

(自動)「野分の様に吹く」野分らしく吹く

のわき のわけ——「秋の末吹く風」

ふすぶ

(他動) 「煙らす」

——蚊遣火ふすぶるもあはれなり。(徒然草)

さと

(名) (一)「人の住む地」(二)「田舎」(三)「宮仕への者から自分の家を指して言ふ。(四)「寺に居る者から俗の家を指して言ふ。」

やまざと——(一)「山中の里」(二)「山里の家」(三)「山の別荘」

さとばなる——「人里から離れる」

ふるさと——(一)「舊都」「昔物事のあつた地」「古跡」(二)「昔屢々行つた地」「嘗て居た土地」(三)「故郷」

——(一)「ふるさととなりにし奈良の都にも色はかはらず花は咲きけり(古今集)——舊都

——(二)「駒なめていざ見に行かむふるさとと雪とのみこそ花は散るらめ(古今集)——駒を連れて

皆でさあ花見に行かう。今まで屢々行つたことのあるあの地の櫻はもうすっかり満開で、ひた

すら雪のやうに花は散つてゐることであらう。

さとおぶ——さとおぶに動詞化の語尾ぶがつく。「田舎めく」「田舎風をする」

いたくさとびて見る目もいとうたて。(櫻園文集)

ひな——「田舎」

ひなぶ——「田舎びる」「下品くさい」

—都のてぶり忽ちに改まりて、ただ鄙びたる武士に異ならず。(方丈記)——都の風俗が忽ち變つて、田舎くさい武士の風と何等異るところがない。

むかしぶ——「昔風をする」「古くさい」

—深くむかしびたらむ方は。(十訓抄)

なよぶ

(自動)「なよなよする」「しなしなする」

—いと艶になよびたる薄様に書かせ給ひて。(増鏡)

なよびか なよびやか なよやか なよらか——「しなやか」「なよく」「艶めいて」

—烏帽子直衣のなよらかなるにて。(増鏡)

もよほす

(自動)「萌す」「起らうとする」

「夕づけて雪やもよほす、物の音ふつに絶えたり。(藤簾册子) 夕方になつて雪が降り出すのであらうが、物音が全く絶えてしまつた。

もよほす——(一)「促す」せき立てる」(二)「舉行する」企てる」

もよほし——(一)「起らうとすること」きざし」(二)「促すこと」催促」種」(三)「計畫」設備」

もよほしがほ——「催す様な風」涙をさそふ様なさま」

かずまふ

(他動) (一)「數へる」(二)「人並に數へる」相當の人の中に加へる」重く見る」

かずならず——「數へる價値がない」つまらない」

——ましてその數ならぬ類、(方丈記) つまらない

かずかず——「多數」いろく「何彼につけ」

——かずかずに残りなく語りつづくるこそ、(徒然草) いろくとすつかり語り續けるのは、

かずそふ——(一)「數がふえる」(二)「數を添へる」

——(一)「かかることさ」かずそひにけりと、(増鏡) こんな事まで増してきたなあと、

かすなつくす——「網羅する」全部

——さまさまの御遊かすなつくし。(増鏡)

いくそ

(副)「いくら」「何程」

いくそたひ——「幾度」

いくそばく——いくそばく——いくそに同じ。

——そのつひえいくそばくぞ。(方文記)

ここだ

ここたく(副)(一)如何ほど(二)甚だしく「澤山」「いろく」「若干」

(二)たが園の梅の花ぞもひさかたの清きつくよにここだ散りくる(萬葉集)——深山

そこばく——そこばく——「いくらか」「いろいろ」

そこら——「澤山」「いろいろ」

——ここら物をのみ思して。(増鏡)——色々物思ひばかりされて。

ち

(數)「千」又、「数多いこと」

ちさと——「千里」「遠くの距離」「多くの里」

ちしほ——「幾度も染めること」

ちぢ——「澤山」「色々」

——ちぢのこがね費すもの、(花月草紙)——澤山の金

ちとせ——「千年」「長年」「永久」

ちひろ——「千尋」「非常な深さや長さ」

ちもと——「千本」「数多い本数」

ちよ——「千年」「長い年月」「永久」

ちぐさ——「色々な草」

——庭の千草露重く、(平家物語)

ちぐさ——「種類の多い事」「種々」「色々」

ももち——「百千」「数多」

もも——「百」又、「数多いこと」

やそ

(數)「八十」又、數の多いのに言ふ。

やそしま——「多くの島々」

やそぢ——「八十年」「八十歳」

やしほぢ——「遠い海路」

やち——「八千」又「數多」

やちぐさ——「多くの草」

やちぐさ——「多くの種類」「種々雜多」

やちまた——「道の四方八方に通じてゐるちまた」「數多のちまた」

やちよ——「八千年」「長い年代」

やへ——「八つ重なること」「八つ重なるもの」又、「幾重にも重なること」「幾重にも重なるもの」

やへむぐら——「彌が上にも茂つてゐる葎」

よろじ

名(副) (一)「數多」(二)「萬事」「すべての事」「あらゆるもの」「何かにつげ」

——(一)よろじの社々寺々など、(玉勝間)——數多

もろ

(接頭)「各の」「兩方の」「多くの」等の意を表はす。

もろもろ——「多くのもの」「全體」

もろや——「最初の矢と次に射る矢」

はや——「最初に射る矢」

おとや——「次に射る矢」

あまた

(副)「澤山」「甚しく」

あまたかへり あまたたび——「幾度も」「度々」

——盃あまたたびめぐらすほど、(機園文集)

かへり——(一)「回」「度」(二)「かへりごと」の略、「返事」(三)「贈られた歌に對し詠みかへす歌」

——(二)「御かへりもいさやかに、(十六夜日記)」——御返事も細々と、

かへりごと——(一)「答へ」「返事」(二)「使者の報告」

——(一)「侍従のかへりごと」と疾くあり。(十六夜日記)

かへりごと——「贈物の返禮」

かへりまをし——(一)「使者の報告」(二)「御禮参り」

かたがた

(副) (一)「あれこれ」色々「どれも」何彼につけ (二)「方々」あちらこちら (三)「何れにしても」

一 (一) 朝恩と申し重職と言ひ、かたがた極めさせ給ひぬれば、(平家物語)……どれも皆最高までお極めになつたことであるから、

一 (三) かたがたいかでおこづくべき。(十訓抄)……何れにしてもどうしてつまらぬ事を仕出かされようか。

かた

(名) (一)「方面」事柄「點」(二)「時節」頃 (三)「方面」方向「位置」場所 (四)「手段」方法 (五)「組」仲間

一 (一) 忍ぶ方々しげかりしかば、(方丈記)……事から

一 (四) 今は頼むかたなく見えけり。(十訓抄)……手段

一 (五) かたをわかつて、(古今著聞集)……組

ほど

(名) (一)「程度」度合「限度」(二)「距離」途中「道の間」あたり (三)「時間」時日「時分」頃「間」限り (四)「身分」分限 (五)「人物・年の程度」人柄「年配」(六)「範圍及び長さ

の程度『廣さ』長さ』(七)「……するうちに」……につれて」……してゐると」

—(一)若苗をひきてよきほどにつかねゆひたるを、(權園文集)——よい程度

—(二)頭のほどな食はんとす。(徒然草)——頭のおたりを食はうとする。

—(三)そのほどのとよみ、(増鏡)——時分

—(四)それより下つ方はほどにつけつつ、(徒然草)——身分

—(五)若うさかりの御程に、(増鏡)——若く御盛りの御年配で、

—(六)ほど狭しといへども、(方丈記)

—(七)夜更くるほどに、(十訓抄)——夜更けるにつれて、

—召し具してゆくほどに、(徒然草)——召しつれてゆくうちに、

ほどほど——(一)「程度程度」夫々の階級」(二)「然る可き程度に」それ相應に」

ばかり——(一)「くらゐ」ほど」(二)「頃

—(二)五月ばかりにやありけむ。(十訓抄)——頃

よし

(一)「ままよ」(二)「たとひ」萬一「假に」

—(一)よしやまばれとてなむ。(玉勝間)

ふし

(名) (一)「條」くんだり」ところ「點」段「と」(二)「折」時節「(三)「色や音の調子」

—(一)なめめにしいづるふしもなどはなからむと、(鈴屋集)——人竝になしとげる事もどうして無からうかと。

—(二)をりふしのうつり變ること、(徒然草)

—(三)よろづのものさらかざり、いろふしも、(徒然草)——色調

ふしふし——「箇處箇處」折々」

ひとふし——「點」一かど」

—この頃の歌は「ふし」をかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、(徒然草)——近頃の歌は、一「點」は趣深く詠んでゐると思はれるものはあるが。

きは

(名) (一)「段」(二)「最後」限り「境」(三)「場合」折「(四)「あざり」ほとり「側」(五)「分限」分際「身分」(六)「才能」器量」

—(一)今「きは」うき立つものは、(徒然草)——一段

—(五)いとやんことなききはにはあらぬが。(源氏物語)

きはぎは——(一)「各自の分際」程々(二)「その季節々々」(三)「隅々」

きはぎはし——「際立つてゐる」

きはだかし——「際立つてゐる」押しが強い」

きはだしい——「際立つて殿しい」

—いときはだげうひじりだちて。(増鏡)——甚だ際立つて殿しく聖信らしく振舞つて。

きはこと——「殿ちがひ」圖抜けて」

こころごと——「その趣が他と異つてゐること」格別」

—敵を防ぐべき用心ことなり。(増鏡)——格別

しるし

しるし いちじるし (形)「明白である」際立つてゐる」著しい」

—言はねどしるく見えて。(東園紀行)——はつきり

—たちあかししるくせよ。(徒然草)——明るく

おもひしとしるく——「案の通り」豫想通り」

「けやけし」——「際立つ」著しい「異様である」

「いとけやけくきこしめせど、いかがせむにて、（増鏡）——甚だ異様に思はれたが、如何とも仕方なく、

かけ

（名）（一）「明り」光（二）「姿」かたち「肖像」（三）光のあたらしところ

ひかけ——（一）「日ざし」日光（二）「日蔭」

つきかけ——（一）「月の光」月の姿（二）「月光の影」

——（一）「月かけ」に色合定かならねど、（徒然草）——「月の光」

あさる

（他動）（一）「探し求める」鳥獸など、餌を探し求める」（二）「漁する」

あさり——「漁」

いさる——「魚介をとる」「漁する」

いさり——「漁」

いさりび——「漁する時焚く火」

いさりふね——「漁舟」

すなごる——「魚をとる」

とむ——「探す」「求める」「たづねる」

とめく——「探し来る」「尋ね行く」

——とめこかし梅さかりなるわが宿をうときも人はをりにこそよれ。(新古今和歌集)——たづねて
いらつしやい

あなぐる——「探し求める」「穿鑿する」

——今の世にありふる人々のからうたどもを、廣くあなぐり出でて。(琴後集)——今の世に存命の
人々の漢詩を、廣く一般に探し求めて。

ならひ

(名) (一)「ならふこと」「慣れること」「風習」(二)「普通」「あたりまへ」

——(一)月の傾くをたふならひは、(徒然草)——習慣

——(二)誰もすするに心の寄り易きならひぞかし。(玉勝間)——誰でも何となく心の寄り易いのが
普通である。

ふり

(名) (一)「姿」「服装」(二)「そぶり」「動作」(三)「習慣」

—(三)昔よりもきしふりも ひつつ、(花月草紙)——昔からあり來つた習慣も違ひ、
てぶり——「風俗」ならは「風習」

—都のてぶり忽ちに改めて、(方丈記)——風俗

くにぶり——(一)「國の風俗」「國の風」(二)「諸國の風俗歌」「國歌」

—(一)わがくにぶりの姿にて、(花月草紙)——國風

—(二)いにしへのから歌好める人は、必ずわが國ぶりをよくせり。(琴後集)——昔の漢詩を好
んだ人は、必ずわが國歌—和歌—も上手であつた。

みにぶり——(一)「御國の風儀」(二)「御國の文學」

ねなく

(自動)「聲を立てて泣く」「泣く」

—ねなき勝ちにてすぎし給ふ。(源氏物語)

ねになく ねをなく——「聲を出して泣く」

—あしびきの山時鳥折はへて誰かまさると音をのみぞなく。(古今集)

ねにたつ——「音を立てる」「聲を出す」

―ねにたててよよとうち泣かれぬ。（浦和高校）――聲を出しておいしく泣けてしまふ。

しぬが

しのぶ（他動）（一）「しぬが」（二）「慕ふ」「思ふ」（三）「隠す」

しぬびこと　しのびこと――「弔詞」

しのびこ――「忘れ難」「慕はこ」

しのぶ――自動詞。（一）「かくれる」「避ける」（二）「かくれて通ふ」「こつそり言ふ」

―（一）しのびて尋ねおはしたるに。（徒然草）――こつそり尋ねて行かれたところが。

―（二）しのびたる時鳥の、（枕草子）――低く鳴く

しはぶく

しはぶる（自動）「咳をする」「咳ばらひする」

しはぶき　しはぶるひ――「咳」「咳ばらひ」

はかなし

形（一）「もろ」「頼りない」「變り易い」「心細い」（二）「取るに足らない」（三）「一寸し

た事である」「假初である」

―（一）はかなくうたてき心なり。（十訓）――心細く情ない心である。

―（二）よろづの事いとはかなき事にて、（琴後集）――あらゆる事は、甚だつまらぬ事でも。

—(三)はかなき木草につけて、(樞閣文集)——「寸した

はかなげ——「はかなさう」「はかない様下」

はかなぶ はかなむ——「はかなく思ふ」「はかない様である」

げにはこの世をはかなみ、(徒然草)——「はかなく思ひ

いぶせし

(形) (一)「氣が晴々しない」「面白くない」「氣づまりだ」(二)「穢い」(三)「覺束ない」「氣になる」「疑はしい」

—(一)いぶせき心も慰みぬべし。(徒然草)——「晴々せぬ」

—(二)いぶせき伏屋の賤の女までも。(琴待集)

—(三)花のふまひもおくれなんといぶせし。(成蹊高校)——「花のほころび咲くのも遅くなるであ

らうと氣になる。

おぼおぼし

おぼほし (形) 「はつきりしない」「覺束ない」「疎々しい」

おぼつかなし——(一)「判然しない」「ぼんやりしてゐる」(二)「頼りない」「疑はしい」「氣にかかる」

「待遠い」

—(一)夕月夜のおぼつかなきほどに、(徒然草)——夕月の出てゐるうす暗い時分に、

—(二)新院の御心中おぼつかなしとぞ人申しける。(保元物語)——疑はしい

—(三)都のおとづれいつしかにおぼつかなき程しも、(十六夜日記)——都からの音信が早く來れ

ばよいがと、待遠しく思つてゐる矢先、

おぼめく——「ぼんやりさす」疑ひ思ふ」別に自動詞のもある。

—げにげにしく所々うちおぼめき、(徒然草)——如何にも尤もらしく、所々ぼんやりさせ、

おぼめかす——「ほのめかす」

おぼめかし——「はつきりしない」「判然しない」

—その方おぼめかしからぬ人、(枕草子)

おぼろげ——(一)「不分明」「不確」「ぼんやり」(二)「一通り」「並大抵」(三)おぼろげならすの意

—(二)風雨おぼろげならぬ日ありけり。(十訓抄)

—(三)おぼろげの願によりてにやあらん、風も吹かす。(土佐日記)——並々ならぬ

たどる

(他動) (一)「さぐる」「推知する」「探り求める」(二)「途方に暮れる」(三)「路を迷ひ行く」

「尋ね尋ね行く」

—(一)世の中いかになりゆかむするにかとたどりあへるさまなり。(増鏡)——世の中がどんな風になつてゆく事であらうかと皆が塗方に暮れてゐる様である。

—(二)ただ夢路をたどるやうに侍りて、(藤蓬册子)

たどたどし。「誰かでない」「覺束ない」「不案内である」

—そのかみのことはいみじうたどたどしけれど。(増鏡)——その當時の事は大そう覺束ないが、

こころもとなし。—(一)「覺束ない」氣にかかる「心細い」(二)「待遠い」「じれつたい」

—(一)道のほどもこころもとなし、(枕草子)——道中も心細く、

—(二)來んと言ひつる友、はた暮れ過してやと思ふも心もとなきに、(権園文集)——待遠い

こころもとなげ——「心もとなさう」

たどり——(一)「通ること」「あてど」(二)「研究」「造詣」

—(一)何のたどりもなくあわて騒ぎ、(増鏡)——あてど

—(二)かの老子といひはすぐれて賢くたどり深き人にこそありけり。(玉勝間)——思慮

うしろめたし

暗い

うしろべたし　うしろめたなし　(形) (一)「氣にかかる」不安である (二)「うしろ

—(一)我も白波の名をや立つらんとうしろめたけれど。(花月草紙) 氣になる

—(二)うしろめたなく腹黒き心のあるまじきなり。(十訓抄) うしろ暗い

うしろめたさ　「氣がかり」心許なさ

うしろやすし　「氣がかりでない」安心である

やすし

やすけし　やすらけし　(形)「心のどかである」「安らかである」「安穩である」「満足である」
—やすからず口惜しき事にあひたりとも。(十訓抄) 氣にいらぬ

やすげ　「安さう」「安さま」

やすらか　(一)「心穩やか」「おだやか」(二)「穩當」「際立たず」(三)「容易に」

めやすし　「見にくくない」「見よい」「非難すべきところがない」「結構である」

—品もいやしからず、かたしもめやすく。(十訓抄) 人品も賤しくなく、容貌も非難すべきと

ころなく、

やすし——(一)「た易い」「手輕である」(二)「それに傾きがちである」

——(一)求むる所はやすく、(徒然草)

がて——(一)動詞につけて、「爲し難い」といふ意を表はす。(二)名詞の下につけて、「漚る」といふ意を表はす。

——(一)直く清き道にはゆき立ちがてになむある。(歌意考)——正しく清らかな道には立ち向つて行きにくいものである。

からし

(形) (一)「ひどい」「苦しい」「厳しい」(二)「危い」

——(一)「かくからき目におひたらむ人、(徒然草)——辛い

——(二)「からき命まうけて、(徒然草)——危い

からくして——「やつと」

うしろみる

うしろむ (自動) 「後から見て世話する」「監督する」「輔佐する」「警固する」

——とかくにつけてものまめやかにうしろみ、(源氏物語)——何かにつけ真心から世話し、
うしろみ——「輔佐」「後見」又、「輔佐役」「後見人」

—はかばかしき御うしろみしなければ、(源氏物語)——しつかりした御後見人が居ないので、

わたくしのうしろみ——わたくしはおほやけに對する語で、「將軍の後見役」即ち、「執權」

おほやけのうしろみ——攝政・關白

わたくしこと——「私事に關した事」「自分勝手」

わたくしもの——「自分のもの」轉じて、「自分の大切に思ふもの」

—これも御門、わたくしものといといとほしうおほす事なれば、(増鏡)——この方をも、御門は

自分の大切なものとして、大層可愛くお思ひになる事であるから、

かへりみ——(一)「顧ること」(二)「過去を顧ること」「追想」(三)「懸念」(四)「恩顧」(五)「復讐」

—(四)大空のかへりみを受くるものは、(花月草紙)

くま

(名) (一)「奥まつたところ」「隅」(二)「物蔭」(三)「くもり」「不明」(四)「場所」

くまぐま——前條(四)の重語。「所々」

くまぐまし——(一)「隈が多い」「うす暗い」(二)「心のくまが多い」「心に隔てがある」

—(一)いと廣き殿のうちに、くまぐましき所もなく、(樞圓文集)——うす暗い

くまなし——(一)「かくれた處がない」「くもりがない」(二)「残るところがない」

——(一)「くまなき夜半の月」(うけらが花——くもりなし)

——(二)「よろづのことぐさこそくまなく思ひ出でらるれ」(琴後集)——色々な言葉が残りなく思ひ

出される。

ともあれかくもあれ ともあれかくまれ ともあれ——「どちらにしても」「何にせよ」

——「ともあれかくもあれ夜の明けのさきに御舟にたてまつれ」(源氏物語)——「どちらにしても夜の

明けきらないうちに御舟にお乗せ申せよ。

ともかくも——(一)「どちちとも」(二)「何れにしても」

とさまかうさま——「あれやこれや」「あれこれ」と

——「とさまかうさまに思ひ給ひ寄らん方なくなん」(源氏物語)

さうなし

(形) (一)「あれこれとためらはない」(二)「容易である」「軽々しい」(三)「左とも右とも

決定しない」「どちらつかず」

——(一)「左右なくあれ(渡らせ給はん事は、十訓抄)——軽々しくあちらへおいでになる事に、

さうなう——さうなくの音便。

ひとま

(名) 「人の絶え間」「人の居ない間」

ひとめ——(一)「人の目につくこと」「人の見てゐること」(二)「人のゆきき」「人の出入」

——(一)「荒れたる宿の人めなきに、徒然草」——荒れてゐて人が目をつけない住居に、

——(二)「寂しくひとめまれなれば、(増鏡)」——寂しく人の出入も稀であるから、

みるめ——「見る目」「見た目」「目光」

——「いたくさとびてみるめもいとうたて、(樞関文集)」——ひどく田舎くさくて見ても全く面白くな
く、

めうつし

(名) 「目を移して他を見ること」

——京にのぼりてありしほど、……田舎に住みなれたる目うつしこよなくて、(玉勝間)

よそめ——(一)「よそながら見ること」「他人の見る目」(二)「それとなく見ること」(三)「よそを見

ること」

——(一)「なかなか渡りて見むよりもよそめ面白く覺ゆれば、(東關紀行)」——川を渡つて見るより

も、却つて岸の方から見た方が面白く思はれるので。

ひとやり

(名) 「他から強ひられること」

ひとやりならず

「他からすることでない」「自分の心からである」

「ひとやりならぬ道ならば、行き盡しとても止るべきにもあらで、(十六夜日記) 』自分の心から思ひ立つた道であるから、行くのが大儀だと言つてもやめるべきでもないので。」

ひとわらはれ

ひとわらへ

(名) 「人に笑はれること」「世の笑ひぐさ」「物笑ひ」

「そのよしあしなことわり言はんには、人わらへにもなりぬべし。(琴後集) 』その善し悪しを判別して言ふことは、物笑ひにもなるであらう。」

もた

(名) (一)「口をつぐむ事」「沈黙」(二)「何事もせずしてゐる事」

もたす

「(一)沈黙する」「(二)そのままにする」

「(一)きこえぬままにうちもたしぬれば、(花月草紙) 』黙る

「(二)世俗のもたし難きに從ひて、(徒然草) 』世間並のそのままにしてぬられないといふ義理にしたがつて、

しじま——「物を言はぬこと」「無言」

を

(助) (一)事の我意に違ひ、又意外なさまを表はす。「ものを」なのに「(二)ので」「のを」(三)普通は他動詞にかかるが自動詞にかかるものがある。その場合は自動詞の意味を重くさせる。

(四)咏歎の意を表はす。

—(一)庭に散りしをれたる花、見過しがたきを。(徒然草)——見過し難いので。

—(三)古き都を來て見れば、(平家物語)——古都がどうなつたかと來て者ると。

—(四)さりともあこはわか子にてをあれよ。(源氏物語)——それでもお前は私の子になつてゐな

さいねえ。

さへ

(助) 其の上更に物の加はる意を表はす。「までも」

—道すがら田をさへ刈りもてゆくを。(徒然草)

だに——すら——軽い方を擧げて重いことを言外に知らせる場合に用ひる。「なりと」でも

—朽ちせぬ名をだにとどめましと。(鈴屋集)——なりと

から

(接尾) (一)「ので」「にやひつ」(二)「ながら」

—(一)深く思ひ入りたるからさるよき事もいでくるにて、(玉勝間)——深く思案した爲に
ものから——「ものであるが」もの」

—御いらへもつつましげなるものから、(増鏡)——御返事とはつかしきさうであるが

ものゆゑ——(一)「ものだから」「それ故」「(二)ものであるのに」「であるが」

—(二)人がすにもおぼされさらむものゆゑ、われはいみじき物思ひをや添へむ。(源氏物語)——
私を人並に數へてお考へ下されさうもないけれど、

かれ——「故に」「それで」

さすが

「さすが」(副)(一)「さうは言ふもの」「さうは思ふもの」「(二)「やはり」「如何にも」
「本分に違はず」

—(一)身はさすがに捨てられぬものなれば、(十訓抄)——さうは言ふもの

—(二)酔心地のさすがにねぶたきを、(権園文集)——やはり

まかし

「(形)(一)「笑ふべきである」「滑稽である」「(二)「面白」「趣がある」「(三)「美しい」「優美で
ある」「すぐれてゐる」「(四)「あやしむ」

—(二)聲をかしくて拍子とり、(徒然草)——面白く

—(三)歌もいとをかしくなりにけり。(十六夜日記)——歌も甚だうまくなつた。

うら

(名) (一)「末」「端」(二)「梢」

うれ——「木や草の末」「梢」

こねれ——このうれの約。「木ずゑ」

ほ

(名) 「高く秀でてゐること」「すぐれてゐること」

ほつえ——「上の枝」「梢」

ほにいづ——「外に現はれる」「言語や表情に表はれる」

うれ——「木・草の端」「梢」

しづえ——「下の枝」

つまぎ——「小枝」

ほなみ

(名) 「稻や麥の穂の波打つてゐること」又、「その穂」

ふちなみ——「藤の花の盛りに咲いてゐるのを波にたとへた言葉」又、「藤の花」

ほい

ほい (名) 「本来の望み」「素懐」「志」

—敵に勝ちほい、遂げんことを、(花月草紙)——素懐

ほいなし——「不本意である」「残念である」「遺憾である」「つまりぬ」「情ない」

—歌のわるきこそほいなければ、(徒然草)——遺憾である

ほる

ほりす (他動) 「欲する」「願ひ望む」「思ふ」

—ただおのがほりすることのみしたがひて、(花月草紙)——ただ自分の思ふ通りにばかりして

まほし まくほし——「……たい」動詞の未然形に接続し、希望を表はす。

—宿もからまほしく覺えけれども、(東關紀行)——借りない

ほこりか

ほこらか (副) 「自慢さう」「得意げ」

—ほこりにうち笑ひ、(枕草子)

ほこらし ほこらばし——「得意な様である」

あさし

(形) 「浅い」「低い」「薄い」「狭い」

あす——「浅くなる」「色が薄くなる」轉じて、「衰へる」

—山はさけ海はあせなむ世なりとも君に二心わがあらめやも(増鏡)——海が滲くなる

—かばかりあせはてむとはおぼしてむや。(徒然草)——こんなに寝へきらうとはお考になつたら

うか。

あさま——「奥ぶかくないこと」「淺薄」

—あさまなる考どもも立ちまちり。(年々隨筆)

あさあさし——「淺はかである」「無雜作である」

—傍の者にあさあさしく言ひて。(花月草紙)

あさむ——「意外に驚く」「あきれる」

—皆人あさみて。(寄居歌談)

あさむ——あさしを活用したもの。「淺く下手に見る」「賤しむ」「嘲る」

あさまし——あさむの形容形。(一)「意外に驚く」「あきれる」とんでもない」「(二)「奥がさめる」情

ない「卑しい」「はかなさ」(三)「淺はかである」

あさむく——(一)「嘲る」「侮る」(二)「吟嘯する」

あざける——(一)「譏り笑ふ」他を見下ろす」(二)「風月に對して吟嘯する」

——(二)「われはただ月にあざけり風にうそむきてあらば事足りぬべし。(琴後集)」

うそぶく　うそむく——(一)「口をすばめて聲を出す」(二)「詩歌を吟する」(三)「得意な風をする」

によぶ——(一)「うなる」「うめく」(二)「苦吟する」「詩歌を吟する」

——(一)「もの食はずによび臥し。(徒然草)」

——(二)「かうがへによび出でぬれば、(樞圖文集)」

つたなし

(形) (一)「下手である」(二)「愚である」「下劣である」「つまらない」(三)「運が悪い」

(四)「卑怯である」

——(一)「藝のつたなきかも知らず。(徒然草)」——まつこ

——(三)「心つたなくおはしまして、(十訓抄)」

愚でよからぬもの著へおきたるもつたなく、(徒然草)——つまらない

——(三)「かうつたなき身にて、(源氏物語)」——運悪い

つたなさ——「つたないさま」「つたない具令」

あしざま

(副)「悪い様」「悪い風」

あしざま——「よこ風」

よこさま——(一)「横の方」「横向」「横道」(二)「正規でないこと」「道にはづれてゐること」「非業」

(一)「よこさまなる悪しき道に、(玉勝間)——横道の

よこさまのしに——「横死」「犬死」

よこしま——「正しくない事」「横道」

よくせずば

ようせずば(副)「悪くすると」「ひよつとすると」

——ようせずば思ひあがり、思はぬみやまちもしいでつべし。(待問雜記)

よこなまる

たむ(自動)「訛る」

よこなまり——「なまり」

——せめて言葉のよこなまりを改めなむ。(琴後集)——せめて言葉のなまりを改めよう。

ほの

(副)「ほんのりと」「ほのかに」「ほんやり」「はかなく」「かりそめに」

ほのか——(一)「かすか」「ほんやり」(二)「一寸」「わづか」

—(二)岩もる水のほのかなるを、(樞園文集)「わづか」

ほのめく——(一)「ほのかに見える」時々あらはれる」(二)「ほのめかして言ふ」「ほのかに言ふ」

—(一)月の影さへほのめきて、(樞園文集)

—(二)世の中にやうやうほのめき附ゆることあれば、(増鏡)「それとなく申しあげる

ほのめかず……「ほのめく様にする」「そぶりに表はす」「薄々匂はせる」

ほとほと

(副)「殆んど」「今少して」

—ほとほと帯なともときちらしめべし。(鈴屋集)「殆んど」

まこと

(名)(副) (一)「眞實」「本當」「誠意」「眞面目」(二)「ほんとに」

—(一)まことの道に入りけるこそ、(十訓抄)「眞實の道——佛道」

—(二)まこと昔人の言ひおきけん言葉に、(泊活舎集)「ほんとに」

まことし——「まことらしい」「眞面目である」「正式である」「實際的である」

—見るところのまことしきと思ふ人の言ふことは、(潘翰譜)「見たところ眞實らしく思はれる人の言ふことは、」

まことや——ほんにまあ「まうなう」

げに——「實際」「實に」「如何にも」

—「げに」さることぞかし。(徒然草)——まことにその通りである。

げにげにし——「如何にも尤もらしい」

まさし——「正しい」「眞實である」「確かである」「明らかである」

—まさしう斯様にお目にかかるべしとは、(平家物語)——本當に

うつつ

(名) (一)「現存してゐること」「現實」「正氣」(二)「夢心地」「まぼろし」

—(一)夢かと思ひなさんとすればうつつなり。(平家物語)——現實

うつつなし——「本心でない」「物狂はしい」

—心ばへなどいかにぞやうつつなくて、(増鏡)——心持などもどういふものか氣狂ひじみてお

て。

ゆめうつつ——「夢と現と」「夢が現か」

—さらに夢うつつともわきがたし。(雨月物語)——全く夢か本當か區別がつかない。

うつし

(形)「現實である」「現在してゐる」「生きてゐる」「氣が確かである」

—うつしき人の世には傳りけむを、(東京高師)——現實の

—我も人もうつし心なければ、(増鏡)——確かな心

うつしごころ——「正氣」「生きた心地」

うつしよ——「現世」「この世」

うつしめ、うつせみ——(一)「この世にまさしく生きてゐる身」(二)「現世」「この世」

うつしみの、うつせみの、うつそみの——世・人・命等に言ひつゞける枕詞。

よ

(名) (一)「世間」「この世」(二)「代」「時代」(三)「時節」「時」(四)「人生」「生涯」「年齢」(五)

「世の人」(六)「國家」「國」

よこもる——「老先がある」「年が若い」

—まだよこもれるやうなる身も、(鈴屋集)

よさかり——(一)「全盛時期」(二)「盛年」

よづく——(一)「世間なれる」(二)「世間並である」(三)「世心がづく」(四)「世のならはしに染

む『俗つぼくなる』

—(一)今少しよづきたらむふしを添へばやと思ふ。(琴後集)——ませたとこる

—(二)何とかや、よづかぬやうなる御名にてとか。(十訓抄)——何とか言つて、世間竝でないや

うな御名であるとか申します。

—(四)九重の神さびたる有様こそ世づかすめでたきものなれ。(徒然草)——宮中の神々しい有様

だけは、俗にそます結構なものである。

たく

(自動) (一)『盛りになる』長する『高くなる』(二)『盛りを過ぎる』頂上を越す』

—(一)年のやうやうたくる程に。(徒然草)——長する

としたく——『年をとる』

よたく——『年よる』

よはひ

(名) 『年齢』

さだ——『盛りの年』

さだすぐ——『盛年を過ぎる』

「おとなびさだすぎ給へる心地すれど、(増鏡)

おゆらく

おいらく(名) おゆるの延。一老いること

およづく——(一)「大人らしくなる」(二)「巧者らしい」(三)「地味である」

—(一)この御子のおよづけもておはする御かたち心ばへ、(源氏物語)——この御子が日に／＼成
長してゆかれる御容貌や御氣質は、

—(三)晝はことそきおよづけたる姿にてもありなむ。(徒然草)——晝は簡略にして地味な姿でも
よろしい。

ねぶ——(一)「年をとる」(二)「大人びる」(三)「ませて見える」

—(一)この御門はねび給ふままに、(増鏡)

ねびととのふ——「成人して姿態が整ふ」

ねびまさる——「年より大人びて見える」「年とるに従つて勝る」

ねびる——「あざやかでない」「古ぼける」

—「ねびれしほみて残りたるを見れば、玉勝鬘」

おびる

(自動) (一)「種かである」「無邪氣である」(二)「ぼんやりする」

ねおびる——「ねぼける」

——「ねおびれたる聲して。(樞園文集)」

たかし

(形) (一)「身分が高い」(二)「年をとつてゐる」(三)「すぐれてゐる」

——「(一)たかき賤しき品をわかつた。(十訓抄)」

みじかし——「(一)身分が低い」(二)「愚である」

——「(一)いにしへも今も、高きもみじかきも。(琴後集)」

——「(二)人のみじかきをそしり。(十訓抄)」

ひきし——「低い」

またし

(形)「完全である」「足りてゐる」「揃つてゐる」

またく——「全く」

——「またく心にはさるも思へらす。(初椽集)」

まだし

(形) (一)「まだその時期でない」「早い」(二)「不十分である」「未熟である」

一(一)けふあす二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれど、(増鏡)——やうやく二十歳位の御年齡で御退位なされることは、甚だ早すぎるやうな事であるが、

一(二)おのがまだしう愚かなるをも忘れて、(琴後集)——自分が未熟で愚かなことも忘れて、

まだき——その時期に達せぬ時「早くから」

一まだきに春や立ち返りきぬると、(鈴屋集)——早くも

はやく

はやう (副) (一)「早く」(二)「早くから」豫て「もと」(三)「既に」はや

(四)「それもその筈」

一(一)求むる所はやすく、その心はやく足りぬべし。(徒然草)——求める所のものは容易で、その心はすぐ満足するであらう。

一(二)はやくよりその常の心おきてを聞くに、(琴後集)——豫てから

一(三)花見にまかりけるに、はやく散り過ぎにければ、(徒然草)——既に散つてしまつてゐたの

で。

あまのさか

(副)「あまり」大抵「殆んど」

—古へにもをさをさはづべからぬが見えしらがふめれど、(樞園文集) 昔のに比しても殆んど
はぢないのが目立つやうだが、

おろおろ

あらあら (副) 「不十分ながら」『ざつと』

—ただおろおろ見及びしものどもは、(増鏡)

あららか — 「粗く」大ざつばに」

—いとあららかに記せり。(増鏡)

あららか — 「荒々しく」

—あららかに物言ひまぎらはすも、(十六夜日記)

あらまし — 「荒々しい」

—山風あらましく吹きおこしつづ、(樞園文集)

あらましこと — 「荒々しいこと」

いさまし — 「心が勇む」『氣が進む』

—家を顧みるいとなみのいさましからむ。(徒然草) 氣が進まうか

おほかた

(副) (一)「あらし」大抵「大抵」(二)「さつぱり」殆んど(三)「凡そ」普通

—(二)おほかた人もなし。(増鏡)——さつぱり

—(三)おほかた口軽き者になりぬれば、(十訓抄)——凡そ

おほやう——「大抵」大體

—おほやう人を見るに、(徒然草)——大體

おほどく

(自動)「鷹揚である」うちとけてゐる

—かたちをかしくうちおほどき、(源氏物語)

おほどか——「鷹揚」大まか「ゆつたり」

—いとこめかしくおほどかならんこそらうたくはあるべけれ、(源氏物語)——大そう子供らしく

鷹揚であるのが可愛いものだ。

おいらか

(副)「鷹揚」「穩當」「尋常に」

—心さまのおいらかにこめきて、(源氏物語)——穩當

おだし——「穩やかである」「安穩である」

おたやむ——「穩やかになる」

ゆるぶ

(自動) (一)「ゆるくなる」「ゆるむ」(二)「寛大になる」「油断する」

ゆるぶ(他動)——(一)「ゆるくする」(二)「油断する」

—(二)「あまりむげにうちゆるべ見放ちたるも、(源氏物語)——餘りまるつきり氣をゆるしきつて
うっちゃつておくのも。

ゆるび——「ゆるむこと」「ゆるみ」

ゆるらか——「ゆるやか」「のびのび」

はるく

(自動)「晴れる」「開く」「とける」

—「心の曇もはるくべけれ。(琴後集)」

はるくはるかす(他動詞)「晴らす」「開く」

みはるかす——「遙かを見る」

はれま——(一)「雨や雪のやむ間」(二)「心のはれやかな間」

—(二)「院はいとどはれまなく思し歎く。(増鏡)——院は一層御心の晴れ晴れする時もなくお歎き

になる。

はればれし——(一)「よく晴れてゐる」(二)「心が晴れやかである」「懐るところがない」(三)「華やかである」「派手である」

はれやか 是れらか——(一)「晴れ渡つて」(二)「心さわやか」(三)「華やか」「派手」

曇る (自動)「霧が立つ」「曇る」「目が曇る」

—御目もきりふたがる心地し給ふ。(増鏡)——御目もくもつてふさがり見えない様な心地がされる。

曇らす——「曇らす」「進らす」

——うちきらし雪降りつつ。(第三高校)——すっかり曇つて雪が降り。

なく (自動)「穩かになる」「和らぐ」心や雨・風・波などの状態などに言ふ。

なごむ——(一)自動、「穩かになる」「和らぐ」(二)他動、「穩かにする」「和らぐ」

——(一)「荒きえびす共の心にもいと忝き事となごみて。(増鏡)」

なごみ——「なごむ」と

なごし——「穩かである」「やはらかである」

——さばかりなごかりつる海とも見えすかし。(枕草子)——今までそれ程穩かであつた海とも見え

ません。

なごやか——「穩やか」のどか

たゆし——「だるい」氣が進まない」

たゆげ——「だるさう」「大儀さう」

——まみなどいまとたゆげにて。(源氏物語)——目つきなども大そうたるさうで。

たゆむ(自動)——「心がゆるむ」「心が寛ぐ」「油斷する」「ゆるくなる」

——しきるもたゆみ、たゆむもまたしきる。(泊酒舎集)——ゆるくなる

たゆむ(他動)——「たゆませる」

——何とも思ひたらぬさまにて、たゆめずぐすもをかし。(枕草子)——何とも思つてぬない様子で

油斷させて時を送るのも面白い。

たゆみ——「たゆむこと」「ゆるみ」「油斷」

たゆたふ——(一)「ゆれ漂ふ」漂つて定まらない。「(二)「心が漂つて定まらない」即ち。「ためらふ」

——(一)「船のいみじうたゆたふは、(權園文集)」

——(二)年月の御本意なれど、たゆたひ過し給ひけるに、(増鏡)——躊躇する

おもむけ

(名)「仕向け」「命令」

——上の御おもむけに従ひなる者にこそあれ。(玉勝間)

おきつ

(他動)「定める」「處置する」「支配する」「取締る」「待遇する」「指圖する」「計裁する」

——たしかに返すべくおきておくべきわざなり。(玉勝間)——間違なく返せる様に處置しておくべき

きものである。

——人をおきてて高き木に登せて、(徒然草)——指圖し

おきて——右の名詞形。「規定」「法度」「處置」「指圖」

ためし

(名) (一)「例」「前例」(二)「模範」「手本」

——(一)世のためしになりぬべき御事なり。(源氏物語)——世間の引例になりさうな御事である。

——(二)深く昔びたらん方はいみじきためしと申すべし。(十訓抄)——甚だしく昔風な點は、立派

な模範と言ふべきである。

のり——(一)「則るべきもの」「手本」「規則」「制度」「法律」(二)特に、「佛ののり」「佛法」「佛典」

——(二)のりになづみあとにかかづらひて。(『琴後集』)規則にとらはれ、型に拘泥して、

れいならず——(一)「ちつもと變つてゐる」「珍らし」「(二)「身體が普通でない」「病氣にかかる」

こころばせ

(名) (一)「心構へ」「意嚮」(二)「深い考へ」「注意深い」と (三)「趣」

——(一)心ばせなだらかにめやすく。(『源氏物語』心持

——(三)こころばせ深き所のさまなり。(『増鏡』)趣

こころばへ——(一)「心構へ」「氣だて」「思想」(二)「意味」「意義」(三)「趣味」「趣」

——(一)心ばへもうるせかりければ、(宇治拾遺物語)氣だてもうるはしかつたので。

——(三)遣水のこころばへ面白く。(『樞園文集』)趣

まねぶ

(他動) (一)「真似する」「形容する」(二)「そのまま語る」「語る」(三)「學ぶ」

——(一)あながちにもろこし人をまねぶすき心なるべし。(『樞園文集』)殊更に支那人を真似た好

奇心からであらう。

—(三)かたはしまねび知り侍らねば。(徒然草)

まねび——(一)「真似」(二)「學び」

—(二)歌よむとても……よその口まねびして。(花月草紙)

まなぶ——(一)「真似る」習ふ」(二)「學問する」

—(二)今のうちあるたぐひまなびがたかるべし。(十訓抄)——現今の普通の人はこれを真似難い
であらう。

まろぶ

(自動) (一)「ころがる」(二)「倒れる」

—(一)堤よりまろび落つるもあり。(花月草紙)

まろがす——「ころがす」

まろし——「圓い」

まろぶし まろね——「著たまま寝る」

—更にまどろむ問だになかりつる草の枕のまろぶしなれば。(東關紀行)

まどろ——「圓くぬならぶこと」「團樂」會合」

—思ふどちまどぬして、(樞園文集)——氣の合つた同志が會合して、

まどぬる——「まどぬする」

まどか——(一)「圓らこと」「圓く」(二)「圓滿」「やすらか」

—(一)望月のまどかなることば、(徒然草)

わるし

(形)「悪い」

わるぶ——「悪く見える」「悪い様になる」

わるびる——(一)「臆する」(二)「悪く見える」

わるもの——(一)「悪者」(二)「下衆」

とこ

(名)(一)「寢所」(二)「寢所の名を以て代表し、」家

—(二)「蘆屋のとこ」を結びて、(東關紀行)——家

ふすま——「夜具」

まさなし

(形)(一)「ほめて言ふ語。」並々でない」(二)「不都合である」よろしくない」(三)「卑怯

である」

—(二)まさなき人々の謀叛の企てかな。(太平記)

まさなきこと——「まさなきこと」「見戯」

ざる

(自動) (一)「戯れる」(二)「あだめく」「洒落る」

ざれごと——(一)「戯れ事」(二)「戯れ言葉」

ざればむ——「戯れた様子をする」「ふざける」

あざる——「戯れる」

—しほ海のほとりにてあざれあへり。(土佐日記)

そぼる——「戯れる」「ふざける」

たはく たはる——「戯れる」「ふざける」

—人の上をも言ひたはるこそ。(徒然草)

たはわざ——「戯れごと」「つまらぬ遊び」

むつかる

(自動) (一)「憤る」「腹を立てる」(二)「小見などの」「すれる」

くれる——(一)「曲る」(二)「れぢける」「ひがむ」(三)「愚痴を言ふ」

さうどく

(自動)「さわぎ立つ」「争ひさわぐ」

—思ひく_レに勝負なさうどくきつ_フ。(増鏡)

めざまし

(形) (一)「意外で目が覚める様である」心外である「あさましい」(二)「目も覚める程立

派である」「とてもすばらしい」

めづらしむ

(他動)「珍らしいと思ふ」「珍重する」

—花なめづらしし_レみ月をあはれむならばしなむ。(琴後集)

めづらか——「珍らしく」

たぐふ

(自動・他動) (一)「自動」「添ふ」「一緒になる」「伴ふ」「並ぶ」(二)「添はす」「一緒にさす」「合はす」

—(一)「雪霰などの風にたぐひて入りたるもいとをかし。(枕草子)——風につれて

—(二)「松の響に秋風の樂をたぐへ。(方丈記)——合はす」

たぐひ

(一)「ならぶもの」「同等な物事」(二)「種類」「類」「仲間」

まがふ

(自動)「入りまじる」「混同する」「よく似て間違ふ」

—沖こぐ船にまがふ雁かれのわたるも。(花月草紙)——沖を漕ぎゆく船と見あやまられる雁の飛

びゆくのも。

まがふ——他動詞。「まぎらす」「入り亂す」「似ます」「間違はす」

一人の常に言ひまがへ侍れば、(徒然草)——人が常に混同して言つてゐますから。

まぎる

(自動) (一)「分別し難い」「まざる」「見違ふ」(二)「他の物事に心が引かれる」(三)「混雑する」「いそがしい」(四)「かくれる」

——(一)花とたに言へばまぎれぬものを、(花月草紙)

——(三)今日はまぎるること出来たり。(平家物語)

まぎれ——「まぎれること」

まぎらはす——「まぎれる様にする」「まぎらす」「いぢらゝる」「すかす」

——とかうまぎらはして、こち參らせよとのたまひて、(源氏物語)——いろいろにすかして、自分

の方へよこす様にせよと仰しやつて。

まぎらはし——(一)「まぎれる様である」「紛れ易い」(二)「面はゆるい」「まばゆい」

なむ

(自動)「竝ぶ」「連なる」

—膝を組んでなみのたり。(平家物語)

なむ なぶ(他動)——「並べる」連れる」

駒なべていさ見にゆかむ……(古今集)

なみある——「並んでゐる」

—隨ふ者共左右になみあるさま。(増鏡)

ひとしなみ——「同列」「同等」

なべて——(一)「おしなべて」「一般に」「一切」「全く」「すべて」(二)「尋常」「並」「通り」

—(一)なべての國々の人の言ふから。(玉勝間)——すべての國々の人が言ふので。

—(二)なべてならぬ法ども行はるれども。(方丈記)——「通りでない法」——秘法

なむに——「……に並べて」と同時に「……にひられて」

—蠅のなきつるなむに……(古今集)

おしなべて——(一)「押ならして」「一般に」「一體に」(二)「普通に」「並々に」

—(一)「屋の上はただおしなべて白きに」(枕草子)——「屋根の上は一樣に白くので」

—(二)おしなべたらぬ人々。(増鏡) 竝々でない——歴々の人々。

なすらふ

なぞらふ (自動、四段) 「比べられる」「準する」「類する」

なすらふ なぞらふ (他動、下二段) ——「比べる」「準する」

—これをありし住居になすらふるに十分が一なり。(方丈記) ——この住居を以前のに比べると。

十分の一の大きさである。

なすらひ——なすらふ(自動) の名詞形。「比べ」「たぐひ」「匹敵するもの」

—今このなすらひを言はむには、(琴後集) ——比すべき人

なすらへ——なすらふ(他動)の名詞形。

よそふ——(一)「寄せはる」「寄せ比べる」「比べる」

—世の中を漕ぎゆく舟によそへつつ。(東關紀行) ——寄せ比べる

つる

(自動、他動) (一)自動、「連れ立つ」「伴なふ」「従ふ」 (二)他動、「連れてゆく」

ゆきつる——「連立つてゆく」「道連れになる」

つら——「ならぶこと」「列」

—我をおととひのつらにぞ教へたまひける。(琴後集)——私ハ兄弟なみにしてお教へ下さつた。

ついで——(一)「順序を立てる」順々にする」(二)「整頓する」順よくおく」

ついで——(一)「次第」順序」(二)「時機」折」機會」好機」

—(一)四季はなほ定まれるついであり。(徒然草)——順序

つきつきし

(形)「よくついでゐる」似合はしい」調和してゐる」

—家居のつきつきしく。(徒然草)——似あはしく

つきなし——(一)「よりつく便宜がない」便宜がない」(二)「似合はしくない」不都合である」

ところにつく——「その場所に似つかはしい」

ふさふ

(自動)「つり合ふ」相應する」適合する」

ふさはし——「似ついでゐる」相應してゐる」

たえて

副(一)「全く」一向に」少しも」(二)「すぐれて」とび離れて」

—(一)夢といふものの絶えてなからましかば。(泊酒舎集)——全く

うちたえ——「専ら」常に」

—うちたえて御いもひにて、(増鏡)——専ら御精進をされて、

ふつに——「全く」絶えて「ふつつり」

—物の音ふつに絶えたり。(藤篋冊子)——全く

かけず

(副)「わけもなく」もろく

—かけずけおさるること本意なきわざなれ。(徒然草)——わけもなく壓倒されてしまふのは、心
外の至りである。

ひた

(接頭)「一向」ひたすら「一途」他を交へない等の意を表はす。

ひたおもむき——「ひたすらそれに向ふこと」「一途」

—ひたおもむきに思ひとれるひが心より。(玉勝間)——「一途に思ひ込んでゐる考へ違ひから、

ひたかぶと——「一同揃へて甲冑に着固めること」「その人」

ひたくだり——「ひたすら下ること」

ひたやごもり——「ただ室にばかり籠つてゐること」

—唯寒さに堪へれば、ひたやごもりに籠る程に。(關田文章)

ひたすら ひたぶる ひたみち いつかう——「一途に」そればかり「一意専念」全然

—ひたぶの世捨人は、(徒然草)——「一途に世を思ひ捨てた人は、

—「向當家の御上とこそ承り候へ。(平家物語)——全く

せぢに

せぢに(副) (一)「しきりに」「一向に」(二)「懇に」「忠實に」

—(一)よきふみをせぢに得まほしがるものから、(玉勝間)——良書をしきりに得たいと思ふもの
の

—(二)いとせぢに心をつくしけり。(花月草紙)——懇に

せぢ——(一)「節」「時節」(二)「節會」

せぢく——「節句に供へる供御」

せぢる——「朝廷に於ける公事の集會」

せぢぶん せつぶん——立春・立夏・立秋・立冬の如く季節の分れ目を言ふのであるが、普通には立春

だけを言ふ。

ふるまふ

(自動)「舉動する」「はたらく」「堂々と振舞ふ」「趣向する」

ふるまひ——「動作」「しわざ」

たちぬ——(一)「立つてゐること」(二)「立つたり居たりすること」「ふるまひ」

——(二)「たちぬにつけてもおそれおののく、(方丈記)——ふるまひ

こころづくし

(名)「氣なむこと」「氣が氣でないこと」「親切」「心を痛ますこと」「心配」「物思ひ」

——木の間よりもり来る月の影見れば心づくしの秋は來にけり(古今集)——物思ひ

こころをつくす——「一所懸命になる」「努める」

——多くのたくみの心をつくして磨きたて。(徒然草)

こころだかし

(形)「氣高い」「氣位高い」「見識高い」

こころひくし——「下品である」「見識が低い」

くたす

(他動) (一)「朽ちます」「腐らす」(二)「けなす」「おとす」

——(二)「反りてわが名をくたす類もおほかめり。(琴後集)」

いひくたす——「言ひけなす」

おもひくたす——「さげすみ思ふ」「けなす」

—よろづの男をば賤しくのみ思ひくたし。(十訓抄)

くつ

(自動) (一)「枯れ腐る」「腐れこはれる」(二)「老い衰へる」「廢れる」

くつほる くつをる (一)「衰へる」「老朽する」(二)「心が屈する」「氣が弱る」

おもひくつほる おもひくつをる 「失望する」

くす くつす くんす (一)「たわむ」「折れ従ふ」(二)「氣が洗む」「しよげ込む」

—(二)「われながらいたうくんじけるかなとおぼさる。(増鏡) 自分ながらもひどくしよげ込む

だものだとお思ひなされる。

こうす こんす 「困る」「困難する」「疲れる」

—道のほどいたうこうじにたり。(鈴屋集) 道中甚だ疲れてしまつた。

うんす (一)「倦む」「落膽する」(二)「いやになる」

あらぬ

(句) あらずの連體形で「まうでない」といふ意義から、(一)「外の」「違ふ」「異る」(二)「愈

外な」「條理に違つた」

—(一)「あらぬすちに。(玉勝間) 違つた」

やう

—(二)あらぬいそぎ出で来て、(徒然草)——意外な

(名) (一)「様」様子「形」事情「體裁」(二)「様式」手本「例」(三)「わけ」仔細「(四)「方

法」手段「次第」(五)「ものごと」「は」と」

—(一)「拷器のやうも、寄する作法も、(徒然草)——形

—(三)「さるやうこそあるらめと、(十訓抄)——尤もな理由があるのだらうと、

—(四)「遁るべきやうなくて腹切りてけり、(増鏡)——遁れる方法もなく、腹を切つて失せた。

すぎはひ

なりはひ なり (名) 「渡世」稼業「職業」

—その家のなりを露ばかりもおこたらぬは、(樞園文集)

なりいづ —(一)「生り出る」「生ひ立つ」「生ずる」(二)「成り出る」「出生する」「時めく」

なりのぼる —「位置が上る」「出世する」

—なりのほり富み榮えむこそ、(玉勝間)

なりどころ —「別荘」

あがなふ

(他動) 「償ふ」「うめあはせる」

あがふ——あがの語根に動詞化の語尾ふの添うたもので、同じくなふの添うて出来た前條と同義

あがひ——「償ひ」

あがふ——「購ふ」

ひさぐ

(他動) 「鬻ぐ」「賣る」

ひさぐ ひしぐ——他動詞。「押しつぶす」「挫く」

——あとかたなく平にうちひさがれて、(方丈記)——すつかり平たくつぶされて、

ひさぐ ひしぐ——自動詞。「つぶれる」

——如何なる心地せんと胸もひしげて、(源氏物語)

かたみ

(名) 「乞食」又、人を罵つて言ふ語。

——かたみ者の様したるが、(藤筆册子)

かたみおきな——「乞食翁」又、自卑し、或は他を卑めて言ふ語。

はふる

(自動) (一)「放れ散る」「散らばる」(二)「放浪する」「おちぶれる」

——(一)あるは道のほどにてはふれ失せ、(玉勝間)

—(二)その子うまごまでにははふれにたれど、(徒然草)——おちぶれる

はふらす はふらかす——捨てる『散らす』さまよはす『おちぶらす』

—遂に家をはふらかして、(琴後集)——おちぶらす

はふる——埋葬する『火葬にする』

はふり——はふること『葬送』

はふりわざ——葬式

けつ

(他動) (一)消す『なくする』(二)けなす (三)壓倒する『無視する』

—(一)世の中火をけちたる様なり。(増鏡)——消す

—(三)その品そのみめも必ず思ひけたるものなり。(十訓抄)——見劣りされる

いひけつ——(一)言ひ消す『否定する』(二)けなす『非難する』

—(二)人にも言ひけたれ、(徒然草)

け——きえの約。

—萩の露玉にぬかんと取ればけぬ……(古今集)

うす

(自動)「消える」なくなる『死ぬ』

—若くて失せにし、(増鏡)『死ぬ』

きえいる

(自動) (一)「氣を失ふ」消え入りつものし給ふを、(源氏物語)『生きてゐるかどうかわからぬ』

(二)あるかなきかに消え入りつものし給ふを、(増鏡)『生きてゐるかどうかわからぬ程度に氣を失つていらつしやるのを、』

たえいる — 「息が絶える」死ぬ

ぼる

(自動) (一)「ぼんやりする」うつとりする『ぼける』 (二)「心を失ふ程に思ふ」戀ひ慕ふ

(一)「われかの氣色にてのみほれすぐし給ふを、(増鏡)『自分の身を覺えのまでにただぼんやり日を過し給ふのを、』

ほれぼれ — 「ぼんやり失心したさま」恍惚 (二)「心を打込むさま」

おぼぼる — 「ぼんやりする」

—「こちらの年頃に、……おぼぼれて、(増鏡)『長年のうちに……ぼんやりして覺えてならず

れぼる』「れぼける」

われか

(句) (一)「自分であるか」(二)「われか。ひと。か。に。向。じ。」

—(三)御いそぎの近づくにつけてもわれかのけしきにて。(増鏡)

われかひとが——自分であるか他人であるか、心が亂れて茫然としてゐる様に言ふ。

われにもあらず——(一)「人心地がしない」「正體がない」(二)「我を忘れて」

あるかなきか——(一)「有るか無いのか」(二)「生きてゐる様にも見えず」「見るかげもない」

あるにもあらず——「生存を認め難い」

い

(名)「眠り」

—晝は目ひと日いなのみ寝くらし。(源氏物語)

うまい——「熟睡」

やすい——「安眠」

いぎたなし——「寢坊である」

ぬ——「寝る」

—ぬるが中なる夢の世。(神皇正統記)

たなうら

(名) てのうらの轉。「掌」

たなすゑ——「手の先」「指先」

あなうら——「足の裏」

あなすゑ——「足の先」又、「子孫」

なごり

(名) (一)「物事のあつた後にその様子の残つてゐるもの」「餘勢」「餘澤」「結果」(二)「名残を

惜むこと」「惜別の情」「名残を惜んですること」(三)「別れて後、尙心残つて忘れ得ぬこと」

(四)「別れて心残りするもの」又、「その人」(五)「別れ」(六)「子孫」(七)「最後」「終り」

—(一)降りくらしたる雨の名残、(琴後集)——一日中降り通した雨が、まだ止みまらないで

—(二)童の法師にならんとする名残とて、(徒然草)——名残を惜んですること

—(四)今故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞましましたしける。(平家物語)

—(六)かの維時がなごりはひたすらに民となりて、(増鏡)——子孫

ながれ——「子孫」

—清和の御門より八代のながれに、(増鏡)

なごりなし——「跡方がない」「少しも残らない」

になし

またなし (形) 「二つとない」「比類ない」「此上ない」

——になくきよらをつくし、(増鏡)

——げにまたなき後の心なぐまになむ。(樞園文集)

ふたつなし——(一)「類がない」「無比である」(二)「いっしかない」

うへなし——「この上ない」「きりがない」

——富士のれの煙もなほぞ立ちのぼる上なきものは思ひなりけり(新古今集)

こよなし——「この上ない」「格別である」

——繪の山よりもこよなう見ゆ。(東關紀行)——格別に

こと

(名) (一)「變つてゐること」「格別」「特別」(二)接頭語風に用ゐられ、「異つた」「普通でない」「別の」等の意を表はす。

——(一)色ばえてことに見ゆ。(玉勝鬘)

——(二)こと木の冬籠りたる中に、(年々隨筆)

ことごと — 「區々」「別々」

ことさら

(副) (一)「わざと」「特別に」「(二)「とりわけ」「一層」

ことさらぶ ことさらめく — 「わざとらしく」

ことたり — 「常と變つたことをする」「際立つ」「事が改まる」

ことと — 「特にとり立てて」「とりわけて」「いざ」

— こととある時は、(源氏物語) — 「いざといふ時は、

けに — 「特に」「すぐれて」

— 人の語れるよりもけにかぎりなく、(うけらが花)

ふりはふ

(自動) 「わざわざする」「特にする」

— こそぞの冬はふりはへさせ給へる御ふみよ、(鈴屋集) — 去年の冬わざわざ下さいました御手紙

は、

ふりはふ — 他動詞、「振り合ふ」「振つて連れ立つ」

— 白妙の袖ふりはへ、(うけらが花) — 單衣の白い袖を振り人々と連れ立つて、

わざと

〔副〕(一)「わざとみ」(二)「特に」

—(一)「わざとたづね参らせよと候ふなり。(十訓抄)」

—(二)「わざと心に入れてつとめたらむには。(鈴屋集)」

わざとがまし——「わざとらしら」

わざとだつ わざとめく——「わざとらしく見える」

こころづから

〔副〕(一)「自分の心から」(二)「自分から」

—春風は花のあたりをよきて吹け心づからやうつるふと見む(古今集)——春風よ、花の咲いて

ゐるあたりを避けて吹け。風が吹かなくとも、花が自分の心から散るものがどうか、見ようと

思ふから。

あそぶ

(自動)(一)「面白くこととする」(二)「特に」、「音楽の遊をする」

—笛吹きあそびくらしして、(枕草子)

あそびす——右の敬語となつたもの。「せられる」書き給ふ「弾き給ふ」等、すべての動作の敬語。

—窓の小障子にあそびし留めさせおはします。(平家物語)——お書きになる

あそばさる——あそばすの一層の敬語。

——御琵琶あそばされる所へ、(平家物語)——御琵琶をお弾になられてゐたところへ、

あそび——あそぶの名詞形。(一)「遊ぶこと」(二)「管弦の遊び」音楽の催し

もの

(名)「ある事」「ある物」などを一般的に指して言ふ語。

——障子にものを書きたるを見れば、(東關紀行)——歌

——ものをさまもの聞しめさすありしを、(増鏡)——さつぱり食物をおあがりにならないであたが、

ものす——他動詞、「言ふ」「住ふ」「食ふ」「讀む」「書く」等、すべての動作に言ふ。

——古事記の註釋をものせむの心ざしありて、(玉勝間)——作らう

——言に出でてこそものし給はれど、(増鏡)——言ふ。

ものす——自動詞、「そのさまである」「行く」「ゐる」「ある」

——よろしく物せさせ給ふなるなむ喜び申し侍る。(枕草子)——快方に向はれてゐられるのをお

喜び申しあげます。

ものし——ものものし——(一)「いかめしい」「立派である」(二)「仰々しい」「大層らしい」

—(一)いと物々しう落げに、(枕草子)——立派で

ことごとし——「事があるらしい」「仰山である」「大層である」

あふ

(他動)「敢てする」「僞おぼす」「堪へる」

—いかでかかしこまりも起きあへ侍らむ。(鈴屋集)——どうしてきちんと起ききつてゐられませうか。

—秋風にあへず散りぬるもみち葉の行方定めぬ我ぞ悲しき(古今集)——秋風にこらへ切れず

あへなし——「堪へられぬ」「甲斐がない」「張合がない」「はかない」

—あへなく心細ければ、(源氏物語)——堪へられず

とりあへず——「取るべきものも取らず」「猶豫なく」「すぐ」

—わがよつきぬる心地して、とりあへず頭おろしぬ。(増鏡)——自分の生涯が終つた様な気がして、すぐさま剃髪した。

あへむ——「出来るだらう」「忍び得るだらう」「差支あるまい」「よからう」

—けしうはあらずあへむと思へるけしきなり。(増鏡)——わるくはない、自分にも出来るだらう

引と思つてゐる様子である。

けしうはあらず——けしくはあらずの音使。(一)「怪しくない」「いやしくない」「(二)「差支へない」「
「苦しくない」

けし——(一)「怪しい」「異様である」「(二)「悪い」「つまりぬ」「不都合である」

けしかり——けしくありの約。(一)「怪しい」「異様である」「(二)「普通の趣と變つてゐるといふ意味

から、「面白い」「悪くない」

——(一)「今はけしかるかきする屋形に大幕引かせ。(平家物語)——異様な

——(二)「これもけしかるわざかな。(増鏡)——面白い

けしからず——(一)「異様でない」「悪くない」「反對の意味になつて、(二)「異様だ」「思ひがけない」

「不思議である」「(三)「悪い」「不都合である」「(四)「甚だし」

——(一)「古の事、今より見てはいとけしからぬ沿革あるものにて、(年々隨筆)——思ひがけない

——(四)「雷けしからず閃きて、(増鏡)——甚だしく

あなり

(連) あるなり——あんなり——あなり

たなり——たるなりの約。

たんなり——たるなりの轉。

——天下の大事を聞き出したんなれ。(平家物語)

さなり——ざるなりの約。

——いかでまうで給はざなる。(琴後集)——どうしておいでにならないのですか。

ありふ

(自動)「この世にあつて年月を過す」暮してゆく『存命する』

——今の世にありふる人々の、(琴後集)——存命の

ありありて ありさりて——「さういふ風にして擧句のはて」——とどのつまり」

——ありありてよしなき「ふしに、(増鏡)——とどのつまりつまりまらぬ「事によつて、

ながらふ——「長く生存してゐる」存命する」

ある——「生れる」

いきとしいけるもの

(名)「生きてゐるものすべて」『あらゆる生物』

ありとある——「有る限りの」すべての」

あられます

(他動) 「豫想する」「豫期する」「豫定する」

—さかゆく末を見むまでの命をあられます、(徒然草) —榮えてゆく先き先きを見る迄長生する
つもりで

あられます — 「豫定」「心あて」「豫言」

—かかれてのあられます、(徒然草)

あられますこと — 「豫定の事」「豫想の事」

—常のあられますことは、(泊酒舎集)

かれごと — 「約束の言葉」「豫言」

かかれて — 「豫め」「前以て」

うら — 「豫想」

—家あるじの心のうらはまされかりけりといえし。(菅笠日記)

おもはず

おもはず(副) 「思ひがけなく」「意外に」

—いとおもはずにうらめしくなむ。(鈴屋集)

おもひのほか

おもはぬほか

おもはざるほか——「思ひがけず」意外」

—思はざるほか龍顔に咫尺する事ありけり。(平家物語)

こころのほか

こころよりほか——「意外」思ひがけず「心ならずも」

ことのほか——(一)「思ひの外」意外 (二)「別して」非常に異つて「甚だ」

—(二)鳥の聲などもことの外に脊めきて、(徒然草) 甚だ

あらけなし

(形) 「荒々しい」「亂暴である」

—あらけなき武士の手にかかつく。(源平盛衰記)

かたくなし——(一)「頑固である」「れちけてゐる」(二)「愚鈍である」(三)「見苦しう」

かたくな——(一)「頑固」「蟻屈」「れちけて」(二)「道理がわからぬ」「愚か」(三)「拙く」「見苦しく」

—(三)何事も邊土は単しくかたくななれど、(徒然草)

いわく——「子供らしくする」「あどけなくある」

いわけなし——「子供らしい」「あどけない」「幼い」

いとけし いとけなし いとけなし——「幼稚である」「幼い」

きびは——「幼く」「弱く」「可愛く」

——院もまだきびにはおはしまししかばにや。(増鏡)

おづ——「怖れる」「びくつく」

おちなし——「臆病である」「怖れてゐる」

もちなし

(形)「怯懦である」「劣つてゐる」「拙い」

——をちなき身にも事なりぬべき業もありなむを。(千蔭還文)——拙い

こちごちし

(形)「無骨である」「無風流である」(一)「無骨である」「無風流である」(二)「無禮である」「無作法である」

——(一)「隨筆は……こちごちしく拙き事などもありて。(年々隨筆)——きこちなく

ふつつか

(副) (一)「太く丈夫なさま」(二)「太く賤しげなさま」「ぶざま」「下品」(三)「無骨」「淺は

か

いさま

(名)「功」「功名」

いさをし——いさをの形容詞化で、「功がある」「よく動める」

いさをしさ——「いさをしいさま」「功績」「精動」

—このぬしのいさをしさを、(琴後集)

えう

(名) 「要」「必要」「肝要」「第一」

—えうあることどもありて、(権園文集)——必要な事

えうなし——「不要である」

えうなし やくなし やうなし——えうなし及びやうなしはやくなしの音轉。「益がない」「つまらな

い」役に立たない」

—これはえうもなきあだごとなれども、(玉勝間)

せんなし——「甲斐がない」「つまらぬ」

みゆ

(自動) (一)「見える」(二)「見られる」(三)「逢ふ」「来る」

—二人にうしろを見えなむには、(増鏡)——人にうしろを見られるに於ては、

—(三)後は坊のうちの人にも見えず。(徒然草)——後は寺内の人にも逢はない

すきがき

すいがき すいがい(名) 「透垣」木竹で透き見えるやうにしてこしらへた垣を言ふ。

ませがき ませ——「竹木でこしらへた低い垣」

ひめがき——「低い垣」

まがき——「竹や柴を編んで作った垣」

つきひち ついひち ついち——「瓦屋根にした土塀」

ひち——「泥」

——むかももにひちかきよせ、(樞園文集)

かきほ

(名)「垣」

——かきほに植えたる夕顔の、(彦根高商)

かきつ——「垣の内」轉じて、「範圍」

せんざい——(一)「庭前の草木」(二)「前庭」植込み」

つぼ——「建物の間や垣の内にある内庭」

さかひ

(名) (一)「境内」境目 (二)境界によって限定されたところの意で、「場所」「所」「土地」「範

圍」(三)「境地」「境遇」

——(二)あるは地をすてて境を出で、(方丈記)——土地

—遠きさかひより借りたらむ文は、(玉勝間)所

—(三)錦を着るさかひは、(東關紀行)境遇

かぎり

(名) (一)「限り」制限「境」「範圍」(二)「極少」「絶頂」「最上」「最後」「臨終」(三)「間」(四)

「それだけ」全部

—(一)限りある買物をさへ。(方丈記)限度

—(二)蚊はにくむべきかぎりながら。(鶴衣)最上

—みだり心地のいと深くかぎりなる折しも。(源氏物語)病氣が大そう重くて、もう臨終とい

ふ時、

—(三)鳴かぬかぎりは……(古今集)鳴かぬうちは……

—(四)勝れたるかぎりを撰ばせ給ひて。(増鏡)勝れたものだけをお撰びになつて

—聲のかぎり出して。(徒然草)聲のありだけ出して、

はか——「限り」「果て」「目的」

—いづこかはかとも知りがたし。(琴後集)果て

はたて はて — 「果て」「極み」「終り」

はつ — (一)「終る」「盡きる」「窮まる」 (二)「死ぬ」

そこひ — 「極み」「限度」「底」

— そこひも知らぬ青やかなる水の、(樞関文集)

いたり — (一)「至ること」「極度」 (二)「造詣」 (三)「思慮」

— (二)才あり、いたりかしく、(枕草子) — 造詣

とちむ — 「なし送ける」「果す」「すます」

— 今日にとちむる秋のけはひの心細きに、(琴後集) — 今日で終りになる秋の櫛子が心細いので

とちめ — (一)「終り」 (二)「臨終」「最期」

— (一)ありとある心ずさみのとちめに、(うけらが花)

— (二)人のとちめとなりては、(花月草紙)

かたみ

(名) 「僅」「籠」

— 花がたみ臂にかけ、(平家物語)

こ「籠」

つと

(名) (一)「竊などに包む様にしたもの」(二)「その土地の産物」「土産」

——(二)都のつとに語るむ。(徒然草)——土産

いへつと「家への土産」

うたげ

(名)「宴」「酒宴」

うたげのむしろ「酒宴の席」

むしろ「座席」「席」

——あらぬむしろにのぞみて、(徒然草)——他の席に出で、

いひ

(名)「飯」

かれいひ かれいひ——(一)「干した飯」(二)「辨當」(三)「食物」「食事」

あさがれいひ あさがれいひ——「朝食」 けは食物の意で、

ひるげ 伊ふげ等の語が出来、又、尊敬の接頭語み。或は一層の尊敬を表はすおほが更にその上につき

みけ おほみけ——「御食物」「主上の供御」「神饌」

かて——(一)「食料」(二)「料」(三)旅行の際携へて行く「辨當」

み

(接尾) (一)形容詞の語根について、その様子を言ひ、又その様子を思惟するに言ふ。……なので

「……の爲に」「……さに」「……である」と(二)み……み、といふ風に重れて用ゐ、「あゝしたり

斯うしたり」(三)名詞や形容詞の語根について、その程度・具合・所等を表はす。

——(一)秋の田のかりほのいほの苦をあらみ……(後撰集)——假小屋の屋根の苦が粗いので

——(二)降りみ降らずみ時雨も絶えず。(十六夜日記)——降つたり降らなかつたり

なみ——「なきにより」「……さうなので」

——柀の紅葉散りぬなみ……(古今集)——散りさうなので

なみ——「無なので」「無さに」

——よるべなみ身をこそ遠くへたてつれ。……(古今集)——頼りどころ無さに

まにまに

(副)「まにまに」「随つて」「つれて」

——天のまにまに私の思をけちて。(閑田文章)——天命のまにまに自分の慾を去つて、

まにまに——(一)「その通りに」「如くに」「(二)「……に随つて」「……に任せて」「……につけて」「(三)

「それなりすぐ」と同時に」(四)「ので」故に」

—(二)明くるままに雨は降らずなりぬ。(十六夜日記)——夜の明けるにしたがつて雨は降らなくなつた。

—(三)狩衣の帯紐ひつ切つて捨つるままに、(平家物語)——捨てると同時に、

—(四)ゆがみゆくべき道のなきままに、(十訓抄)——曲つてゆくべき道がないので、

やがて

(名)(副) (一)「そのまま」即ち」(二)「直ちに」間もなく」直接」(三)「それによつて」そこで」

—(一)今二人は女院・淑景舎の人、やがてははらからなりけり。(枕草子)——即ち

—(二)やがて苔をむしるにおりぬつつ、(権園文集)——早速苔を敷物にして

みくさ

(名)「水草」

みぎは——「水際」

みくづ——「水中の蘆芥」

みかさ——「水のかさ」水量」

みがくる——「水中に隠れる」

みづく——「水につかる」

みなかみ——(一)「上流」(二)「源」源泉

みなしも——「下流」

みなきは——「水邊」

みなぞこ——「水の底」

みなわ——「水の泡」

うたかた

(名) (副) (一)「水の沫」(二)「少しの間になくるところから、少しの間も」

——(一)「よどみに浮かぶうたかたは、(方丈記)」

——(二)「おもひ川絶えず流るる水の沫のうたかた人にあはで消えめや(後撰集)」

つゆ——(一)「露のはかなく消えるところから、はかない事にたとへて言ふ。(二)「露の量のわづかであ

るところから、僅かなこと、少しの事に言ふ。(三)「下に否定の語が来て、「少しも」「更に」

——(三)「わが身の上とはつゆ知らず。(平家物語)——全然

つゆのいのち——「はかない命」

つゆのみ——「はかない身」

つゆばかり——「少しばかり」「いささか」

——その家のなりをば露ばかりもおこたらぬは、(権園文集)

たまゆら——「玉の觸れあつて鳴るかすかな音」轉じて、「かすか」「暫し」「一寸」

——暫しもこの身をやどし、たまゆらも心ななぐさむべき。(方丈記) 暫し

ゆめに——「少しも」

——さらにかやうのすきすきしきわざゆめにせぬ者の、(枕草子) 一向にこの様な好色めいた事

を少しもしない者が、

ゆめばかり——「夢ほど」「少し」「僅か」

——夢ばかりも身の上の事とは知らざりけりな。(十六夜日記) 少しも

ゆめゆめ——(一)「決して」「必ず」(二)「ゆめにも」「更に」「少しも」

——(一)ゆめゆめ心あしからん人には伴ふべからず。(十訓抄) 性質の悪い人と決して交際して

はならぬ。

かつ

(副) (一)「片方」 (二)「そばから」「すぐ」

一 (一)「かつは佛に奉り、かつは家づとにす。(方丈記)」一「つには佛に奉り、一「つには家への土産にする。

一 (二)「かつ顯るるをも顯みず。(徒然草)」一「片端から」

かつ かつら 接続詞では「その上」傍に「

かつがつ」一「十分ではないが」「まじまじ」「(二)「僅かに」「辛うじて」「(三)「少しづつ」「次第に」

一 (一)「かつがつまづ道のしるべとなれるもあはれなり。(東關紀行)」一「どうやら斯うやら」

一 (二)「そともの小田の穂波はかつが色づきそめて。(琴後集)」一「やつと」

かたへ

(名) (一)「片方」「半分」「一部」 (二)「傍」「傍の人」「他の人」「同僚」

一 (一)「題詠といふこと、古にありてはかたへのわざなりといふべく。(琴後集)」一「一部」

一 (二)「かたへなる者のいはく。(徒然草)」一「傍」

一「かたへを敷きて、(十訓抄)」一「同僚」

かたはらいたし——(一)「傍から見聞してなかしい」「笑止である」「苦々しい」(二)「氣の毒である」

「心苦しい」

かたはらめ そばめ——「傍から見た様子」「傍から見ること」

—少し傾きかかり給へるかたはらめ、(増鏡)——少し前の方へ傾けていらつしやる傍から見た様子
子は、

よそめ——(一)「よそから見ること」「他人の見る目」「傍觀」(二)「よそながら見ること」(三)「よそ
を見ること」「わき目」

そばむ

(他動) (一)「側にする」「傍へ向ける」(二)「わき目で見る」「疎んじて見る」

—(一)弓を平め矢をそばめて、(平治物語)

—(二)あいなく目をそばめつつ、(源氏物語)——意地悪く疎んじ見て、

むは動詞化の語尾である。

ひらむ——(一)「平たくなる」「平伏する」(二)「平たくする」

はやむ——「早くする」

あはむ——「淡いものにする」「疎んずる」

——式部をあはめにくみて、(源氏物語)

よそ

(名) (一)「直接関係のない事」「通りな事」「局外」(二)「他の場所」「遠い所」(三)「よそよそ

しい事」「冷淡」(四)「別」「他人」

——(一)散るをよそにして心とせぬは、(花月草紙)——知らぬ風

——(三)よそに過行く嵐の音も、(琴後集)——知らず顔に

——(四)歌よむとても、よその心よりよみいで、(花月草紙)——他人

よそぎき——「よそで聞くこと」「外聞」

よそごころ——「よそにある心」「よそよそしい心」

ひとわろし——「體裁が悪い」「人聞きが悪い」

ほかほか——「ほか」「よそ」

——はやうありし者どものほかほかなりつる、(枕草子)——以前のた者でよそに離れて行つた者や

ほかさま——「よその方」

のど

(名)「のどかなこと」「安靜」

—その調の大凡はのどにもあきらにもさまにも、(にひまなび)

のどむ——(一)「鎮める」「落つかす」(二)「ゆるめる」「控へる」「差おく」

—(一)御本性もいとうるはしくのどめたるさまにおはして、(増鏡)——御生れつきの性質も大そ
う端正に落ついた様子でいらつしやつて、

—(二)その本の意を知る事をばのどめおきて、(玉勝間)——その言葉のものとの意味を知ること
を 差し控へて、

のどまる——「鎮まる」「落つく」

おもひのどむ——「穩やかに思ひ直す」「じつと思ひしづめる」

のどか のどやか——「靜か」「うちららが」「平穩」

のどけし——「靜かである」「のんびりしてゐる」

しらく

しらく(自動)く。及びむがついて白が動詞化したもの。(一)「白くなる」「蒼白になる」(二)

「興がさめる」(三)「真け色が立つ」

—(一)源の又恐ろしければ、顔も皆白けぬ。(土佐日記)

—(三)橋の手こそしらみて見ゆれ、(源平盛衰記)

おどろく

(自動) (一)「驚く」(二)「目な覚ます」

おどろかす——(一)「驚かす」(二)「先方の眠りを覚ます」(三)「訪れる」(四)「注意する」

—(二)夢のただちなうちおどろかす鐘の聲。(増鏡)

—(三)葎生の門おどろかすなるは、(琴後集)——訪れる

せうそこ

(名) (一)「様子」事情「有様」(二)「訪問」案内「(三)「音信」手紙」

せうそこぶみ——「手紙」

たより

(名) (一)「頼ること」たのみ「頼りにするもの」(二)「音信」(三)「縁」縁故「(四)「よち

ついで「機會」(五)「具合」便利」

—(一)「秋の初風待ちとるたより」にて、(松屋文集)——秋の初風を待ちつけて受ける爲のもの」と

しつ。

—(四)都へたより求めて文やる。(徒然草)——ついで

—(五)簀子透垣のたよりをかしく。(徒然草)——具合

びん——(一)「たより」頼み「都合」(二)「音信」おとづれ

—(一)「びんあしくせばき所に、(徒然草)——不便で

びんなし——(一)「折が悪い」「ういでが悪い」「都合が悪い」「(二)「似つかない」「不都合である」「(三)

「かはいさうである」

—(一)いとびんなき海邊の、(権園文集)——不便な

かる

(自動) (一)「離れる」「遠ざかる」(二)「絶える」「間を置く」

—(一)山里は冬ぞ淋しさまさりける人目も草もかれぬと思へば(古今集)——人の見る目も遠ざ

かつてしまつて眺める人もなく、草も枯れてしまふのだと思ふと、山里の冬の淋しさは又一層

なものだ。

かれがれ——「離れ離れ」「疎遠」「間違」

さがる——「離れる」「遠ざかる」

さく——「離す」「隔てる」

ふりさく——「遠ざかり隔つ」「振り向き遠く見る」

みさく——「遠く見る」

——しばしひきさしつづつ見さくれば、(うけらが花——暫らく弾くのをやめて遠く見やると、

めかる——「目が離れる」「見ないである」

——めかるる時しなきを、(花月草紙——見ないである

めかれ——「見ないであること」

——めかれせざりつるほどだに荒れまざりつる庭も籬も、(十六夜日記)——いつも見てゐた園でさ

へ、秋になると荒れて仕様のなかつた庭や籬が、

あがる——「離れる」「別れる」

——ちりちりに行きあかれぬ。(徒然草)

あかれ——(一)「別れ」「退去」(二)「分流」

あかれあかれ——「別々」「別れ別れ」

—あかれあかれに分ちつかはす。(増鏡) 別々に

あからめ——「目がよそへ離れること」わき目

—あからめもせずまもりぬて。(徒然草) 〓 わき目もふらず見つめてぬて。

あからめごと——「わき目すること」「一心にせぬこと」

—いかでいかでよろづあからめごとせで。(泊酒舎集) 〓 何とぞして萬事わき目もふらず。

そく

しぞく(自動) 「退く」離れる」

—今は仕の道なもしぞきて。(琴後集)

そき(そくへ)——「退いた方」遠く離れた方」

まかる

(自動) (一)「退く」歸る」の謙讓語。(二)「行く」來る」の謙讓語。(三)「死ぬ」

—(一)ゆふべにまかるとては。(琴後集)

—(二)花見にまかりけるに。(徒然草) 〓 参りました

まかりいつ まかづ——(一)賁い所から、「退下する」(二)「参上する」

—(一)とうとうまかりいでよ。(平家物語) 〓 早々退出せよ。

—そこから参りしつはものどももまがづれば、(増鏡)——澤山参つてゐた武士どもも退出すると、

みまかる——「この世から去る」「死ぬ」

まかりまうす——「暇乞ひする」

まうじ

(自動) (一)「往く」「来る」(二)「参詣する」

—(一)みむろにまうでてをがみ奉るに、(伊勢物語)——お住居に参つてお目にかかると、

まうてく まてく——「参り来る」「参上する」「やつてくる」

—みやびごと好めるがしばしばまできて、(うけらが花)——風雅を好んである人々が時折やつて

来て、

まゐる——自動詞、(一)「参上する」(二)「参詣する」(三)動作をする人を尊敬して、「お着になる」

「お飲みになる」「お食へになる」等。

—(三)大御酒まゐるついでにも、(増鏡)

まゐる——他動詞、その事に奉仕する意。「あけ奉る」「さしあげる」「結び奉る」等。

—御格子まゐりわたして、(枕草子)——あけ申す

—南殿よりおものまぬるさま、(増鏡)——さしあげる

まぬらす——(一)「さしあげる」(二)他の動詞に添へて敬意を表はす。

—(一)やすらかに詰ひてまぬらせたりけるが、(徒然草)

—(二)皇嘉門院を具しまゐらせて、(十訓抄)——おつれ申して、

まぬのぼる——「参上する」

いままかり——(一)「はじめて仕へること」(二)「新参者」

います

(自動) (一)「在る」「居る」の敬語。(二)「行く」「来る」の敬語。

—(一)千代に八千代に榮えいませと、(鈴屋集)——いつまでも長く榮えていらつしやる様にと、

—(二)四の宮ここにいませ。(増鏡)——おいでなさい

いますかり いませかり みませかり——「在る」「居る」の敬語。

—父の世にいますかりし時は、(琴後集)——ゐられた

おはす——(一)「有る」「居る」の敬語。(二)「行く」「来る」の敬語。(三)尊敬の助動詞の様に用ゐる

—(一)そなたにしばしおはせ。(宇治拾遺物語)——そこに一寸おいでなさい。

—(二)ゆゆしくもたづねおはしたり。(徒然草)——よくまあたづねて來られた。

—(三)取らせおはしたり。(宇津保物語)——取られ給うた。

おはします——おはすの一層の敬語。

ます——「有り」在り「居り」の敬語。

—君ままで烟たえにし……(古今集)——わられないで

まします——ますの一層の敬語。

おます——(一)「有る」の敬語。(二)「居る」の敬語。

—(一)これこそまことのうまごにおましけれ。(増鏡)——これがほんたうの孫でいらせられるわ
い。

おましどころ 暑して、おまし——「主上・院、又は高貴の人の御座所」

ひのおまし——「天皇の御座所」

—ひのおましの方におものまるる。(枕草子)

まぎす

(自動)(一)「萌え出る」(二)「起らうとする」

きりし——(一)「芽ばえ」(二)「兆候」

するまう——(一)「吉相」(二)「前兆」

——(二)これは世の亂るる瑞相とか、(方丈記)

かりがね

(名) (一)「雁の鳴く音」(二)「雁」

——(一)砧の音のかりがねに通ふにやあらん。(泊泊舎集)

——(二)沖漕ぐ船にまがふ雁がねのわたるも。(花月草紙)

かり——「雁」についての故事により、「音信」の意に用ゐられる。

ゆきかひぶみ——「消息文」「手紙」

ゆきかふ——「行き來する」「行き通ふ」

——行きかふあきびとの養笠までも。(琴後集)

ゆきかひ——(一)「行き來」(二)「交際」

——(一)人のゆきかひも絶えたる大路の、(樞圖文集)

——(二)たかきいやしきゆきかひしけるに。(岡部日記)

あしべ

(名)「葦の生うてゐる水邊」

あしたづ

「鶴」葦のある所にゐるより言ふ。

たづ

「鶴」

あしでがき

あしで——葦の生うてゐるやうに書く文字の書き方の稱。

あしびきの

葦ぶきの意。や・山・病・大和等、屋の音をもつ語にかかる枕詞。

あづま

(名) (一)「東」「關東」 (二)「東國」におるところから、「鎌倉」「鎌倉幕府」

——(二)あづまの聞えやいかがと思ひ給ふれど、(増鏡)——鎌倉への聞えがどうかとは思ひますが

あづまびと

あづまうど——「東國人」

あづまぢ

「京都から奥羽までの路」

むね

(名)「主となるもの」「主要」「肝要」

——家のつくりやうは夏をむねとすべし。(徒然草)

むねと

「主として」「第一に」「専ら」

——合戦の日、むねとこれをたのみたりければ、(十訓抄)——主として

むねと——「宗徒」主だつた者」

むねむねし——(一)「主だつてゐる」(二)「しつかりしてゐる」確かである」

——(一)木丸殿にはさこそいへむねむねしき者なし。(増鏡)——主だつた者

はか

(名)「仕事の進度」はかどり」

はかばかし——(一)「はかどる様である」てきはきする」(二)「はつきりする」確かである」(三)

「しつかりしてゐる」立派である」えらい」

——(一)「はかばかしうもえ歩まれば、(権園文集)——しゃんく歩けないので、

——(二)物などはかばかしくのたまはぬほどの、(増鏡)——はつきりと

——(三)はかばかしき御うしろみしなげれば、(源氏物語)——しつかりした御後見がないので、

むすぼる

むすぼる(自動) (一)「結ばれる」結ばれて解けなくなる」(二)「かたまる」露などが出

来る」(三)「氣がふさぐ」快くない」心配する」(四)「縁をつなぐ」

——(三)いささかと思しむすぼるる事もなく、(増鏡)——少しも御心配される事もなく、

——(四)すべてこの一門にむすぼる人は、(平治物語)

むすぶ——自動詞、「露などが出来る」「凝る」

——露むすぶ庭の萩原霜枯れて。(平家物語)

むすぶ——他動詞。(一)「うなぐ」結ぶ(二)「うくる」結成する(三)「心に懐く」(四)「契る」

「約束する」

むすぶ——「手ですくふ」

——手にむすびてぞ水を飲みける。(徒然草)

とどまほる——(一)「行き悩む」「くゞくゞする」「つかへる」(二)「とけなら」

とどまほり——「滞ること」「滞つたもの」「障り」

よどむ——(一)「流水が一處にとどまる」(二)「物事が停滞する」

よどみ——(一)「流水の滞つたところ」(二)「物事の停滞すること」

すがすが

すがやか(副)「滞りなく」「すらすら」「速かに」

——大井川水たかくてすがすがともえわたりおはしまさで。(第八高校)

すがすがし——(一)「爽やかに氣持良い」(二)「滞りなく運ぶ」(三)「速かである」「氣早い」

すくやか すくよか——(一)「剛健」「達者」「きびきび」「(二)「無愛敬」「無風流」「(三)「峻しい」

——(一)「すくやかならぬ橋突を一人たび候へ。(源平盛衰記)——達者

——(二)「あづま人は情おくれ、偏にすくよかなるものなれば、(徒然草)——關東人は情愛が乏しく

ひたすら無骨な者であるから、

——(三)「すくよかならぬ山の景色。(源氏物語)——噉蛆

すくすくし——「眞直である」「ひとむきである」「嚴格である」

——すくすくしうさし歩みて。(枕草子)——さつさと

やまふ

(自動)「病氣する」

やまふ やもひ——「病氣」

——重きやまふにつきゐたるゆかりの者ら。(花月草紙)

わづらふ

(自動)「(一)「悩む」「困る」「……し兼ねる」「(二)「病氣する」

わづらひ——(一)「悩むこと」「困る事」「(二)「苦勞の種」「迷惑」「(三)「病氣

わづらはし——(一)「うるさい」「入り込んでゐる」「(二)「氣がおける」「氣づかひだ」

そこなふ

そこぬ(他動) (一)「はす」破る「亡ぼす」(二)「害する」慥ます「(三)「仕損する」

—(一)物など取り散らしてそこなふを、(枕草子)——壊す

—(二)これを取り繕ふ間に身をそこなひて、(方丈記)

そこなひ——「害」弊害「禍」

あた

(名) (一)「害をなすもの」仇敵「(二)「恨み」

—(一)運に乗じてあたをくだく時、(徒然草)——敵

あだがたき——「仇敵」

いたむ

(自動) (一)「心痛する」哀しむ「困る」(二)「損する」壊れる「他動詞もあり。

—(一)いといたむ人の強ひられて少し飲みたるもいとよし。(徒然草)——酒が飲めないで大そ

困る人が、

いたまし——前條の形容化。(一)「痛々しい」可哀さうである「不憫である」(二)「難儀である」困

る」

—(一)馬・牛つなぎ苦しむるこそいたましけれ。(徒然草)——可哀さうである

—(二)「いたましうするものから下戸ならぬこそ男はよけれ。(徒然草) 困つた風をするもの

いそし

(形) 「よくつとめる」忠實である」

—いそしくつとめてなりのほり。(玉勝間) 〓まめまめしくつとめて立身し。

いそしむ 〓勤める」

いそしみ 〓「いそしむこと」努力」

やる

(他動) (一)「贈る」與へる (二)「拂ひのぞく」慰める」

やりみづ 〓庭などに水を引いて流したのもの」

やるかたなし 〓「恵ひを晴らすすべが無い」言ひ様がない」

—猶この愁へこそやる方なく悲しけれ。(十六夜日記)

やりど 〓「横に引いて開閉する戸」

ゆかし

(形) (一)「心が引かれる」知りたい」「見たい」「行きたい」等。(二)「慕はしい」立派である」

「しとやかである」上品である」

—(一)奈良の都のゆかしく侍りて。(吉野拾遺) 〓奈良の都が見たうございまして、

（二）よそめゆかしきたまだれのうちにも、（初穂集）——他から見ると慕はしい立派な家の中で

ゆかしがる——「ゆかしいと思ふ」

こころゆく——「心がすすむ」「満足する」「氣持よく思ふ」

—雪こそ猶おもしろくこころゆくものはあれ。（うけらが花）——雪がやはり一番面白く満足なものである。

あかず

（句）飽かずの意で、「飽き足らない」「満足しない」「物足らない」

—よろづ世の中御心のままにあかぬことなく、（増鏡）——萬事世の中のことば、御心の通りになつて、不満なことなく、

あかず——前條とは別、厭かずの意で、「厭くことがない」「いやになることがない」「結構である」

—かにかくにあかず面白く楽しきは、（楳園文集）——兎に角いくら見てもいやになることなく面白く楽しいものは

あかなくに——「飽かないのに」「まだ物足らぬのに」

あかねわかれ——「物足らぬ離別」氣にそまめ別れ」

——あかねわかれの涙にや。(平家物語)

ゆたか

ゆた(副) (一)「不足なく」十分「豊富」富裕「にぎやか」(二)「ゆるやか」「やすらか」のどか

ゆたけし——(一)「豊かである」「不足ない」(二)「ゆつたりしてゐる」「廣々してゐる」

ゆほびか——「ゆたかに廣々した様子」「ゆつたり」「廣やか」

——池は、廣き庭に水のこころゆほびかにて。(樞園文集)

まどし——(一)「貧しい」(二)「貧弱である」「不十分である」

——(一)「富めるもまどしきも」。(閑田文章)

——(二)「たから多ければ身を守るにまどし」。(徒然草)——不十分である。

ともし

(形) (一)「乏しい」「貧乏である」(二)「珍らしく面白い」「珍らしく可愛い」(三)「羨まし

い」(一)「何ともしき事なく家々皆富み足りぬ」。(花月草紙)

—(二)山見れば見のともしく、(萬葉集)——珍らしく御白し

にぎはふ

(自動) (一)「繁昌する」にぎやかになる」(二)「富む」富み榮える」

—(三)にぎはひ豊かなれば、(徒然草)

にぎははす にぎはふ——(一)「にぎやかにする」繁昌させる」(二)「豊かにさせる」富ます」(三)

「賑救する」救助する」

にぎはし にぎははし——(一)「賑はふ」賑やかである」(二)「富み榮える」富む」

—(三)めでたくにぎははしく見えたり。(増鏡)——榮えて

ただよはし——「漂ふるまである」落着かない」「よるへがない」

うく

(自動) (一)「心が落着かない」(二)「根據がない」あてにならない」「良い加減である」

—(三)「うける」とは思ふこと、(十訓抄)——あてにならぬ事とは思ふが、

うかる——(一)「あまふ」(二)「心が落着かぬ」興にのる」

ぞめく

ぞめく(自動)「浮かれて騒ぐ」

ぞめき——「ぞめく事」

—秋刈り冬收むるぞめきはなし。(方丈記)——騒ぎ

ゆくりか

(副)「思ひがけず」「ふと」

ゆくりなし　ゆくりかなし——「思ひがけない」突然である」

—ゆくりなくいさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。(十六夜日記)

わくらばに——「たまに」不意に」

—我わくらばにそのつらにかすまへられて、(うけらが花)——私はたまたまその中に入れられて、

うちつけ

(副) (一)「突然」「だしぬけ」 (二)「直接」「ほんに」「まともに」 (三)「露骨」

—(一)うちつけに驚かしがほなるも。(樞園文集)——突然訪れる様な風を見せるのも

—(二)うちつけに寂しくもあるかもみぢ葉も主なき宿は色なかりけり(古今集)——ほんに寂し、

ことよ……

うちつけごと——(一)「突然の事」「思ひがけぬ事」 (二)「むき出しの言葉」「無遠慮な言葉」

うちつけめ——「ふと見た目」

とみ

(名、副)「念」「突然」

—とみのいたづきを療治せんに、(花月草紙)——益

—とみに物求むるに見出でたる。(枕草子)

いづ

(自・他動) 「出す」 現代文では自動詞に限られるが、古文では他動詞としても用ゐられた。次條以下の言葉もさうである。

—かの頼朝を召し出でて、(増鏡)——召し出して

しづ しいたす——「しはじめる」仕出かす』なし遂げる」

—思はぬ過もしいでひべし。(待問雜記)

いぐ——「生かす」

みいづ——「見出す」

とらづ——「取り出す」

—古き世のさうしどもとらづで、(琴後集)

こまか

(副) (一)「小さい」(二)「委しい」念を入れて」(三)「懇」親切」

(二)「これもこまかに讀みて、(露後集)——念を入れて

—(三)のちのわざなどにもこまかにとぶらはせ給ふ。(源氏物語)——没後の法事などにも、懇に
 弔問せられた。

こまやか——(一)「細々」綿密 (二)「濃厚」おつとり (三)「情厚く」情味深く (四)「繁く」

—(一)おかへりもこまやかにいとあはれに書きて、(十六夜日記)——御返事も細々と大そう心打
 たれるやうに書いて。

—(二)心の底ゆかしう……こまやかになまめかしう、(増鏡)——心の底が奥ゆかしく……おつ
 とりと優美であり。

—(三)隨筆は、……文章も艶にこまやかにはふと書きとらで、(年々隨筆)——情味深く

つばら

つばらか(名、副)「つまびらか」

—國のまほらもつばらに見わたさる。(うけらが花)——國の、丘に圍まれたところもつまびら
 かに見渡される。

うぶさ——(一)「悉く」おれなく (二)「詳細」

まぶさ——まは接頭語、前條に同じ。

—まつぶさにあげつらひて、(鈴屋集)——こまかに

はつか

(副)「僅か」「かすか」「ほんのり」

—はつかに残れる遠山の雪も、(樞園文集)——僅かに

はつはつ——(一)「わづか」「かすか」(二)「辛うじて」

さはらか

(副)「まばら」「さらつと」

かはらか——「さはやか」「さつぱり」

むらぎゆ

(自動)「まだらに消える」

むらぎえ——「まばらに消えること」

むらご——「同色で所々に濃い所と淡い所とあるもの」

むらむら——「まだらに」又、「群だつて」

—木々のもみぢもむらむら染めわたして、(樞園文集)——まだらに

—沖の石むらむら沙干にあらはれて波に咽び、(東關紀行)——群がって深山

むらだつ——「むらがつて立つ」

はだら

はだれ まだら(名)(副)「まばら」

—雪ははだらに降りたりけり。(平家物語)

しばしば

(副)「暫らく」

—雲を凌ぎ霧を分けつつ、しはしば前途の極無きに進む。(東園紀行)——暫らく

しばなく——しばは「繁く」屢々」といふ意を表はす接頭語である。「繁く鳴く」「屢々鳴く」

しく

しきる(自動)「度重なる」「頻りにする」「絶間ない」しくが他の語と複合して種々の語が出来る。

ふきしく——「頻りに吹く」

おひしく——「頻りに生ひる」「生え續く」

ふりしく——「頻りに降る」

しき——しきりの語根。「度重なつて」「頻りに」

—昔の事どもしきしのび出づるに。(琴後集)——昔の事をいろくと頻りに思ひ出すにつけて、

しきなみ——「幾重にも」「屢々」「しきり」

—宣言とて内裏よりしきなみに召されければ、(平家物語)——しきりに

ひとしきり ひとさかり——(一)「一時盛んなこと」「一時しきりなこと」(二)「一時盛んに」

ゆゆし

(形) (一)「思むべきである」(二)「甚だ立派である」「大そうえらい」「上手である」「威勢がよ
う」等。(三)「大變ひどい」「すごい」「氣味悪い」「心配である」等。

—(一)「みな人の装束・太刀・平緒まで、ことやうなるぞゆゆしき。(徒然草)……様子の變つて
ゐるのが忌まはしい。

—(二)「世に知らずゆゆしき御堂を建てて、(増鏡)——世に又と無いやうな立派な御堂を建てて、

—(三)「ゆゆしき罪にてありなんかし。(十訓抄)——大變ひどい

ゆゆしげ——「ゆゆしさう」

いみじ

(形) (一)「甚だしい」「著しい」(二)「えらい」「よい」「立派である」「勝れてゐる」「めでたい」
(三)「大變だ」「ひどい」「悲しい」「怖ろしい」

—(一)「いみじう嬉しく、(樞園文集)——大そう

—(二)「みづからはいみじと思ふらめどいと口惜し。(徒然草)——えらい

—(三)「いとうたていみじければ、(増鏡)——誠に情なく悲しいので

いみじげ——「いみじい様子」

いと

〔副〕「甚だ」「大そう」「まことに」

いとど——前條とは稍異なる。「竝々」「一層」

いとどし——「一層甚だしい」

——いとどしく苦しく。(鈴屋集)

いたし——(一)「甚だしい」「ひどい」(二)「非常によい」「すばらしい」「えらい」

——(一)御目のいたう泣き腫れたるぞ。(源氏物語)

——(二)古への事知り給へるこそいたきわざなれ。(増鏡)

いといたく——いといたう——「極めて大そう」

よに——(一)「大そう」「殊の外」(二)「決して」「よもや」

——(一)よにけだかく。(十訓抄)——「非常に」

こちたし——(一)「うるさい」「煩はしい」「くどい」(二)「仰山だ」「甚だしい」(三)「多い」「烈しい」

——(一)八重櫻は……いとこちたくれちけたり。(徒然草)——「くどい」

いとなし

(形) 「暇がない」

いとなし——右とは別義で、「いと少し」の意。「甚だ少い」

せめて

(副) (一)「無理に」強ひて (二)「甚だしく」さし追つて (三)「已むを得なければ」

——(一)「さりともあるやうあらむとせめて見れば、(枕草子)——でも譯があるかも知れぬと強ひて見ると、

——(二)「せめて思ひあまりてよろづの憚りを忘れ、(十六夜日記)——甚だ思案し切れず總ての遠慮を忘れ、

いとせめて——「ひどくさし追つて」極めて「

いかが

(副) (一)「どの様」 (二)「どうして」

いかがし——「如何と思はれる」覺束ない」

いかがせん——「どうしよう」仕方がない」

——今はいかがせんにて、(増鏡)——仕方がない

いかにぞや——(一)「どうであるか」不満に (二)「何故か」 (三)「疑はしく」

—(一)いかにぞやおぼゆる所はまじりて、(玉勝間)——不満に思はれるところが交つて。

—(二)心ばへなどもいかにぞやうつつなくて、(増鏡)——心持などもどういふものか氣狂じみて

なす。

ゆゑ

(名) (一)「わけ」原因「理由」(二)「並々でない」と「趣あること」(三)「由緒」來歴「(四)

「事故」障り」

—(一)ゆゑある木蔭にたちやすらひ給へる。(増鏡)——趣

—(二)ゆゑある人の忍びて参るよと見えて、(宇治拾遺物語)——由緒

ゆゑづく——(一)自動詞、「由緒ありげである」「並々でない」「(二)他動詞、「由ありげにする」「一か

ど出かす」

—(一)つややかなる狩衣に濃き指貫、ゆゑづきたるさまにて、(徒然草)——並々でない美しい

—(二)つひにはひとつゆゑづけて、(鈴屋集)——仕出かす

ゆゑぶ——「故ありげである」

—落ちくる水の音さへゆゑぶよしある所のさまなり。(平家物語)——……故ありげで趣のある所

である。

ゆゑゆゑし——「故ありげてある」並々である」

ゆゑよし——(一)「わけがら」理由「由來」(二)「故ありげな事」並々ならぬ事」

——この寺の古きゆゑよし記したるなるべし。(樞園文集)——由來

みやぶ

(自動)「優雅である」風流めく」

——いにしへさまのみやぶたる事の、(玉勝間)——昔風の上品な

みやび——「風流」上品」

みやびか みやびやか——「風流」上品「優雅」

みやびこころ——「風流心」

みやびこと——(一)「風流な言葉」(二)「風流な事」

みやびを——「風流な男」「風流人」

よすが

(名)「たよりとするもの」「たよりとすること」「つて」「よるべ」「手段」「方法」「便宜」それによつて或事が行はれるもの」「……べきところ」

「枕の方にすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。(方丈記)……これを柴折りくべるよすがとせよ。」

「橋は……杜鵑のよすがとさへ思へばにや、(枕草子)——身を寄せるところ

たづき たどき——「たより」「よるべ」「たのみ」「手段」

——説教などして世渡るたづきともせよ。(徒然草)——手段

よすぎ——「世渡り」

よなる——「世の事に馴れる」「世情や人情に通ずる」

よにあふ——「時勢に適合する」「時にあふ」

よにあり——(一)「この世に生存してゐる」(二)「世に用ひられる」「時めく」

——(二)わが世にありし時は、従ひつきし者共、一二千もありつらん、(平家物語)——時めいて

ゐた

よにしらす——「世に又とない」

——世にしらすゆゆしき御堂を建てて、(増鏡)——世に又とない立派な御堂を建てて、

よになし——(一)「この世になし」(二)「この世に比すべきものがない」(三)「この上ない」(三)「世に用

ひられない」時めかない」

——(二)「雨の降りたるつとめてなどは、よになく心あるさまにかし。(枕草子)——雨の降つた翌朝などは、この上もなく趣ある様で面白い。

よににす——「世に似ない」世に類がない」

よにふ——「世に生きながらへる」世渡りする」

——さらでも、よにふるわざのいとまなくて、(松屋文集)——さうでなくても、世渡りする仕事に暇がなくて、

よばなる——「浮世を離れる」俗界を離れる」

よをつくす——「一生を終へる」

よせ

(名) (一)「寄せること」集合」(二)「心を寄せること」信頼」人器」(三)「身を寄せること」ろ」
「後見」背景」(四)「縁故」ゆかり」(五)「わけ」理由」

——(二)位高く、時世のよせ今一きはまされる人、(源氏物語)——信頼

—(三)當代の御はらからにて、今少しよせ重く。(増鏡)

—(四)させる事のよせなけれども、女院の御所など借り申す故實なりとぞ。(徒然草)——縁故

わく

わきまふ わいだむ(他動) 「分ける」「區別する」「判別する」

—さらに夢うつつともわきがたし。(雨月物語)——全くこれが夢か本當か區別がつけにくい。

わき——「分ける事」「區別」「差」

—身には絹布のわきも見えぬものを結びてぞ著たりける。(平家物語)——區別

わきて——「別して」「特に」

わきだめ わいだめ——「區別」「差別」「わきま(く)」

わかつ——「別にする」「判別する」

わかち——「區別」「分別」

わかる——(一)「區別がつく」「明かになる」「諒解する」(二)「離れる」

—(一)定かにも見えわかず。(東關紀行)——はつきり見わけがつかない。

おもひわく——「分別する」「判別する」

ききわく——(一)「判別して聞きとる」(二)「聞いて諒解する」

みえわく——「はつきり見える」

——鏡の山はありとくも、涙に曇りて見えわかつ。(太平記)——「はつきり見えない」

たがふ

(自動・他動) (一)「自動、相違する」従はない」(二)「他動、相違さす」従はない様にする」

たがひめ——「行き違ひ」「差違」

ひきたがふ——「違へる」「反対にする」

ことわる

(他動)「言割る」意。(一)「言ひわけける」判別する」(二)「道理を説く」理由を告げる」

——(一)「よしあしをことわり言はむは、(琴後集)——判断する

ことわり——(一)「道理」すぢ「わけ」理由」(二)「當然」勿論」尤もなこと」

——(一)「人の身の上世の中のことわりなどを、(玉降間)——道理

ことわりにもすぐ、ことわりすぐ——「普通の道理を越す」道理尤もである」

また——(一)「とりきめる事」とり行ふこと」處置」(二)「是非の判定」議定」「訴訟」(三)「指揮」

「指圖」(四)「評判」(五)「報告」通信」(六)「教義」道理」

—(一)同じくは彼の事沙汰しておきて、(徒然草)——處置

—(四)世の人もいひさたり。(増鏡)——評判

—(六)或時は眞言の深き沙汰、(増鏡)——教義

わりなし——ことわりなしの義。(一)「道理にかなつてゐない」「無理である」「分別がない」(二)「

通りでない」「甚だしい」(三)「堪へがたい」「仕方がない」「困つたことである」

—(一)わりなく見むとする人もなし。(徒然草)——無理に見ようとする人もない。

—(二)わりなくまつはさせ給ふあまりに、(源氏物語)——無暗と絶えず側につき添はせられる結

果、

しるべ

(名) (一)「知るたより」「たより」「導き」「手引き」「指南」(二)「案内する事」「案内人」

—(一)「何のわざにも、古よりしるべとするのりありて、(琴後集)——昔からたよりとすべき法則があつて、

—(二)「御道しるべ仕るべく候。(太平記)——案内

しるべがほ——「案内願」

みちしるべ——(一)「道程標」(二)「道案内」先導

しをり——「山路などで道のしるべとする爲に木の枝を折り、目じるしとするもの」

まし

(形) (一)「愛すべきである」(二)「惜しい」

——(一)かくばかりをしと思ふ夜を、(古今集)——「これほどいいなあと思はれるこの夜を、

をしけし——「惜しい」

あたらし

(形)「惜しい」

あたら あつたら——「惜しい」「折角の」といふ意を表はす接頭語。

——あたら夜の月なれば、(文訓)——「折角のよい」

まかなふ

(他動) (一)「調へる」「設ける」(二)「饗應する」「供給する」

まかなひ——(一)「調へること」(二)「食事を調へること」「その人」(三)「給仕する人」「その人」

とりまかなふ——(一)「調へる」「設ける」「世話する」(二)「饗應する」

とりまかなひ——「調へること」「取扱ひ方」「仕方」

かまふ

(他動) (一)「組立てて造る」「造る」(二)「豫め用意する」「用心する」(三)「誣ひる」「嘘を言

ふ」(四)「身支度する」

—(一)北の障子の上に小さき棚をかまへて、(方丈記)

—(二)院のおぼし構ふること、(増鏡)——お企てになる

かまへて あひかまへて——「用意して」注意して「吃度」決して

—あひかまへてすかし出しまぬらせて、(保元物語)——注意して誘ひ出し申して

たばかり——たは接頭語。(一)「計る」考へる「工夫する」(二)「欺く」ごまかす」(三)「相談」

—(一)實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。(増鏡)——計畧をめぐらす

—(二)深くたばかり飾れることは、(徒然草)——深くごまかして飾つてゐる事は、

たばかり——(一)「工夫」計畫「思案」(二)「欺く」こと「謀計」

たくむ——(一)「工夫する」(二)「企む」

たくみ——(一)「たくむ」こと「てだて」(二)「わざ」職人「大工」技術家」

—(二)よろづの道のたくみ、(徒然草)——技術家

こころふ——(一)「慰める」すかす」(二)「取りつくろふ」とりなす「飾る」(三)「造る」構へる」

(四)「支度する」「工夫する」

いそぎ

(名) (一)「急ぐこと」「急用」 (二)「準備」

—(一)「あらぬいそぎまづ出で来て、(徒然草)——思ひがけぬ急用がまづ起つて来て、

—(二)「御いそぎの近づくにつけても、(増鏡)」

よそふ

よそほふ(他動) (一)「支度する」「準備する」 (二)「飾る」「飾りたてる」「装ふ」

よそひ—前條の名詞形。(一)「支度」「準備」 (二)「飾り」「服装」

—(一)「百舟千舟漕ぎきほふ中に、……その出入のよそひのさかりなる事は、(権園文集)——支度

—(二)いと涼しげなるよそひにて、(権園文集)——服装

よそほひ—(一)「支度」「準備」 (二)「裝飾」「服装」 (三)「趣」「風情」「様子」 (四)「設備」「工夫」

—(二)「白き御よそほひに改めて、(増鏡)——服装

—(三)古のよしあるものはよそほひありてうるはしかれど、(琴後集)——昔のいはれのあるもの

は風情があつて立派であるが、

よそほし—「装ひ立派である」「美しい」「飾り立てる」「重々しむ」

—宮の御車にやりつづけて、よそはしくめでたき御事なり。(増鏡) — 宮の御車のあとから車を進めて美しく結構な御事である。

よそほしげ — 「美々しげ」「重々しげ」「莊重なさま」

とりよそひ — 「體裁」「装ひ」

さうぞく — 「裝束する」「飾る」

— えもいはずさうぞきて参れり。(増鏡)

さうぞきたつ — 「飾りたてる」「服装を整へる」

さうぞく — (一)「裝束」「着物」(二)「裝飾」「盛装すること」「身仕度」「仕度」

— (一)夜はきららかに、花やかなるさうぞくいとよし。(徒然草) — 着物

— (二)さうぞくしたる球敷かいまさぐり。(枕草子) — 飾り

しつらふ — 「設ける」「構へる」「飾る」

— 一間をば寢所にしつらひ。(平家物語)

しつらひ — 「設備」「飾り」「くくり」

—寢殿のしつらひ、或は南枕、常のことなり。(徒然草) つくり

けはひ——(一)「様子」「そぶり」(二)「身なり」「化粧」

—(一)名だたる山川のけはひを、(琴後集)——各高い山や川の様子

やつる

(自動) (一)「身が衰へる」「瘦せ衰へる」(二)「様子がみすばらしくなる」「姿が變る」「見苦しくなる」「粗末である」

—(一)ことよろしき女のいたうやつれたりけるが、(十訓抄)

—(二)北の對よりやつれたる女車のまゝにて、(増鏡)——粗末な

やつす——(一)「姿をみすばらしくかへる」「姿を目立たぬやうにする」(二)「瘦せる程に思ひ憐む」

「心身を碎く」(三)「容姿をつくる」「しやれる」

ふくだむ

(自動) 「そそけ立つ」「亂れさわぐ」「ぶくぶくになる」
—鬚の少しふくだみたれば、(枕草子)——ばらばら亂れる

ふくだむ——他動詞、「ふくだませる」

に

(助) (一)體言に連る場合、「に」「にて」「で」「に於て」「によつて」(二)連體形に連る場合、「時」

「折」所「物」「人」等、種々の體言を補足して考ふべき事がある。(二)の「ものに」「ものを」「ものなのに」等、逆態を表はす。(四)「ので」「から」「それで」「につれて」「ところ」等、順態の意を表はす。(五)竝立・添加・比較の意を表はす。

—(一)仁和寺にある法師、(徒然草)——仁和寺に於て

—神は和歌にめで給ふものなり。(十訓抄)——によつて

—(二)第一の御子四つになり給ふに、(増鏡)——御方に

—(三)み山には松の雪だに消えなくに、(古今集)——のに

—(四)法藏のやぶれて侍るに、修理して給はらん。(十訓抄)——ので

—(五)山吹のきよげに藤のおほつかなき様したる、(徒然草)——様子や

さながら (副) (一)「そのまま」「そっくり」(二)「丁度」「あたかも」(三)「悉く」「皆」

—(一)綾羅錦繡のよそはひもさながら夢にぞなりにける。(平家物語)

—(二)さながら如月彌生の空おほえて、(蘿月庵文稿)——丁度二三月の空あひの様に見えて、

—(三)七珍萬寶さながら灰燼となりにき。(方丈記)

みなながら　みながら——「皆悉く」

——秋過ぎて、草はみながら枯れ果てて、（玉勝間）

かくながら——「このままで」

ひと

（副）「隙間もなく」「ゆるみなく」「しつかりと」

ひしひし——（一）「少しの隙間もなく」「びつたりと」（二）「忌弾なく」「容赦なく」

——（一）ひしひしと淨衣の袖にとりつきて、（源平盛衰記）——びつたりと

たてまつる

（他動）（一）「さしあげる」（二）「著せまゐらす」「乗せ奉る」等、貴人にはたらきかける

動作の鄭重語。（三）貴人自身の動作を敬ひ、「召し給ふ」「著給ふ」「召しあがる」「お乗りになる」等。

——（二）夜の明けはてぬさきに御舟にたてまつれ。（源氏物語）——お乗せ申しあげよ

——（三）新院青色の御袍たてまつれり。（増鏡）——お着になつてゐる

たてまつりもの——（一）「さしあげるもの」（二）「お召しになるもの」

たまふ

（助動）四段活用形式の場合は他人の動作に關する動詞に添へて敬意を表はす。

たまふ たうぶ——下二段活用形式のものは、自分の動作に關する動詞に添へて、卑下・謙讓の意を表はす。前條のたまふと混同してはならぬ。

年のつもりたらむ人もなと思ひ給ふるに、(増鏡)……年をとつた人がぬればよいがと思つてぬましたところ、

をりから

(名)(副) 「その機會」その場合「折が折」

—折からの思ひがけぬ心地して、(徒然草)……折か折なので

をりしも——「丁度その折」

をりふし——(一)「時節」「季節」(二)「丁度その折」その場合々々

—(一)をりふしのうつり變ること。(徒然草)……季節

—(二)康頼入道も折ふしあはれに覺えて、(平家物語)……丁度その折

をりにふる——「時に従ふ」場合に應ずる」

ときしも

(副) 「丁度その時」

ときしもあれ——「時も時」折も折」

ときなる——「其時になる」「時刻が来る」

ときにとりて——「其時に當つて」「或場合に」

——時にとりて物に感ずることなきにあらず。(徒然草)——或場合に

ともあるとき

(副)「ひよつとした時」「何かの時」

——朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時われに心おき、(徒然草)

ともすれば——「どうかすると」

あるは

(接)「或は」

——あるはねたむ心のすすめるは、(玉勝間)

さ

しか(副)「さう」「その様」「左様」

——まことにさにこそ候ひけれ。(徒然草)——ほんとに左様であります

さらす(接)「さう」「ない」「別である」「(一)」「何氣ない」「何事もない」「

——(一)鳥部山、舟岡、さらぬ野山にも。(徒然草)——外の

——(二)さらぬ體にもてなし。(藩翰譜)——何氣ない

「さうで——さあらの約。」さうでなくて」

「さうでだに、さあらぬだに、さなだに——」さうでなくてさう「たらでさう」

「さうでも——」さうでなくても」

—花盛はさらなり、さらでも、(權園文集)

「さうで——」(一)「その様にして」「そのままに」「(二)「さうしてそれから」「その外」

—(一)「さうでもさうはにて、あつまゝぞ告げやりける。(増鏡)——そのままにしておかないので

「さうで——」そのままにしてゐる」

—疑はしながらさてあるなどは、(玉勝間)

「さうで——」その儘にしておく」

「さうで——」それでも」「そのまま」

「さうで——」さうでもありぬし——」それで足りる「満足である」

「さうで——」さうも」「それ程も」「さ程」

「さうで——」(一)「然うばかり」「その様なものばかり」「一概に」「(二)「それ程」「別段」

さなり——(一)「さうである」(二)「當然である」

さばかり——(一)「それだけ」それつきり」(二)「それほど」それ程大そう」大そう」

さは——「それは」さうは」その様には」

——さは此の杜なりけりと思ふもうれしく。(樞園文集)

さはいい——「さうは言ふものの」「やはり」

——さはいい——こは我身一つのすさみなり。(琴後集)——さうは言ふもの、これは自分丈の氣向き
ことに過ぎない。

さり

しかり(自動) さありの約。「さうである」その通りである」

——さゝからさぞ。(徒然草)

さりげ——「さういふ様子」

さりげなし——「さういふ風がない」素知らぬ風をする」

——さりげなくてなあれ。(増鏡)——そ知らぬ風をしてゐなさいよ。

さりともし——「さうあつても」それにしても」

「さりともたやすくは破れじと、(増鏡)——それにしても

さりぬべし——(一)「さうしてもよい」それでよからう」都合よい」(二)「適當である」相應である」

さる——(一)「然る」さういふ」(二)「尤もな」

——(二)「さるやうこそあるらめと、(十訓抄)——尤もな理由があるのだらうと、

さるかた——「その方」それ相應の方面」

——さるかたになまめかしく、(増鏡)——それ相應に上品に、

さること——(一)「その様な事」(二)「尤もな事」勿論の事」

——(二)「それは一わたりはさることなれども、(玉勝間)——それは一應尤もな事であるが、

さるは——(一)「それは」(二)「さうだと」それ故に」(三)「ではあるが」それでめて」(四)「さて

よ」

——(三)「さるはあととふわざも絶えぬれば、(徒然草)——たけれど跡を申ふことも絶えてしまふと

さるべし」しかるべし——(一)「相應である」すぐれてゐる」都合よい」(二)「さうなるべき縁で

ある」

—(一)さるべき験者どもおとしかれたりけるに、(十訓抄)——すぐれた修験者達が治しかれてゐたが、

—(二)さるべくて身の失すべき時にこそあんなれ。(増鏡)——さうなるべき因縁で、

さるほどに——「さうしてゐるうちに」「やがて」

さるまじ——「さうあつてはならぬ」「さうはあるまい」

—さるまじき御ふるまひも、(源氏物語)——不都合な

さるもの——(一)「然るべきもの」「尤もな事」(二)「相應な名聲や地位、藝能に達した人」

さるやう——「然る可き事柄」「相當のわけ」

さらず

(句)(一)さるが他動詞である場合は、「去らせない」「離さない」(二)さるが自動詞の場合には、「避けられない」「逃れられぬ」

—(一)うちがたなかつたばらなをさらず、(花月草紙)——刀を側から離さず、

—(二)えさらぬ馬道の戸をさしこめ、(源氏物語)——避けることの出来ない——是非通らねばな

らない

さらぬわかれ——「避け得られぬ別れ」「死別」

一世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと祈る人の子のため（古今集）——この世に死別といふものが無くしてほしいものだ。いつ迄も親が生き永らへてゐて欲しいと祈る子たるものの爲に

さがたし——（一）「去り難い」「離れ難い」「（二）「棄て難い」「已むを得ぬ」

——（一）去りがたきめをなど持ちたる者は、（方丈記）

——（二）さがたきはなむけなど、（奥の細道）——已むを得ぬ餓別など。

さりとこゝろなし——「通れるところがない」「辯解の言葉がない」

さも

（副）（一）「その様にも」「その通りに」「（二）「實に」「よくも」

——（一）いかでさもあらなむと念じをり。（菅笠日記）——どうかその様にあつて欲しいと願つてゐる。

さもあり——「尤もである」

さもあらばあれ さばれ——「ままよ」「仕方がない」

索

引

あ	あ	あがふ	あさがれひ	あさゆふ
あ	あ	あからさま	あさげ	あさり
あ	あ	あからめ	あさし	あさる
あ	あ	あからめごと	あさぢ	あさる
あ	あ	あがりたるよ	あさぢがやど	あさる
あ	あ	あかる	あさぢふ	あさる
あ	あ	あかれ	あさぢふの	あさる
あ	あ	あかれあかれ	あさぢふのやど	あさる
あ	あ	あがれるよ	あさにけに	あしびぎの
あ	あ	あきさる	あさひこ	あしべ
あ	あ	あきつかみ	あさま	あしらひ
あ	あ	あけくらす	あさまし	あしらふ
あ	あ	あけくる	あさむ	あじる
あ	あ	あげくれ	あさむ	あじる
あ	あ	あさあさし	あさむく	あじろぐるま
二二九	二二九	二〇九	二〇九	五二
一	一	二七〇	二五八	二二八
一三	一三	二七〇	二五八	二一〇
一三	一三	二七〇	二〇八	二一一
七五	七五	一八	一〇二	一五
七五	七五	二六九	一〇二	二七五
二八一	二八一	二六九	一〇二	二七五
二八一	二八一	一八	一〇二	二七五
二八一	二八一	一五	一三二	二七五
二八二	二八二	一四九	二〇九	八一
一三一	一三一	一五	二〇九	八一
一三一	一三一	一五	二〇九	五二
二二九	二二九	一五	二〇九	五二
二二九	二二九	二〇九	二〇九	五二

索

引

あ

一

あす	二〇八	あつかはし	五二	あなぐる	一九三	あへしらふ	八一
あそばさる	二四七	あつけし	五四	あなすゑ	二四三	あへなし	二四八
あそばす	二四六	あつたら	二九九	あなづらはし	五三	あへなむ	二四八
あそび	二四六	あづま	二七五	あなづる	五三	あま	一四六
あそぶ	二四六	あづまうど	二七五	あなり	二四九	あまた	一八七
あた	二七九	あづまぢ	二七五	あはつか	五四	あまたかへり	一八七
あだ	三一	あづまびと	二七五	あはつけし	五四	あまたたび	一八七
あだがたき	二七九	あと	一八	あはむ	二六五	あまたかみ	一四七
あだあだし	三一	あたと伊	一九	あはれ	八九	あまつそら	一四七
あだごと	三二	あたとふ	一九	あはれみ	八九	あまつびつぎ	一四七
あだし	三二	あたとむ	一九	あはれむ	八九	あまのはら	一四七
あだしごころ	三二	あとなし	一九	あひかまへて	三〇〇	あむ	一二八
あだしごと	三二	あとはかなし	一九	あびき	五二	あめ	一四六
あだな	三二	あな	八七	あひしらひ	八一	あめがした	一四六
あだびと	三二	あなり	八七	あひしらふ	八一	あめつち	一四六
あたら	二九九	あなうら	二四三	あふ	二四七	あめのした	一四六
あたらし	二九九	あなかしこ	八八	あぶす	八九	あや	一二〇
あぢきなし	七五	あながち	一三七	あへしらひ	八一	あやし	一〇〇

あやなし	一二〇	ありき	一七七	い	二四二	いささか	五〇
あやむ	一〇〇	ありく	一七七	いかが	二九一	いささめ	五一
あゆぶ	八九	ありさま	一五六	いかがし	二九一	いさまし	一〇八
あらあら	二一九	ありさりて	二五〇	いかがせん	二九一	いさまし	二一九
あらがひ	一〇七	ありとある	二五〇	いかし	六九	いさむ	一〇八
あらがふ	一〇七	ありのすさび	三〇	いかで	八六	いさよひ	一二九
あらけなし	二五二	ありのすさみ	三〇	いかでか	八六	いさよひのつき	一二九
あらぬ	二三七	ありふ	二五〇	いかにぞや	二九一	いさよふ	一二九
あらは	五〇	ある	二五〇	いぎたなし	二四二	いさよふつき	一二九
あらひとがみ	一四九	あるかなきか	二四二	いきとしいけるもの	二五〇	いさり	一九二
あらまし	二一九	あるじ	八一	いく	二八五	いさりび	一九二
あらまし	二五一	あるじまうげ	八一	いく	二八五	いさりぶね	一九二
あらまじごと	二一九	あるなり	二四九	いくさ	一三七	いさる	一九二
あらまじごと	二五一	あるにもあらぬ	二四二	いくそ	一八四	いさな	二五三
あらます	二五一	あるは	三〇七	いくそたび	一八四	いさなしさ	二五三
あららか	二一九	あをひとくさ	一四八	いくそばく	一八四	いし	六一
ありあけのつき	一三〇			いさかふ	一〇八	いそぎ	三〇一
ありありて	二五〇	い				いそし	二八〇

いそしき	二八〇	いづ	二八五	いといたう	二九〇	いなむ	九〇
いそしむ	二八〇	いつかう	二三五	いといたく	二九〇	いにしへ	八
いたし	二九〇	いつく	九四	いときなし	二五二	いぬ	七
いたつかはし	五三	いつくし	七〇	いとけし	二五二	いはふ	七一
いたづき	一九二	いつくし	九六	いとけなし	二五二	いひ	二五八
いたづく	一九二	いつくしび	九六	いとせめて	二九一	いひがひなし	一七四
いたづくら	三〇	いつくしぶ	二五七	いとど	二九〇	いひくたす	二三六
いたづくらごと	三〇	いつくしみ	二五七	いとどし	二九〇	いひけつ	二四〇
いたはし	五四	いつくしむ	二五七	いとなし	二九一	いひしらす	一七四
いたまし	二七九	いづくはあれど	四	いとなし	二九一	いひしろふ	一三六
いたむ	一〇八	いづくはあれど	三	いとなみ	八〇	いふかたなし	一七四
いたむ	二七九	いづくはあれど	三	いとなむ	八〇	いふがひなし	一七四
いたや	九九	いつしか	八六	いとほし	九五	いぶせし	一九六
いたり	二五七	いつち	三	いとほし	九五	いへあるじ	八一
いちじん	一四九	いつとなし	六	いとほしみ	九五	いへあるじ	八一
いちのおとど	一五一	いつはあれど	五	いとほしむ	九五	いへづと	二五八
いちのひと	一五一	いづら	三	いどまし	一〇八	いへとじ	八一
いちばやし	一〇五	いづれとなし	五	いどむ	一〇八	いへばえに	一七五
		いと	二九〇	いなぶ	九〇	いへばおろかなり	一七四

いへばさらなり	一七四	いと	一四二	うしろみる	二〇〇	うちたえ	二三四
いへぬ	九九	いろは	一四二	うしろむ	二〇〇	うちつけ	二八四
いまし	一	いろふ	一三六	うしろめたさ	一九九	うちつけごと	二八四
います	二七二	いわく	二五二	うしろめたし	一九九	うちつけめ	二八四
いますかり	二七二	いわけなし	二五二	うしろやすし	一九九	うちのうへ	一四九
いまそかり	二七二			うす	二四一	うちまかせ	六三
いまふ	七一	う		うそぶく	二一〇	うちまかせ	六三
いままわり	二七二	うから	一二三	うそむく	二一〇	うつくし	九二
いみじ	二八九	うからやから	一二三	うたかた	二六一	うつくしげ	九二
いみじげ	二九〇	うかる	二八三	うたげ	二五八	うつくしび	九三
いもせ	一二四	うきめ	一四二	うたげのむしろ	二五八	うつくしぶ	九二
いもひ	七一	うきよ	一四二	うたて	一四三	うつくしむ	九三
いらふ	一〇六	うきよのちり	一四三	うたてさ	一四三	うつくしむ	九六
いらへ	一〇六	うく	二八三	うち	一四八	うつしごころ	二一四
いるさ	一六	うさ	一四二	うち	六三	うつしのみ	二一四
いろ	九一	うし	一	うちあふ	六三	うつしみの	二一四
いろいろ	一三五	うし	一四二	うちあり	六三	うつしよ	二一四
いろせ	一二四	うしろみ	二〇〇	うちしめる	二六	うつせみ	二一四

うつせみの	九二	うへのをのこ	一五〇	うらやま	一七八	えならす	一七五
うつそみの	九二	うまい	二四二	うらわ	一七八	えもいはず	一七五
うつつ	二二三	うまし	六一	うるせし	九四	えん	九一
うつつなし	二二三	うましくに	六一	うるはし	九三	えんだつ	九一
うつはもの	七二	うまのはなむけ	一七九	うるはしむ	九三		
うつらふ	六五	うまや	一七九	うれ	二〇七	お	
うつる	六七	うまやち	一七九	うれたし	一四三	おいしらふ	一六四
うつろ	一六一	うみづら	一七八	うれはし	一四三	おいしる	一六四
うつろひ	六六	うむかし	九六	うんす	二三七	おいづく	一三
うつろふ	六七	うむかしむ	九六			おいばむ	六五
うとし	一六一	うち	二〇九	え		おいちか	二二〇
うとまし	一六二	うち	二五一		一七三	おいちく	二一六
うとましげ	一六二	うら	二二四	えう	二五四	おうな	二二四
うとむ	一六二	うらなし	二二七	えうなし	二五四	おきつ	二二四
うなぬ	一六八	うらびる	二二七	えうなし	二五四	おきて	二二四
うなぬこ	一六八	うらぶる	二二七	えせもの	一六四	おきな	一二四
うばたまの	一二九	うらみ	一六二	えせものしり	一六四	おきふし	一五
うへなし	二四四	うらむ	一六二	えと	一三二	おくつき	一二六

おくとえ	一四四	おはします	二七三	おぼす	一七三	おましどころ	二七三
おとど	一五一	おのれと	一三二	おほす	九六	おぼるげ	一九七
おとづれ	二二	おのづから	一三二	おほしまよふ	一七三	おぼゆ	一七二
おとづる	二二	おのがむきむき	一三三	おぼしなげく	一七三	おぼゆ	一七一
おと	二一	おのがちりちり	一三三	おぼしめす	一七三	おほやけのうしろみ	二〇一
おぢなし	二五三	おのがじし	一三三	おほしたつ	九五	おほやけ	一四八
おぢ	二二〇	おのがさまさま	一三三	おほしたつ	九五	おほやう	二二〇
おぞまし	一〇五	おとや	一八七	おほけなし	一〇六	おほめく	一九七
おぞし	一〇五	おとなきく	二二	おほきおとど	一五一	おほめかす	一九七
おぞし	一〇五	おとなぶ	一六八	おほかた	二二〇	おほみけ	二五八
おそし	一〇五	おとなふ	二二	おほおぼし	一九六	おほほる	二四一
おすまし	一六二	おとなひ	二二	おほえ	一七二	おほほす	一七三
おすし	一六二	おとなだつ	一六八	おふなおふな	二二六	おほほし	一九六
おしなべて	二三一	おとなし	一六八	おふけなし	一〇五	おほとのごもる	一五一
おこたる	七七	おとなおとなし	一六八	おびる	二一七	おほどく	二二〇
おこたり	七七	おとな	一六八	おひしく	二八八	おほどか	二二〇
おくやま	一八〇	おととひ	一二四	おはす	二七二	おぼつかなし	一九六

おます	二七三	おもひいる	一一八	おもほえず	一七二	が	八六
おむかし	九六	おもひくたす	二二六	おもほす	一七二	がい	六四
おむかしき	九六	おもひくづほる	二二六	おもむけ	二二四	がいしめる	二六
おむかしむ	九六	おもひくづなる	二二七	おももち	一五六	がいそそぶる	六五
おもえり	一五七	おもひしもしるく	一九一	おもやう	一五六	かいつくろひ	六五
おしがくす	一一六			おや	一一四	かいつくろふ	六五
おもし	六九	おもひげがす	二二六	おゆらく	二一六	かいなで	六五
おもだたし	一五八	おもひなし	一一八	およづく	二一六	かいやる	六五
おもておこし	一五七	おもひなす	一一八	おりたつ	五八	かうがふ	一〇五
おもておこす	一五七	おもひのどむ	二二六	おりぬのみかど	五八	かうがへ	一〇六
おもてぶせ	一五七	おもひのほか	二五一	おりぬる	五八	かうす	一〇六
おもてふす	一五七	おもひまどふ	九八	おりおる	二一九	かがづらふ	六六
おもなし	一五七	おもひむつぶ	一六一	おりか	一七四	かがなべて	九
おももの	五八	おもひわく	二九六	おんとのこもる	一五一	かがやかし	一一六
おもほす	二五一	おもひわぶ	一四四			かがやく	一一六
おもはぬほか	二五二	おもひなやる	一一九	か	一	かき	六四
おもはゆし	一一五	おもぶせ	一五七	か	一	かきくらす	一七
おもひあがる	一〇五	おもふどち	二	か	八七	かきくる	一七

かきつ	二五五	かすかす	一八三	かたはらめ	二六四	かつがつ	二六三
かきほ	二五五	かすそふ	一八三	かたへ	二六三	かづく	五四
かぎり	二五六	かすならす	一八三	かたほ	一五五	かづく	五四
かくながら	三〇五	かすまふ	一八三	かたまし	一〇九	かて	二五九
かくろふ	六七	かすをつくす	一八三	かたましさ	一〇九	かて	二〇〇
かくろへばむ	六七	かた	一五四	かたみ	二五七	かど	一一一
かけ	一九二	かた	一八八	かたみ	一三四	かどかどし	一一一
かけす	二三四	かたうど	一五四	かたむ	一〇九	かどかどし	一一一
かこか	一七六	かたうらみ	一五四	かたらひ	六九	かどめく	一一一
かこちがほ	一六三	かたおち	一五四	かたらひぐさ	六九	かな	八七
かこつ	一六二	かたがた	一八八	かたらふ	六九	かな	八六
かごと	一六三	かたかど	一一一	かたりぐさ	六九	かなし	九〇
かごとがまし	一六三	かたくな	二五二	かたる	二二九	かなしび	九〇
かしがまし	二四	かたくなし	二五二	かたるおきな	二二九	かなしぶ	九〇
かしこし	八八	かたち	一五五	かち	一七七	かなしみ	九〇
かしこころ	八八	かたなり	一五五	かつ	二六三	かなしむ	九〇
かしづく	九四	かたは	一五五	かつ	二六三	かにかくに	六
かしまし	二四	かたはらいたし	二六四	かつう	二六三	かにかくにも	七

索

引か

九

かれごと	二五一	かまふ	二九八	かれいひ	二五八	きさす	二七三
かはづら	一七八	かまへて	三〇〇	かれがれ	二六八	きしろふ	六九
かはゆし	九一	かみさぶ	七一	かれふ	一一二	きぞ	一六
かはらか	二八七	かみつよ	一八	かんだちめ	一五一	きだ	五一
かはらふ	六六	かも	八七	き		きたのかた	八一
かひ	一七六	がも	八六	きえいる	二四一	きたのだい	八一
かひがひし	一二〇	かや	九九	きえかへる	九八	きたのまんどころ	八一
かひがひしげ	一二〇	から	二〇五	きえまどふ	九九	きのふけふ	一一
かひなし	二二〇	からくして	二〇〇	きき	九八	きは	一九一
かへさふ	六六	からし	二〇〇	ききわがむ	五七	きはぎはし	一九一
かへり	一八七	かり	二七四	ききわく	一一〇	きはこと	一九一
かへりごと	一八七	かりいほ	一七七	きこえ	二九七	きははし	一九一
かへりまをし	一八七	かりがれ	九七	きこえどつ	五七	きははか	一九一
かへりみ	二〇一	かりほ	九七	きこしめす	五八	きはだけし	一九一
かへるさ	一六	かる	二九四	きこしめす	五八	きはだけし	一九一
かま	二四	かれ	九九	きこしめす	五八	きはだけし	一九一
かまし	二四	かれい	二六八	きこしめす	五八	きはだけし	一九一
かまびすし	二四		二〇六	きこしめす	五七	きはだけし	一九一
			二五八	きざし	二七四	きよら	九四

きり	二二一	くたす	二三六	くまぐまし	二〇一	けおさる	六四
きらす	二二二	くだつ	一三〇	くまなし	二〇一	けおそろし	六四
きる	二二二	くだり	七八	くもぢ	一五〇	けし	二四九
く		くだりたるよ	一八	くものうへ	一五〇	けしうはあらず	二四九
くが	一八七	くだれるよ	一八	くものうへびと	一五〇	けしからず	二四九
くがぢ	一七七	くちすまぶ	三〇	くもらはし	五二	けしかり	二四九
くこ	五八	くちとし	三〇	くもぬ	一五〇	けしき	六八
くさ	一三五	くちをし	一〇四	くらす	一八	けしきだつ	六八
くさぐさ	一三五	くつ	一一九	くる	一七	けしきばかり	六八
くさのいほり	一〇二	くつす	二三七	くれ	一	けしきばむ	六四
くさのとびら	一〇二	くつばみ	二三七	くれがし	一	けちかし	六四
くさのとぼそ	一〇二	くづなる	二三七	くれふたがる	一七	けつ	二四〇
くさのまくら	一〇三	くにぶり	一九四	くれまどふ	一七	けながし	九
くさはひ	一三五	くれる	二二八	くんす	二三七	けに	二四五
くさまくら	一〇二	くひぜ	五一	け		けに	二一三
くす	二三七	くま	二〇一	けうとし	二四〇	げにくし	六四
ぐす	一三六	くまぐま	二七七		一六二	げにげにし	二一三
						げはひ	三〇三

案

引きくけ

一一

けふあす	一一	こころあり	一二七	こころのほか	二五二	こちたし	二九〇
けやけし	一九一	こころおく	一一八	こころばせ	二二五	こと	三二
		こころおくる	二二六	こころばへ	二二五	こと	二四四
		こころおくれ	二二六	こころひくし	二二六	ことぐま	一三五
		こころおごる	一〇五	こころまさり	二二九	ことごと	二四五
こころす	二三七	こころおそし	一〇五	こころもとなげ	一九八	ことごとし	二四七
こけのころも	一二五	こころおとり	一二九	こころもとなし	一九八	ことさら	二四五
こけのした	一二五	こころこと	一九一	こころやり	一九九	ことさらぶ	二四五
こけのたもと	一二五	こころしらび	二二八	こころやる	一九九	ことだつ	二四五
こけのむしろ	一二五	こころしらふ	二二八	こころゆく	二八一	ことたる	六〇
こごし	一〇三	こころだかし	二二六	こころよりほか	二五二	ことと	二四五
こごだ	一八四	こころづから	二四六	こころなつくす	二二六	こととはむ	二一
こごだく	一八四	こころづくし	二二六	こさかし	一〇四	こととふ	二一
こごのへ	一五〇	こころと	二四六	こしらふ	三〇〇	ことのほか	二五二
こごもと	一	こころとし	一〇四	こぜ	一六	ことふる	一一二
こごら	一八四	こころなぐさ	一一九	こたび	九〇	ことゆく	五九
こごろ	一二七	こころなし	二二八	こたみ	九〇	ことわざ	七九
こごろあがり	一〇五	こころにくし	一一八	こちごちし	二五三	ことわり	二九七
こごろあて	一二七						

ことわりすぐ	二九七	ころもで	一二三	さかしたつ	一〇四	さすが	二〇六
ことわりにもすぐ	二九七	こんす	二三七	さかしら	一〇四	さた	二九七
ことわる	二九七	さ		さかしらが	一〇四	さだ	二一五
こねれ	二〇七	さうざうし	三〇七	さかひ	二五五	さだすぐ	二一五
このも	三	さうぞきたつ	一六一	さかる	二六八	さち	六〇
このもかのも	三	さうどく	三〇二	さきく	六〇	さてあり	三〇八
ごへん	一	さうなし	二二九	さきはひ	六	さてありぬべし	三〇八
こまか	二八五	ざえ	二〇二	さきはふ	六〇	さておく	三〇八
こまやか	二八六	ざそおふ	一〇三	さく	二六九	さても	三〇八
こめかし	一一四	ざえかへる	一〇三	さごろも	一二三	さてもありぬべし	三〇八
こめく	一一四	さが	九九	さざなみの	二〇	さてばなる	一八一
こもらふ	六六	さか	一〇九	さしいらへ	一〇六	さとぶ	一八一
こよなし	二四四	さか	一〇四	さしおく	一〇六	さながら	三〇四
これぞこの	三	さか	一〇三	さしこゆ	一〇六	さなきだに	三〇八
これやこの	三	さかし	一〇三	さしすぐ	一〇六	さなり	三〇九
ころはひ	六七	さかしがる	一〇三	さしすぐす	一〇六	ざなり	二五〇
ころほひ	六七	さかしさ	一〇四	さしも	三〇八	さのみ	三〇八
				さしもどく	一〇七	さば	三〇九

さはいへ	三〇九	さらで	三〇八	さるかた	三一〇	しかり	三〇九
さばかり	三〇九	さらでだに	三〇八	さること	三一〇	しかるべし	三一〇
さはらふ	二八七	さらでも	三〇八	さるは	三一〇	しき	二八八
さばれ	三一二	さらなり	一七五	さるべし	三一〇	しきなみ	二八八
さぶらふ	五五	さらにもいはず	一七五	さるほどに	三一〇	しきる	二八八
さへ	二〇五	さらぬだに	三〇八	さるまじ	三一〇	しく	二八八
さまかたち	一五六	さらぬわかれ	三一〇	さるもの	三一〇	しぐる	二七
さむけし	五四	さらぼふ	一六四	さるやう	三一〇	しぐれ	二七
さも	三一二	さがたし	三〇九	ざれごと	二二七	しげし	二七
さもあればあれ	三一二	さがたし	三〇九	ざればむ	二二八	しげみ	二八
さもあり	三一二	さりげ	三〇九	さをしか	一一	しじま	二〇五
さゆ	二八	さりげなし	三〇九	し		しぜん	一三二
さよ	一一	さりどころなし	三〇九	しいだす	二八五	しぞく	二七〇
さよころも	一一	さりとも	三〇九	しいづ	二八五	したたか	七〇
さよしぐれ	一一	さりぬべし	三一〇	しかしながら	一五九	したたむ	七九
さよちどり	一一	さる	五	しかすがに	二〇六	したりがほ	一四〇
さらす	三一一	さる	二二七	しがらむ	五二	しづえ	一〇〇
さらす	三一一						二〇七

じつかん	一三二	しのびごと	一九五	しもさま	八三	す	二五四
しづのめ	一〇一	しのぶ	一九五	しらむ	二六六	す	二五四
しづのを	一〇〇	しのぶ	一九五	しりくち	八	す	二五四
しつらひ	八〇	しばしば	二八八	しりへ	八	す	二七七
	三〇二	しばなく	二八八	しる	一六四	すがすが	二七七
しつらふ	八〇	しばのと	一〇一	しるし	一八	すがすがし	二七七
	三〇二	しばぶき	一九五	しるし	一九一	すがやか	二七七
しで	七二	しばぶく	一九五	しるべ	二九八	すがら	一二
しどけなし	一六七	じぶぜんのあるじ	一四九	しるべがほ	二九八	すががき	二五四
しどろに	一六七	じぶぜんのみみ	一四九	しれごと	一六四	すがはひ	二三八
しな	一二六	じふにし	一三一	しれもの	一六四	すくすくし	二八八
しなおくる	一二六	しほうみ	二五	しれわらひ	一六四	すくやか	二七八
しなびなし	一二六	しほち	二五	しろし	一九一	すくよか	二七八
しなびごと	一九五	しほならぬうみ	二六	しろたへ	九三	すさび	二九
しぬぶ	一九五	しほひ	二六	しろたへの	九三	すさぶ	二九
しののめ	一三一	しみみに	二八	しろふ	一三六	すさまじ	三〇
しののめ	一三一	しめやか	二七	しをり	二九九	すさみ	二九
しのばし	一九五	しめる	二六			すすし	九四

索引 しーす

すずろ	一三二	すめろぎ	一四七	せちぶん	二三五	そのともしらす	三
すずろく	一三三	すら	二〇五	せちゑ	二三五	そのともわかす	五
すずろごころ	一三三	すぬさう	二七四	せつに	二三五	そのなひ	二七九
すずろはし	一三三			せに	一四一	そのなふ	二七九
すそわ	一七八	せ		せばし	一四一	そのなふ	二七九
すだく	五九	せうそこ	二六七	せんざい	二五五	そくばく	一八四
すぢ	一四七	せうそこぶみ	二六五	せんとう	一四九	そくばく	一八四
すなだる	一九三	せき	九九	せんなし	二五四	そこひ	二五七
すのこ	五二	せきあく	二六	そ		そこら	一八四
すぶ	一四七	せきもり	九九			そぞろぐ	一三三
すべらぎ	一四八	せきや	九九		一二二	そぞろごと	一三三
すべがみ	一四七	せきやま	九九		二七〇	そぞろはし	一三三
すまふ	一〇八	せく	二六		二七〇	そのかみ	一八
すめがみ	一四七	せこ	一二四		二七〇	そのこととなく	六
すめみま	一四七	せし	一四一		一	そのふ	一〇二
すめらぎ	一四七	せち	二三五		三	そは	一〇三
すめらみくに	一四七	せちく	二三五		六	そば	一〇三
すめらみこと	一四七	せちに	二三五		五	そばち	一〇三

そばむ	二六四	そらみみ	一一〇	たちぬ	二三六
そばめ	二六四	そらめ	一一〇	たづ	二七五
そばめる	二六	それがし	一一〇	だつ	一三九
そばふる	二六	た		たづき	二九四
そばる	二二八	た	一	たてまつりもの	三〇五
そば	一〇一	た	八	たてまつる	三〇五
そばびと	一〇一	だいたいんどころ	一一	たどき	二九四
そばやま	一〇一	たうぶ	五五	たとしへ	一〇二
ぞめき	二八三	たうぶ	三〇五	たとしへなし	一七五
ぞめく	二八三	たえいる	二四一	たとしへなし	一七五
ぞめく	二八三	たえて	二三三	たどし	一七五
そらごころ	一〇九	たかし	二一七	たどたどし	一九八
そらごと	一〇九	たがふ	二九七	たどへなし	一〇七
そらだき	一〇九	たく	二一五	たどり	一七四
そらだきもの	一〇九	たぐひ	二二九	たどる	一九八
そらだのみ	一〇九	たぐふ	二二九	たなす	一四七
そらだのめ	一〇九	たくみ	三〇〇	たなすら	二四三
そらぬ	一〇九	たくむ	三〇〇	たなすゑ	二四三
				たくらぶ	七五
				たご	三
				ただ	一一
				ただ	一一八
				ただ	三一
				ただうど	一一
				ただびと	一一
				たたふ	九六
				たたへごと	九六
				たち	六八
				たちおくる	一一六
				たちならぶ	六四
				たちまさる	六三
				たちまちづき	一三〇
				たちもとほる	六四
				たちやすらふ	六四
				たちわかる	六三
				たどらぬ	二二六
				たどらぬ	二七五
				たどらぬ	一三九
				たどらぬ	二九四
				たどらぬ	三〇五
				たどらぬ	三〇五
				たどらぬ	二九四
				たどらぬ	一〇二
				たどらぬ	一七五
				たどらぬ	一七五
				たどらぬ	一九八
				たどらぬ	一〇七
				たどらぬ	一七四
				たどらぬ	一九八
				たどらぬ	一四七
				たどらぬ	二四三
				たどらぬ	二四三

案

引
そーた

たなり	二五〇	たまはす	五五	たちれの	一二三	ちしほ	一八五
だに	二〇五	たまふ	三〇五	たちちめ	一二三	ちぢ	一八五
たのむ	八二	たまふ	三〇五	たちちを	一二三	ちとせ	一八五
たのも	三	たまぼこの	六二	たらしし	六〇	ちひる	一八五
たばかり	七六	たまみづ	六二	たらふ	六〇	ちもと	一八五
たばかり	三〇〇	たまゆら	二六二	たれ	六一	ちよ	一八五
たばかり	七六	たむ	二一一	たれこむ	六一	ちりぼふ	六七
たばかり	三〇〇	たむく	一七八	たぬ	三	つ	
たばかり	二二八	たむけ	一七八	たんなり	二五〇	つ	
たばかり	七六	ためし	一七八	ち		つ	八四
たばかり	五五	たゆげ	二二三	ち		つ	一一
たばかり	二二八	たゆし	二二三	ちかおとり	一八四	つ	二五五
たばかり	五五	たゆたふ	二二四	ちかまさり	一二九	つ	二五五
たばかり	二二八	たゆみ	二二三	ちぐさ	一二九	つ	二五五
たばかり	六二	たゆむ	二二三	ちぐさ	一三五	つ	八三
たばかり	六二	たゆむ	二二三	ちぐさ	一三五	つ	八三
たばかり	六二	たより	二六七	ちさと	一八四	つ	八三
たばかり	六二	たらちれ	一二三	ちさと	一八四	つかさびと	八四

つかへまつる	八三	つつしむ	四九	つば	二五五	てけり	八四
つかへまつる	八三	つつまし	四九	つまぎ	二〇七	てすさび	三〇
つかまつる	八三	つつましげ	四九	つやつや	一九六	てすさか	三〇
つきかげ	一九二	つつみ	四九	つゆ	二六一	てふ	一五二
つきごろ	一〇	つつむ	四九	つゆのいのち	二六二	てぶ	一九四
つきづきし	二三三	つづらをり	一〇三	つゆのみ	二六二	てむ	八四
つきなし	二三三	つと	二五八	つゆばかり	二六二	てんじやうびと	一五〇
つきなみ	九	つどひ	五九	つら	二三三	と	
つきにけに	九	つとめて	一五	つらし	一三八	といふもかくいふも	七
つきよみ	一三一	つれ	一四五	つらつら	一一三	とうぐう	一四九
つくづく	一一三	つれなし	一四五	つる	二三三	とうづ	二八五
つくよ	一一三	つばもの	一三七	つれづれ	一一三	とかう	七
つくよみ	一三一	つばら	二八六	つれなし	一三八	とかく	七
つくるふ	一一七	つばらか	二八六	て		ときじ	五
つごもり	一一	つぶさ	二八六			ときしも	三〇六
つたなさ	二二〇	つぶつぶ	五〇		二〇	ときしもあれ	三〇六
つたなし	二二〇	つぶらか	五〇	てうど	一三八	ときしりがほ	一四〇
つつ	八四	つべし	八四	てき	八四		

索

引
つーてーと

一九

ときぞともなく	五	ところおく	一四一	とのぬどころ	一五一	ともかくも	二〇二
ときとなく	五	ところせし	一四一	とのぬびと	一五一	ともかかも	二〇二
ときなる	三〇七	ところをおく	一四一	とふ	二一	ともがら	一二三
ときにとりて	三〇七	とさまかうさま	二〇二	とふ	五九	ともし	二八二
ときめがす	一四〇	とし	一〇四	とぶ	一五二	ともすれば	三〇七
ときめきがほ	一四〇	としごろ	一〇	とぶらひ	二一	ともちどり	一一
ときめく	一四〇	としたく	二一五	とぶらふ	二一	ともなしちどり	一一
ときわかす	五	としなみ	一〇	とまや	九九	とやかう	七
とこ	二二六	としのは	九	とまり	一八〇	とやかく	七
とこ	一四五	どら	二	とまる	一八〇	とやま	一八〇
とこしなへ	一四五	とちむ	二五七	とみ	二八四	とよあしはら	一四六
とこしへ	一四五	とてもかくても	七	とむ	一九三	とよさかのぼり	一四六
とことは	一四五	とどこほり	二七七	とむらひ	二一	とよばたぐも	一四六
とこやみ	一四五	とどこほる	二七七	とむらふ	二一	とよみ	二二三
とこよ	一四五	とにかく	七	とめく	一九三	とよむ	二二三
とこよのくに	一四五	とにもかくにも	七	ともあるとき	三〇七	とよもす	二二三
ところう	一四〇	とのごもる	一五一	ともあれ	二〇二	とりあへず	二四七
ところえがほ	一四〇	とのぬ	一五一	ともあれかくもあれ	二〇二	とりぐす	一三七

とりしたたむ	七九	なから	一五九	なじ	一五二	などかは	一五二
とりどり	一三四	なからふ	二五〇	なじか	一五二	などで	一五二
とりのあと	二〇	ながれ	二四三	なじかは	一五二	などや	一五二
とりまかなひ	二九九	ながれてのよ	一八	なすらひ	二三二	ななめ	一四五
とりまかなふ	二九九	なく	二二二	なすらふ	二三二	なに	一五二
とりよそひ	三〇二	なげかし	一一四	なすらへ	二三二	なにおふ	一五八
		なげき	一一四	なすらふ	二三二	なにかは	一五二
		なげく	一一四	なぞらふ	二三二	なにくれ	二
		なごし	二二三	なだたし	一五八	なにくれとなく	二
な	一	なごみ	二二三	なだたる	一五八	なにとなし	六
な	一五二	なごむ	二二三	なつかし	一六〇	なにはあれど	三
な	一七三	なごやか	二二三	なつかしむ	一六〇	なにやくれや	二
な	一七一	なごり	二四三	なつかしむ	一六〇	なのみ	一四五
な	一五三	なごりなし	二四三	なつく	一六〇	なのみならず	一四六
な	一一三	なまけ	一三九	なづさふ	一六〇	なめる	二五
な	一一三	なまけおくる	一三九	なづむ	一六一	なぶ	二三一
な	一一四	なまけだつ	一三九	なでふ	一五二	なべて	二三一
な	一一四	なまけなまけし	一三九	など	一五二	なべに	二三一

案

引

と一な

二一

なほ	一五九	なめ	一七一	に	三〇三	ねばたまの	一二九
なほし	一五九	なめげ	一七一	にき	八四	ねべし	八四
なほなほし	一五九	なめし	一七一	にぎはし	二八三	ね	一七九
なほびと	一五九	なよびか	一八二	にぎはし	二八三	ねおびる	二一七
なま	一六四	なよびやか	一八二	にぎはふ	二八三	ねなく	一九三
なまさかし	一六五	なよぶ	一八二	にけり	八四	ねにたつ	一九四
なまさぶらひ	一六五	なよらか	一八二	になし	二四四	ねになく	一九四
なまじひ	一六五	ならひ	一九三	にほはし	一一二	ねびととのふ	一一六
なまなか	一六五	なり	二三八	にほひ	一一二	ねびまさる	一一六
なまなま	一六五	なりいづ	二三八	にほひやか	一一二	ねびる	一一六
なまめかし	九一	なりどころ	二三八	にほふ	一一二	ねぶ	二一六
なまめく	九一	なりはひ	二三八	によぶ	一一〇	ねぶたし	九〇
なみ	二五九	なれ	一	ぬ	二四二	ねぶる	九〇
なみす	一七一	なをう	一五八	ぬさ	七二	ねほる	二四一
なみある	二三一	なんでふ	一五二			ねまちづき	一三〇
なむ	二三一					ねろ	一七九
なむ	二三一						
なむ	二三一						

のたまふ	二四	のわきだつ	一八〇	はぐくみ	九五	はづかし	一六三
のづかま	一七七	のわけ	一八一	はぐくむ	九五	はづかしげ	一六三
のどか	二六六	は	八七	はこやのやま	一四九	はづかほし	一六三
のどけし	二六六	はえ	一一五	はし	五二	はづかほしげ	一六三
のどまる	二六六	はえげえし	一一五	はした	一五三	はづかはし	一六三
のどむ	二六六	はか	二七六	はしたなし	一五三	はつはつ	二八七
のどやか	二六六	はか	二五六	はしたなむ	一五四	はて	二五七
ののしる	二五六	はかなげ	一九六	はしため	一五四	はなやか	一一七
ののめく	二五	はかなし	一九六	はしたもの	一五四	はなやぐ	一一七
のばふ	二五	はかなぶ	一九五	はしぬ	五二	はふらかす	二四〇
のみ	二四	はかなむ	一九六	はたて	二五七	はふらす	二四〇
のらす	二四	はかばかし	二七六	はだち	二八八	はふり	一二五
のり	二二五	はからふ	七六	はだれ	二五	はふりわざ	一二五
のる	二四	はかり	七六	はちがまし	二八八	はふる	二四〇
のわき	一八一	はかり	一八九	はつ	一六三	はふる	一二五
		はかる	七六	はつか	二五七	はふる	二四〇
					二八七		

索引のーは

はべり	五五						
はも	八七						
はや	八七	ひがおぼえ	一〇〇	ひきでもの	七二	ひただ	一一
はや	一八七	ひがぎき	一一〇	ひきびき	一三四	ひたぶる	二三五
はや	八六	ひかげ	一九二	ひごらし	一二	ひたみち	二三五
はやく	二一八	ひがごころ	一一〇	ひごる	一〇	ひたやごもり	二三四
はやま	一八〇	ひがごころえ	一一一	ひさぐ	二三九	ひぢ	二五五
はやむ	二六五	ひがごと	一一一	ひさぐ	二三九	ひづ	二六
はゆし	一一五	ひがきだめ	一一一	ひしぐ	二三九	ひとぎき	五七
はらから	一二三	ひがひがし	一一一	ひしと	三〇五	ひとしなみ	一四八
はるく	二二一	ひがみみ	一一〇	ひしひし	三〇五	ひとだのめ	二三一
はるく	二二一	ひがむ	一一〇	ひじり	一四九	ひとふし	八二
はるさる	一五	ひがめ	一一〇	ひじりほふし	一五〇	ひとま	二〇三
はるのみや	一四九	ひがもの	一一〇	ひそか	五〇	ひとみな	三
はればれし	二二二	ひきし	一一〇	ひた	二三四	ひとむき	一三四
はれま	二二二	ひきしたたむ	二一七	ひたおむむき	二三四	ひとめ	二〇六
はれやか	二二二	ひきしるふ	七九	ひたかぶと	二三四	ひとやり	二〇六
はれるか	二二二	ひきたがふ	一三六	ひたくだり	二三四	ひとやりならず	二〇六
			二九七	ひたすら	二三五	ひとわき	一五七

ひとわらはれ	二〇四	ひるげ	二五八	ふつつか	二五三	ふるさと	一八一
ひとわりへ	二六四	びん	二六八	ふつに	二三四	ふるす	一一一
ひとわろし	二六五	びんなし	二六八	ふでのあと	二〇	ふるとし	一一二
ひな	一八二			ふでのしりとる	二〇	ふるぶ	一一一
ひなぶ	一八二	ふ		ふばこ	二一	ふるまひ	二三六
ひなみ	九	ふきしく	二八八	ふふむ	二九	ふるまふ	二三五
ひにけに	九	ふきまよふ	九七	ふまき	二〇		
ひにそへて	九	ふくだむ	二〇三	ふみ	二〇	ほ	二〇七
ひねもす	一一二	ふさほし	二三三	ふみで	二〇	ほ	二〇七
ひのおまし	二七三	ふさふ	二三三	ふり	一九二	ほい	二〇八
ひびかす	二三	ふし	一九〇	ふりくらす	一八	ほいなし	二〇八
ひびき	二三	ふしぶし	一九〇	ふりさく	二六九	ほうい	二〇八
ひびく	二三	ふしまちのつき	一三〇	ふりしく	二八八	ほかさま	二六六
ひむ	五〇	ふすぶ	一八一	ふりす	一一一	ほかほか	二六五
ひめがき	二五五	ふすま	二二七	ふりはふ	二四五	ほこらか	二〇八
ひめぐと	五〇	ふたつなし	二四四	ふりゆく	一一二	ほこらし	二〇八
ひめもす	一一二	ふちなみ	二〇七	ふる	一一一	ほこらほし	二〇八
ひらむ	二六四	ふづくゑ	二〇	ふるごと	三二	ほこりか	二〇八

索

引 ひーふーほ

二五

ほだし	五二	ま	まぎる	二二〇	ませ	二五四
ほだす	五一		まぎれ	二二〇	ませがき	二五四
ほつえ	二〇七		まく	八〇	まだき	二一八
ほど	一八八		まくほし	二〇八	またく	二一七
ほどぶ	二六		まけ	八〇	またし	二一七
ほとほと	二一二		まこと	二一二	まだし	二一七
ほどほど	一八九		まことし	二一二	またなし	二四四
ほなみ	二〇七		まことや	二一三	またのあした	一〇
ほにいづ	二〇七		まさきく	六〇	またのとし	一〇
ほの	二一一		まさぐる	一三六	またのひ	一〇
ほのか	二一一		まさし	二一三	まちまうく	八一
ほのめかす	二一一		まさなごと	二二八	まつはず	五一
ほのめく	二一二		まさなし	二二七	まつはる	五一
ほりす	二〇八		まじらひ	六九	まつぶさ	二八六
ほる	二四一		まじらふ	六九	まつろふ	六九
ほれ	二〇八	まじるし	一一五	までく	二七一	
ほれほれ	二四一	まじろぐ	一一四	まだか	二二七	
		ます	二七二	まだし	二八二	

まどはし	九七	まほし	二〇八	まる	一	みかど	一四九
まどはす	五一	まぼらふ	一一四	まろがす	二二六	みぎは	二六〇
まどはす	九七	まぼる	一一四	まろし	二二六	みくさ	二六〇
まどひ	九七	ままに	二五九	まろね	二二六	みくす	二六〇
まどふ	五一	まみ	一五七	まろぶ	二二六	みくにぶり	一九四
まどぬ	二二六	まめ	七七	まろぶし	二二六	みけ	二五八
まどぬる	二二七	まめごころ	七七	まろや	一〇二	みさく	二六九
まなこ	一五六	まめごと	七七	まぬのぼる	二七二	みじかし	二一七
まなこぬ	一五六	まめだつ	七八	まぬらす	二七二	みじろき	一一五
まなじり	一五六	まめびと	七八	まぬる	二七一	みじろく	一一五
まなぶ	二二六	まめまめし	七八	み		みそか	五〇
まなまに	二五九	まめやか	七八			みそなはす	七二
まねび	二二六	まもらふ	一四			みだいどころ	八一
まねぶ	二二五	まもる	一四			みだいばんどころ	八一
まのあたり	一五六	まよひ	九七	みいづ	一七九	みだりがはし	一六七
まげゆし	一一五	まよひいづ	九八	みえわく	二七五	みだりがはし	一六七
まへしりへ	八	まよふ	九七	みかぐる	二九七	みだりがはし	一六七
まほ	一五五	まれびと	八一	みかさ	二六一	みだりどころ	一六七
					二六〇	みだる	一六七

みちしるべ	二九九	みはるかす	二二一	みやまぎ	一〇〇	むつばふ	一六〇
みちすがら	一一二	みまかる	二七一	みゆ	二五四	むつび	一六一
みちみちし	一一一	みまそかり	二七二	みゆき	一〇〇	むつびづき	一六一
みづえ	六二	みみちかし	一一二	む		むつぶ	一六〇
みづく	二六一	みみどほし	一一二	みるめ	二〇三	むつる	一六〇
みづくぎ	二〇	みみふる	一一二	むかしおほゆ	一七二	むなし	三一
みづくぎのあと	二〇	みむろ	九九	むかしおほゆ	一七二	むれ	二七五
みづみづし	六二	みめ	一五六	むかしぶ	一八三	むれと	二七五
みてぐら	七二	みやづかふ	八二	むかしへ	八	むれむれし	二七六
みどりご	一二四	みやづかへ	八二	むきむき	一三四	むらい	一七一
みなかみ	二六一	みやび	二九三	むくつけし	一六二	むらぎえ	二八七
みながら	三〇五	みやびか	二九三	むぐらがかど	一〇一	むらぎゆ	二八七
みなぎは	二六一	みやびごころ	二九三	むぐらふ	一〇一	むらご	二八七
みなしも	二六一	みやびごと	二九三	むしろ	二五八	むらだつ	二八七
みなながら	三〇五	みやびやか	二九三	むすぶ	二七七	むらむら	二八七
みなびと	二	みやびを	二九三	むすぼる	二七六		
みなわ	二六一	みやぶ	二九三	むつかる	二二八	め	
みのも	三	みやま	一〇〇	むつき	一六一	めう	九一

めうつし	二〇三	めやすし	一九九	もとくだつ	一三〇	もろ	一八六
めかる	二六九			ものうし	一四三	もろもろ	一八六
めかれ	二六九	も		ものうし	二〇六		
めぐし	九〇		八七	ものさぶ	七一	や	
めざまし	二二九	もだ	二〇四	ものし	二四七	や	八七
めしぐす	一三七	もだす	二〇四	ものす	二四七	やう	二三八
めだつ	一一二	もち	一二九	ものふ	一三八	やうなし	二五四
めぢかし	一一二	もちづき	一二九	ものふる	一一二	やうやう	一三四
めづ	九六	もてあそびぐさ	一三五	ものゆゑ	二〇六	やがて	二六〇
めづらか	二二九	もてあつかひぐさ	一三五	もみづ	六七	やから	一二三
めづらしむ	二二九	もてあつかひぐさ	一三五	もも	一八五	やくなし	二五四
めでくつがへる	九七	もてかしづく	九四	もししき	一四九	やさし	一一六
めでたし	九七	もてなし	一一八	もししきの	一四九	やさしがる	一一六
めでたし	一一三	もてなす	一一七	ももち	一八五	やしほち	一八六
めとまる	一一三	もてはやす	一一六	もゆ	六七	やすい	二四二
めもあてられず	一一一	もどかし	一〇七	もよほし	一八三	やすげ	一九九
めもあや	一一〇	もどき	一〇七	もよほしがほ	一八三	やすげし	一九九
めもおよばず	一一〇	もどく	一〇七	もよほす	一八二	やすし	二〇〇

楽

引めーもーや

二九

やすし	一九九	やまがは	一七六	ゆ	ゆふ	七一		
やすらか	一九九	やまかひ	一七六		ゆかし	二八〇	ゆふぎ	二五八
やすらげし	一九九	やまぐち	一七六		ゆかしがる	二八一	ゆふさき	一五
やそしま	一八六	やまざと	一八一		ゆかり	九	ゆふさる	一四
やそぢ	一八六	やまだ	一七六		ゆきかひ	二七四	ゆふして	七二
やち	一八六	やまづら	一七八		ゆきかひ	二七四	ゆふづく	一四
やちぐさ	一八六	やまふ	二七八		ゆきかひぶみ	二七四	ゆふづくひ	一四
やちまた	一八六	やまぶみ	一七六		ゆきかふ	二七四	ゆふづくよ	一四
やちよ	一八六	やまわけごるも	一七六		ゆきくらす	一七	ゆふつけどり	七二
やつす	三〇三	やむことなし	一四六		ゆきくる	一七	ゆほびか	二八二
やつる	三〇三	やも	八七	ゆきつる	二三二	ゆみや	一三七	
やどり	一八〇	やもひ	二七八	ゆくさ	一六	ゆめうつつ	二一三	
やどる	一八〇	やりすつ	六五	ゆくりか	二八四	ゆめに	二六二	
やへ	一八六	やりど	二八〇	ゆくりかなし	二八四	ゆめばかり	二六二	
やへむぐら	一八六	やりみづ	二八〇	ゆくりなし	二八四	ゆめゆめ	二六二	
やまあひ	一七六	やる	二八〇	ゆする	二四	ゆゆし	二八九	
やまが	一七六	やる	六五	ゆたか	二八二	ゆゆしげ	二八九	
やまがつ	八七	やるかたなし	二八〇	ゆたげし	二八二	ゆる	一六七	

ゆるされ	一六七	よこなまり	二二一	よそほしげ	三〇二	よのきこえ	五七
ゆるし	一六七	よこなまる	二二一	よそほひ	三〇一	よのことごと	一六〇
ゆるび	二二一	よごもる	二一四	よそめ	二〇三	よのさが	一〇五
ゆるぶ	二二一	よごもる	一三〇	よそめ	二六四	よのつね	一四五
ゆるやか	二二一	よごる	一一	よたく	二一五	よばなる	二九五
ゆる	二九二	よざかり	二一四	よだけし	一七一	よばひ	二二五
ゆるづく	二九二	よさま	二一一	よただ	一一	よひとよ	三
ゆるぶ	二九二	よさり	一五	よづく	二一四	よぶかし	一三〇
ゆるゆるし	二九三	よし	一八九	よどみ	二七七	よべ	一六
ゆるよし	二九三	よすが	二九三	よどむ	二七七	よみ	一二五
		よすぎ	二九四	よなる	二九四	よみのくに	一二五
		よせ	二九五	よに	二九〇	よもぎがやど	一〇一
よ	二二四	よそ	二六五	よにあふ	二九四	よもぎふ	一〇一
ようせすば	二二一	よそぎき	二六五	よにあり	二九四	よもすがら	一一
よくせすば	二二一	よそごころ	二六五	よにしらす	二九四	よるのおとど	一五一
よこさま	二二一	よそひ	三〇一	よになし	二九五	よるのにしき	一二〇
よこさまのしに	二二一	よそふ	三〇一	よになし	二九五	よるのにしき	八
よこしま	二二一	よそほし	三〇一	よにふ	二九五	よるべ	一八六

索引 引 ゆーよ

よなこめて	一三〇	わかち	二九六	わざとめく	二四六	わが	一四四
よをつくす	二九五	わかつ	二九六	わた	一七九	わらばべ	一六八
ら		わかやか	一一七	わたくしごと	二〇一	わりなし	二九八
らうがはし	一六六	わかやぐ	一一七	わたくしのうしろみ		われか	二四二
らうがはしさ	一六六	わかる	二九六	わたくしもの	二〇一	われかひとか	二四二
らうたがる	六一	わき	二九六	わたくしもの	二〇一	われと	一三二
らうたげ	六一	わきだめ	二九六	わたつみ	一七九	われどち	二
らうたし	六〇	わきて	二九六	わたのかみ	一七九	われにもあらず	二四二
らうらうし	六一	わきまふ	二九六	わたのはら	一七九	われはがほ	一四〇
れ		わきみ	一	わづらばし	二七八	わろし	二二七
れいならず	二二五	わきもこ	一二四	わづらひ	二七八	わろびる	二二七
わ	一	わく	二九六	わづらふ	二七八	わろぶ	二二七
わいだむ	二九六	わくご	一二四	わど	一	わるもの	二二七
わいだめ	二九六	わくらばに	二八四	わぬれ			
		わざ	七九	わびし	一四三	ぬ	
		わざとがまし	二四六	わびしげ	一四四	ぬまちづき	一三〇
		わざとだつ	二四六	わびしむ	一四四	系	
				わびしちに	一四四		

をす	一四八		
をしげし	二九九		
をし	二九九	ををる	二八
をさ	一四〇	ををり	二九
をこめく	一六六	をりふし	三〇六
をこつく	一六六	をりにふる	三〇六
をこがまし	一六六	をりしりがほ	一四〇
をこ	一六五	をりしも	三〇六
をく	八一	をりから	三〇六
ながし	二〇六	なのへ	一七九
をうな	一二四	をぬ	一七七
を	二〇五	をぢなし	二五三
を		をちこち	七九
をみさかゆ	二八	をちこち	三
ゆまふ	二八	をちかた	三
をまひ	二八	をだ	一七七
をまし	二八	をすくに	一四八

不許複製

昭和十六年十二月廿五日印刷
昭和十六年十二月卅日發行



發行所
配給元

東京市神田區神保町一ノ三九
振替口座東京六七九四九番

有精堂出版部
（會員番號一三七〇六）
日本出版配給株式會社

著者
發行者
印刷者
印刷所

古語は斯く學ぶ
定價 金壹圓五拾錢

江波 照
山崎 清
東京市神田區神保町一ノ三九
大壁 早治
東京市京橋區湊町三丁目十二ノ一
株式會社 大倉印刷所
東京市京橋區湊町三丁目十二ノ一